かなど、やがて・つゞけてもおき、又中に詞をへだてゝもおくなり。そのつゞけておく、かもじは、今の世にもをさ〳〵誤ることはなきを、中に詞をへだてゝおくかもじをば誤りて、やもじをおくこと多し。たとへば、「いかなることにかあらん」「たれにかあらん」などいふべきを、「いかなることにやあらん」「たれにやあらん」などいひ、又、「いく年月をやへぬる」「たが里よりやきぬらん」などいふ、かやうの類のやは、皆ひがことなり、古の歌文を見てわきまふべし、云々

トアリ。廣日本文典第三六二、

やかの共ニ疑フ意ノ旦爾波ナレド、上ニ他ノ疑辭アルトキ、「例ヘバ幾何かある」「何をか取る」「誰なるか」「何とすべきか」「いづくにあるか」ナド、下ニ更ニかヲ置クハ常ナレド、斯ル場合ニ、やヲ置クコトナシ。

トアリ。落合直文ノ文章の誤謬皇典講究所講演十一、二、

かこやとは、共に疑辭なれど、なにといふ詞の下におく疑辭には、必ずかといはねばなりませぬ。やといふは皆あやまりであります。

道とはいかなる道なるや
神とはいかなる者なるや
神はいづくに坐するや

かゝるところは、皆かとかゝねばならぬ。

ムベシ。

但シ、やヲ輕義ノ疑問天爾乎波トシ、かヲ之ニ對スル重義ノモノトシテ兩存シ、叙述者ノ修辭上ノ採擇ニ委スベシ。

第一例

中古文	普通文
如何に心得るにか	如何に心得るにや
何と聞きたるにか	何と聞きたるにや
如何なる事にかあらん	如何なる事にやあらん
いづれの處にか住むべき	いづれの處にや住むべき

第二例

中古文	普通文
何なるか	何なるや
誰に問ふか	誰に問ふや
いづれを選ぶか	いれを選ぶや
何處にあるか	何處にあるや
幾日になれるか	幾日になれるや

中古文	普通文
何故に來りしか	何故に來りしや
いかにすべきか	いかにすべきや
いかなる人々を招くべきか	いかなる人々を招くべきや
何處の花か盛りならん	何處の花や盛りならん

第三例

中古文	普通文
誰か聞く(くや)	誰か聞くや
いづれか正し(きや)	いづれか正しきや
何事か起りた(るや)	何事か起りたるや
誰にか問ひ(しや)	誰にか問ひしや
何ぞ遲(きや)	何ぞ遲きや
誰ぞ來れ(るや)	誰ぞ來れるや

理由　從來此等ノ用格ニツイテハ玉霰ニ、

なに　いかに　いづれ　いくたれ　たが　などの下にかもじをおくつねなり。そはなにか　いづれか　たれ

トアリテ現時國文家ハ一般ニ誤格トシテ斥クルトコロナリ。抑モ玉霰ニ言ハレタルハ、主トシテ第一例ノ上ニ係ルモノナリ。今其例ヲ物語ドモニ求ムルニ、源氏、枕草紙ニハ勿論、鎌倉時代中頃ヨリ上ノモノニハ確カナルモノ見當ラズ。（但普通ノ印本類、近來ノ活版類ナドニハ、狹衣、堤中納言ニサヘ見エ、又今昔物語、寶物集、平家物語、十訓抄、古今著聞集等ニ渉リテ散見スレドモ、是等ハ、後ノ寫シ違ヘ、或ハ片假名本ヲ平假名ニ書キ替フルヲリニ、カヤヲ見誤レル疑モアレバ、時代確カナル證本ヲ得ルマデハ、之ヲ取ラズ）サレドモ、鎌倉時代ノ後半頃ヨリ、用キ初メシト見エ、其頃ノ僞作ト覺シキ住吉物語、正シク其頃ノモノナル沙石集ナドヨリ、其例多キヨリ見ルトキハ既ニ六百餘年餘ノ昔ヨリ用キ慣レテ今日ニ及ベルモノナルコトヲ知ルベシ。サレバ、源氏、枕草紙以上ノ古文ニ摸擬センニハ、之ヲ避クベキハ勿論ナリト雖モ、之ヲ以テ現行普通文ヲ律セントスルハ、當ヲ得タルモノト云フベカラズ。

少將すきざまにしのたいをみればよしあるさまなればいかなる人のすむにやとゆかしくおぼして

住吉物語（普通印本、類聚本校、正本皆同）

かほにふりかけたるかみのひまよりなみだもりいづるを見たまひていかには、みやのことをおぼすにやめのとも事をゆかしとおぼし出るにや　同（同）

姫君も何事にやと思ひ給へり　同（同）

中納言どのゝしか〳〵とおほせられしはなにごとにやきゝ給ふかといへば　同（同）

人難モアリ災モキタラン時神佛ヲウラムル事アルヘカラズイカナル方便ニヤアラン（沙石集六ノ始元和活字）

所望申タキ事ノ待ルト云ヘハ何ニヤト問ニ　同七ノ始（林崎慶長本、内閣天文本、元和活字本）

夜打深ヲ寢覺ニ聞ヶハラ〳〵ト物ナル聲ス何ノ鳴ニヤト思程ニ　同八ノ始（同）

不レ騷シテ居タリケルヲ何事ニヤトテ人手ヲ取リ引出シケレバ　（同末同）

荒々しくゞなきは、いかなるにやとあやしきに　名和長年（下し給ふ勅書）

人も今さる人の中に思ひよそへらるゝは誰もかくおぼゆるにや　徒然草（慶長活字本）

口ひきの男いかにおぼせらるゝやらんえこそ聞しらねといふに　同（同）

いつの程にやとふしぎには侍りし　宗良親王千八百和歌序

いかなる人にやおはすらん　芳野拾遺一

伏し沈めるさまの、たゞにはみえずありければいかにやと問はせ給ひければ　（同）

いかなるものゝしわざにやありけむ　（同一ノ二九）

又廣日本文典及ビ落合氏ノ說カレタル所ハ、多クハ第二例ニ係レルモノニシテ、今之レガ實例ヲ求ムルニ鎌倉ノ初ヨリ起レルモノヽ如ク、コレヨリ以上ニハ絕エテ見當ラズ、サレバ、中古文法ヲ基礎トスル上ハ、之ヲ斥クルハ當然ノ事ナルベシ。唯現行普通文ニ在リテ第一例ト同ジク、既ニ習用久シク殊ニ右ニ比スレバ一層普通ノモノトナレルガ如クナレバ、今之ヲ正格ト立ツベキハ多言ヲ要セザル可シ。

いかでゆりぬらんとは斗ラフ哉　（東鑑十）

此上可レ爲ニ何樣ヤノヨシ哉由　（東鑑三）

可レ用ニ何ノ日ニ哉　（同三）

何樣ニ被ル下知ニ哉　（同六）

アナ心ウヤ是ハイヅチヘトテワタラセ給フヤ　平家三ノ末（延慶本）

しづめて、いかなるやうの有るやと　（十訓中）

いづれの舟にのらるべきや、公任卿云々　（下同）

勝負いかやうにみゆるやのよし　古今著聞集二十魚鳥（曆應本活版本）

いかやうにぞんずべきやのよし奏しければ　同（同）

コハ如何ニシテカヽル所ニ有ルヤト思廻ラス程ニ　沙石集三ノ上（天文本、慶長本）

遠所ヨリ急グ使アリケルヲアノ御使ニハイカヽニ候ベキヤト云ニ　同五ノ上（元和活字本）

サシモノ撰集ニイカヾ入ヘキヤ　同五ノ下（同）

イカニツカセ給テ候ヤラン　同八ノ上（內閣天文本）

イカニツカセ給テ候ヤ　（元和活字本）

何事御座マシ候ヤラン　（天文本、慶長本、活字本）

問て言く、如此殺罪は、何等の爲なるや　（日蓮遺文諸願成就鈔）

汝は何を以て業とするや　（同）

佛になるべき道を願ふに、何の相違あるべきや、成佛に何の智慧才覺入るべきや　（同十王贊歎鈔）

イカナル事ノヨシナルヤ　（同給守彌三郎御書）

いかなる病さはりをなすべきや　（同經王殿御返事）

既ニ第二例ニシテ正格トスベキ上ニハ、第三例ハ無論ノコトニシテ、且ツ是レニツイテハ、未ダ曾テ文法家ノ論及セザルトコロナレバ、今更ニ擧グルニ及バザルガ如シ、サレドモ、元ト中古文法家ノ之ヲ禁ゼザル所以ハ、比例ノヤハカ　ゾノ係リヲ連體形ニテ結ビ、而ル後ニ、歎ノヤヲ加ヘタルモノト爲セルニ在リ。然ルニ、此類ノヤハ中古ニ在リテハ、

おとゞ、などさるけしき見給ひしや　（空穗物語藏開上）

かの君は、何のさえかおはするや　（同蒲の宴）

いかにせんとぞおぼゆるや　枕册子七

ナドノ如ク、歎キノヤナルコト明カナレド

何ゾ汝、繼母ヲ犯サントスルヤ　（今昔九ノ第二十語）

東八箇國ノ殿原、誰人カ君ノ御家人ナラヌヤ　（參考盛衰記（史籍集覽本百十三））

いつかは、善人をのみといひたるや　（本願抄上）

三世の諸佛、いづれか多聞淨戒をほめ、破戒罪根をすて給はざるや　（同）

等ノヤニ至リテハ、當時既ニ疑問ノヤトシテ用ヰタルモノナルコト一見ノ上ニテモ著ルク、且ツ次項ニ擧ゲタルガ如ク、上ニ係リノ詞ナクシテ、此ヤヲ用ヰテ疑問ノ文ヲ成セルモノ、此處ノ諸例ト同時代ノモノニ存スルニテ明カナリ。サレバ本案ニ於テ第三例ヲ立テ正格トスルト、中古文法家ノ之ヲ許セルトハ、其結果ハ同一ニシテ、其趣意ハ相反セルヲ以テ、特ニ第三例トシテ此ニ擧ゲタルナリ。

7、最後に「や」は類似せる事物を列擧する場合にも使はれる。

わりごや何やと……帷子や布やなど　（蜻蛉日記）

皆人は花や蝶やと急ぐ日も我が心をば君ぞ知りける　（枕草子）

口語ではこの列擧の「や」のみを用ひて他は用ひないのが常である。

（六）か

1、「や」と同じく疑問を表はす係助詞である。しかし「や」とは違つて文の中間にある場合には、上の詞に疑が存する樣に思はれるのである。係となつた時に、結びに連體形を用ひるのは「ぞ」「なん」「や」と變りはない。

筑波を過ぎて幾夜か寢つる　（古事記）

世の中は何か當なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる　（古今集）

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに　（古今集、藤原興風）

上に疑問が存するといふことは、右の例の「か」の上には疑問の語があるので分るだらう。

春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ　（古今集）

右の例でみると「か」は涙といふ體言について、「春雨の降つてゐるのは世の人の涙であるのか」と上に疑の意を存

してはゐるが、之に對する結びの詞が無い。實はこれは「春雨の降るは涙か」と上の文の結びになつてゐるので係として使はれてゐるのではない。かくの如く「か」は體言又は活用言に就いて文の結びともなるのである。

世の中は昔よりやは憂かりけん我が身一つの爲になれるか（完了ノ助動詞リノ連體形）（古今集雜）

今はこじと思ふ物から忘れつゝまたるゝ事のまだもやまぬか（否定ノ助動詞ずノ連體形）（古今集）

有る（有リノ連體形）か、無きか（なしノ連體形）

雲か、山か、吳か、越か、（「や」ではこれは出來ない。出來ても疑問とはならないで、呼びかけか、列擧になる。）

直接體言につゞいてゐる「か」は、その上に指定の助動詞の略されてゐると見た方がよい。又右の例にて分る通り、「か」が活用言につゞく時には、その連體形を受けるのが常則である。しかし萬葉集時代には、「む」の已然形について反動的終止をなした例がある。

何方に思ひけめかも（けむノ已然形）（萬三）

歌ひつゝ醸みけれかも（けりノ已然形）（古事記中卷）

3、又「か」は「や」と同じく單獨にて或は「は」と合して反語を表はす場合がある。反語の時には多少感動の意を寓するのである。この場合は文の終に來ることも文の中に來ることもある。

明日もありとは頼むべき身か。（結びとなる）

何の恐るゝ事かあるべき。（係となる）

聲たえずなけや鶯一とせに二たびとだに來べき春かは（古今集）（結びとなる）

咲く花はちぐさながらにあだなれど誰れかは春を恨みはてたる（古今集）（係となる）

驚くまい事か。

尤も次の「かは」は反語ではなくて「は」は輕く添へただけで單なる疑だけの意味に使はれてゐる。この時大抵上に不定語がある。

花毎にあかず散らしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ。（古今集）

いかならむ岩ほの中にすまばかは世のうき事のきこえこざらむ（古今集）

4、上に疑の語がある時には、文の中でも末でも「か」を置いて「や」を置かないのは前項で述べた通りである。しかし「か」を使はなければ「ぞ」を使ふ。

幾尺なるぞ。

誰れなるぞ。

たぞや　何ぞや　＞この「や」は疑問の「や」でなく間投助詞とみる。然らば上の「ぞ」が「か」の代りをする。

5、次の例は疑問の意はあれども結びに連體形を用ひない。これ係となつてゐないのである。

いつかかゝる事ありき。

何か見ゆ。

何故か時計止れり。

6、「か」は熟語の中へ割り込む事がある。

散りかすぎなん（係となり連體形にてむすぶ）

咲きかほこれる（同）

この場合は活用言の連用形につく。

7、「や」と「か」との區別は堀秀成の「助辭音義考」の中に詳細に論じてある。又三矢重松博士の「高等日本文法」（五一八頁）にも論じてある。試みに後者を引用してみよう。

「や」「か」の別、極めて言ひ難し。されどその差の語調にあるは疑ふべからず。「や」は軟に婉曲にて、其方より言へば意深し。「か」は硬く急に、其の方より言へば淺し。此の兩辭は「に」「ぬ」と「と」「つ」との關係に相似たり。されば

故郷のならしの岡の時鳥言傳やりき如何につげきや（萬葉集）

を「告げしか」又は「か告げし」といひては全く作者の意と異なる者となる。「思ひきや」を「思ひしか」といふも宜らず。「月かも」を「月やも」と言ふは、さる語もなく、よしありとも相應せず。「景色やな」を「景色かな」といふ時は強き樣なれど意薄く聞ゆ。又「や」「か」の用法の差ある處よりも推量るべし。「や」は終止を自然にうけ、「か」は連體を體言として受く。「や」は命令に附けども、「か」は然らず。「や」は「に」に親しく「にや」といひ、その意にて「やらむ」より「やら」といふ語を作り、「か」は「と」に親しく「とか」と結合す。

8、「か」は又物事を列擧する時に使はれる。この點も「や」に似てゐる。

鉛筆かペンかを買はう。

何とか彼とか言つてゐたよ。

（七）こそ

1、前にのべた「ぞ」よりも一層ものを強く指示する語で、多くの事物の中から特にあるものを選びあげて、他と區別する意味を示す。「こ」も「そ」も指示的の意味であつて代名詞の指示と思ひ合せる所が多い。これが係になる時には、活用言の已然形で結ぶのが常則である。

底ひなき淵やは騒ぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたて（古今集）

月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど（古今集）

おのが妻こそとこ珍らしき（萬葉十一）

草こそしげき（萬葉十七）

後の二例は當時形容詞に已然形が發達しなかつたので「珍らしき」「しげき」と連體形で結んだのである。

2、右の例は「こそ」を以て上のことを強めて已然形で言ひ切つたのであるが、結びを以て逆説的に下につゞいてゆく場合がある。中古文には極めて多い用法である。「散らめど」「見えねど」の意で下に連るのである。

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる〻

3、この「こそ」が文の結びになつたことが萬葉集時代にはあつた樣である。この時には希望を表はし、活用言の連用形をうけるのが規則であつた。

わたつみの豐旗雲に入日さしこよひのつく夜あきらけくこそ（萬一）

夜の夢にをつぎて見えこそ（萬葉集五）

酒にうかべこそ（同）

妹に告げこそ（同）

4、中古時代にはこの「こそ」を呼びかけに使つた。即ち呼格體言の下につける習慣があつた。

右近の君こそ、まづもの見たまへ（源氏物語）

わが君こそ、まづきこえむ（枕草紙）

5、今日の口語では係の用法だけあつて之に對する結びはないのである。

今日こそはこれを完成しよう。

これこそ本ものだ。

ようこそ入らつしやいました。

何くそ。（これは「こそ」が轉じて接尾語となる。「やけくそ」「へたくそ」）

6、平安朝の末より鎌倉室町時代へかけて「どさんなれ」といふ語がある。伊勢貞丈の說によると「こそあるなれ」の音便約であるといふ。尤も一說には「御座あるなれ」の略とはいはれてゐるが、或は前者かも知れない。「にてあるよな」「いざ來れ、よし來た」の意に用ひられる。

よき味方どさんなれ、打てや者共（平治物語）

（八）な

禁止を表はす詞である。口語では終止にだけ用ひられる。從つて口語では終助詞といふ方が適當である。

遊びに來る（終止形）な。

教はつた事を忘れる（終止形）な。

文語では係と終止と兩方に用ひられる。その終止として用ひられる時には（口語も勿論同樣）、動詞の終止形につく。但し良行變格活用に限り連體形につく。

人に告ぐる（連體形）な。（文語にてかくいふは口語にひきつけられし誤である）

さばかりのことに死ぬる（連體形）な（これは正しい）

「な」が文語で係として用ひられ時には、之れが結びには、動詞の連用形、（但し加行變格、佐行變格は未然形――佐行變格は稀に連用形なるものもあるが多くは未然形）を以てし、且つその下に「そ」といふ語を加へるのが常則である。これを「なその格」と言つてゐる。

武藏野は今日はな焼き（連用）そ若草の妻もこもれり我もこもれり（伊勢物語）

吹く風をな（未然）来（そ）の關と思へども道もせに散る山櫻花

この下につける「そ」を以て指示辭と見る人もあり、又係助詞の「ぞ」の清音になつたものだといふ人もある。何れか分らない。奈良朝時代には、上に「な」があつても下に「そ」をつけないで、動詞の連用形のまゝのがある。

あれ無しとな（連用形）わびわがせこ（連用形）　（萬葉集）

清き月夜に雲なたなびき　（萬葉集）

沖へなさかり、さよふけにけり　（萬葉集）

「そ」は右の様に省いてもよいが、「な」は禁止の本義に關係があるから之を省いては誤りである。その誤りの例

角あればとて身をばたのみそ　（夫木集）

清き月夜に雲たなびきそ　（古今六帖）

この「な」を以て助動詞に入れて禁止の助動詞と名付ける人が多い。しかし、格助詞「を」「と」「へ」副助詞「まで」及び副詞の下につく事もあるので他の係助詞と同樣の性質ありと見て、山田氏は係助詞に入れてをられる。暫らくこれに從つて置く。又別の文法家はこれを副詞だといふ。用言を修飾限定するからさうとも考へられるが、その限定に一種の形式上の制約があるところを見ると、副詞とは考へられない。

（九）でも

口語だけに用ひる助詞である。輕い方をあげて他を類推せしめる。この點は副助詞と同樣であるが、用法の上に於て他の係助詞と同樣の特性を以てゐるのである。即ち、格助詞の下にはつくが決して上につかないこと、副助詞にも同樣下にはつくが上にはつかない事である。しかし係助詞の特性たる陳述の上に力を及ぼすといふ點ははつきり現れない樣に思はれる。

湯でも水でもものみたい。

弟にでもやらう。（格助詞の下）

郊外へでも行かう。（格助詞の下）

これだけでもとつて下さい。（副助詞の下につく）

たまにでも來てくれればいゝのに。（副詞の下）

この「でも」は格助詞の「で」に係助詞の「も」が附いて出來たものであらう。しかし一助詞となつてゐるのであるから「で」（格助詞）「も」（係助詞）と別々の意味の下に重つてゐるものとは區別が必要だ。

答案はペンでも鉛筆でも書ける。（格助詞十係助詞）
答案を何ででも書け　（係助詞）

（十）ほか、しか

口語の助詞。或る事物をあげてその他のものを排斥する意味を現はす。これを結ぶときには必ず打消の意味のある語を以てするのである。文語の「のみ」口語の「だけ」に似た意味を以てゐて、一見副助詞の樣に考へられるのである

が、係詞助の特性を持つてゐる事は「でも」に似てゐるのである。

私ほか知つてゐるものは無い。

僕の家には子供ほかゐない。

今日は一圓しかありません。

散歩の場所は海岸しかない。

これは獨逸でしか出來ない。（格助詞の下）

これは東京からほか來ない。（同）

山だけしか見えない。（副助詞の下）

これぐらゐほか上げられません（同）

僅かしか讀まぬ。（副詞の下）

たまにしか見えぬ。（同）

五、接續助詞

これは「廣日本文典」では第三類の助詞に入れてあるもので、動詞・形容詞・助動詞に接續して、之を次なる句と接續せしめる働を持つてゐる助詞である。「日本文法講義」では「從來この類の助詞を以て用言を助くるとせるは皮相の見にして、こは決して一の單語としての用言を助くるにはあらずして、用言が述語として用ゐられたる時に限りて附屬するものなれば、思想と思想との結合をなすを本性とせるものなり。」と論じ、その用言の述語だるものに附屬する方法を次の五種に分類してある。

（一）未然形につくもの
- 「ば」　總ての活用言につく。
- 「と」「とも」　形容詞及びそれに類する活用言につく。

（二）連用形につくもの
- 「も」

（三）終止形につくもの
- 「と」「とも」　動詞及び之れに類する活用言につく。
- 「し」「と」「けれども」「けれど」　總ての用言につく。口語の助詞である。

(四)連體形につくもの
- 「が」
- 「に」
- 「を」
- 總ての活用言につく。

(五)已然形につくもの
- 「ば」
- 「ど」
- 「ども」
- 總ての活用言につく。

なほ參考までに從來の「用言に添ふ助詞」の分類をあげてみると次の通りである。

- (一)條件
  - 假定
    - 順說……「ば」
    - 逆說……「と」「とも」
  - 確定
    - 順說……「ば」
    - 逆說……「ど」「ども」「に」「を」「が」
- (二)列敍
  - 異時……「て」「で」
  - 同時……「つゝ」「ながら」

山田氏のが形式上の分類であるに反して、これは內容上の分類である。

以下この類の助詞を說明しよう。

(一)ば

「ば」の用法は大體次の三項に歸することが出來ると思ふ。

1、(1)文語の活用言の未然形について未だ成立しない條件を假定し、(2)同じく已然形について既に成立した條件を表はし、(3)又は既に條件の成立したものと假定することを表はす。この場合にはいづれも、上の條件に對して下にはその當然の結果の起ることを示すの所謂順說である。

- (1)
  - 花咲かば告げん（動、未然／形、未然）
  - 花美しくば手折らん。（形動、未然）
  - 風靜かならば花散らさらん。（助動、未然）
  - 花散りなばいかゞはせん。（助動、未然）
- (2)
  - 花をし見れば物思もなし。（動、已然／形、已然形）
  - 花美しければ手折る人多し。（形動、已然）
  - 風靜かなれば花散らず。（形動、已然）
  - 花散りぬれば客も無し。（助動、已然）
- (3)
  - 一旦緩急あれば義勇公に奉じ……（動、已然）

「ば」が用言の已然形に附いて、しかも下に反對の結果の起つた事を表はす用例があると說く人がある。

見てもまたまたも見まくの欲しければ、馴るゝを人は厭ふべらなり

しかしこれは意味の上では何處にも逆說と思はれる點はないので、「何度でも逢ひたくなるから」と上に確定した條件を示し、これに對して下にそれに當然として「馴れるのをいやがるものと見える」と言つたのである。それを「馴れる」を好むのが一般的の人情と見て、その反對だ、從つて逆說だといふのは見解が淺い。

2、口語の活用言の假定形に就いて(1)未だ成立しない條件を假定し、(2)又既に條件の成立したものと假定する場合に用ひられる。文語同樣、上の條件に對して下に當然の結果を起すことを表はす。

(1) 花が咲けば(動、假定)見にゆかう。
　 內容が面白ければ(形、假定)買はう。
(2) 常に勉强すれば(動、假定)心配はない。

九もこの「ば」は假定ばかりでなく確定に使はれる場合もある。併し正しい格ではない。

僕が白と言へば彼は黑と言つた。

3、口語だけの用法で、用言の假定形につくが條件の意味を失つて、ある事柄に他の事柄を添加する意味を表はし、單なる接續のみの用をなすことがある。

電車もあれば(動、假定)汽車もある。

雨も降れば(動、假定)風も吹く。

氣候も寒ければ(形、假定)便利も惡い。

この「ば」で打消の助動詞に連續してゐるものと思はれるものがある。

行かずんばあるべからず。

行かなければならぬ。

しかしこの「ば」は之をすべて接續助詞と見ることは出來ない。即ち右の例のうち前者は係助詞の「は」で之か音便で「ば」と濁つたもので、この「ば」を融化して「行かざるべからず」といつても意味に變りはないのである。實は後者も之と同樣のばに違ひないのであるが、「なる」といふ動詞の意味の內容が空漠である所から、これを補ふ意味の如何によつて、この「ば」が接續助詞と考へられるのではなからうかと思ふ。

(二)と、とも

文語では(1)動詞及び動詞に類する活用ある形容動詞・助動詞の終止形、(2)形容詞及形容詞に類する活用ある助動詞の未然形につき、(3)口語では時(未來)及び推量の助動詞、形容動詞の終止形について、いまだ成立しない條件を假定する時に用ひる。而していづれも上の條件に對して下に反對の結果を起すことを表はすのである。即ち逆說である。この中「と」いふのは元の形で、これに「も」といふ輕い咏歎の助詞が添はつて「とも」が出來たので兩者とも意味に變りはない。今日の文語では「と」は用ひない。

(1)
- 繪にかくと筆も及ばじ少女子が花の姿を誰に見せまし。（堀川後百首）　動、終止　形動、終止
- 靜かなりとも如何せん。
- 嵐のみ吹くめる宿に花すゝきほに出でたりとかひやなからむ。　助動、終止
- 雨降りぬとも寒からざるべし。　助動、終止

(2)
- 天氣よくとも寒からん。　形、未然　助動、未然
- 金を得べくともかゝる所業はすまじ。

(3)
- 死なうと（とも）構はぬ。　助動、終止　推量、終止
- 死ぬまいとも限らぬ。　形容動、終止
- よからうとも惡からうともやるがよい。　形容動、終止

「とも」が動詞に接續する時は、右にのべた樣に、その終止形につくのが常則であるが、連體形につく用例も多いので例の「文法上許容に關する事項」十一に次の如く定められてゐる。

てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年經ルトモ
　　如何ニ批評セラルルトモ
　　强ヒテ之ヲ遵守セシムルトモ

右の理由の說明は、「現行普通文法改定案調査報告之一」に次の如く出てゐる。繁に失するけれども參考のために引用してみよう。

反接ノ意ノともハ、中古文ニ於テハ、動詞及ビ多數ノ助動詞ニハ終止形、形容詞及ビべし、まじ等ノ助動詞ニハ連用形ニ附クヲ通則トス。然レドモ現行普通文ニ於テハ、ラ行變格ノ動詞及ビずなりたりノ助動詞ニハ終止形ニ、形容詞及ビべしまじノ助動詞ニハ連用形ニ附クモノトシ、其他の動詞、助動詞ニハ皆連體形ニ附クモノト定ムベシ。

例	中古文	普通文
四段活	往　ゆく　とも	ゆく　とも
	押　おす　ども	おす　とも
一段活	見　みる　とも	みる　とも
	着　きる　とも	きる　とも
上二段活	盡　つく　とも	つくる　とも
	報　むくゆ　とも	むくゆる　とも
下二段活	寄　よす　とも	よする　とも
	消　きゆ　とも	きゆる　とも
	來　く　とも	くる　とも

變格活	爲す	ともする
	死しぬ	ともしぬる
	有あり	ともあり
助動詞	被らる	ともらるゝ
	令さす	ともさする
	不ず	ともず
	也なり	ともなり
	たり	ともたり
	き	ともし
	可べく	ともべく
形容詞	善よく	ともよく
	惡あしく	ともあしく

理由　此格ニツキテハ、廣日本文典ノともどもノ條ニ禁ゼラレタルコト、前項ニ擧ゲタルガ如シ。然レドモ此格ハ連體形ヲ受クルとト同ジク既ニ中古ヨリ其例アルトコロニシテ、即チ、

びんなき事侍るとも、ちぎりきこえし事はすて給はでよそにても、さぞなどは見給へといひたり。（枕册子四）

俄ならん御心がはりは、中々人目あやしく侍らむ、おぼしうとむなよ、岩切り通し侍るともおとぎゝもあるまじき事と思ひ知りたれば。（狹衣一ノ上）

金山は、朽失スルとも。（日蓮御書諸願成就鈔）

骨肉の命は盡くるとも。（同）

何よりも重寶たるあし（錢）山海を尋るとも、日蓮が身には、時に當りて大切に候。（同經王殿御返事）

御へんは、たとひ、めさるゝとも。（承久軍物語一）

勳功に申し替ふるとも、自ら退くとも。（神皇正統記七十八代）

たとひ、暫しは別るゝとも、松とし聞かば歸りこん。（中略）、たとひ、暫しは別るゝとも待たばこんとの言の葉を、（謠曲、松風）

中々の事、暮過ぐるとも月を見捨て給ふなよ。（同松虫）

タトヒ、カウトウノ父兄我ヲフハレミテ王トスルトモ。（座永記）

勢の程を見るに、懸命の合戰するとも、又籠て戰ふとも、一年二年の間には、輙く落されし物をと。（鎌倉大草紙）

ナドアルニテモ大概ヲ見ル可シ。案ズルニ、コハ前項ノとト同ジク、初メハソノ間ニことなりものなり又ハことありものありナド云フ詞の省略セラレタルモノナリシガ、後ニハ、耳目ニ慣レテ其省略ノ有無ニ拘ラズ用キルニ至レルナラン。サレバ、縱ヒ中古文ナリトモ、サバカリ違格トシテ擯クベキニアラズ、況ンヤ現行普通文ニ於テヲヤ。

「と」には又、口語に用ひられて、次の用法がある。

動詞・形容詞及び助動詞の終止形について、既に條件が成立したものと假定する場合。

話があまりむつかしいと困る。（形、終止）

雨が降ると道が悪くなる。（動、終止）

あまり走らせると悪いよ。（助動、終止）

又ある事柄が續いて行はれる事を示す場合。やはり前同樣終止形につく。

五時が打つと歸つた。（動、終止）

外國から歸ると教授になつた。（動、終止）

（三）ど、とも

共に文語の助詞である。「ば」が上の條件に對して、當然の結果を表はすのに對して、これ等は反對の結果を導く既定の條件を示すのである。動詞・形容詞・形容動詞・助詞の已前形について、既に成立した條件を表はすのである。

春來れど花咲かず。（動、已然）

冬去れども雪とけず。（動、已然）

世の中に人多けれど人は無し。（形、然已）

命長かれども事業多からず。（形容動、然已）

命長けれども事業多からず。（形容動、已然）

活用形の混同をさけよ。

急ぎて馳せつけたれども汽車は既に發車せし後なりき。（助動たり／已然形）

所が、今日の普通文では假定の「とも」及び右の確定の「ども」の代りに「も」といふ助詞を使ふことが多くなつた。尤もこれは鎌倉時代に始まり足利時代以後多くなつたのであるが、誤解を生じない限り使つてもいゝといふことに許容されてゐる。即ち「文法上許容に關する事項」の十五には次の樣に定めてある。

てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等の事由アルモ（アリトモ）議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日に迫リタルモ（タレドモ）準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ（シカドモ）昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ（ストモ、スレドモ）之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ（クトモ、ケレドモ）應募者ハ多カルベシ

又外に誤解を生ずべき例をあげれば

日照るも寒し。

と言つても次の兩樣に解けて確然としない。

日は照つたとしても寒い。（照つても）

日は照つてゐるが寒い。

從つてかういふ用ひ方は避けなければならない。

この許容の理由を例の「現行普通文法改定案調査報告之一」に求めて見れば次の通りである。

反接ノ意ナルも

天爾乎波ノもヲ連體形ニ附ケ、反接ノどともノ場合ニ用ヰルヲ正格ト定ムベシ。

但シ助動詞ノべしまじ及形容詞ハ、連用形に附クモノハ將然ノ意ニ、連體形ニ附クモノハ已然ノ意ニ用ヰルモノトス。

例

	中古文	普通文
四段	行ゆくともゆけども	ゆくも
四段	取とるともとれども	とるも
一段	見みるともみれども	みるも
一段	着きるときれども	きるも
下二段	建たつともたつれども	たつるも
下二段	得うともうれども	うるも
變格	來くともくれども	くるも
變格	爲すともすれども	するも
變格	死しぬともしぬれども	しぬるも
助動詞	被るともるれども	るゝも
助動詞	使す（し）ともすれども	するも
助動詞	使す（む）ともしむれども	しむるも
助動詞	きともしかども	しも
助動詞	たりともたれども	たるも
助動詞	也なりともなれども	なるも
助動詞	可べくともべけれども	べくも べきも
形容詞	善まじくともまじけれども	まじくも まじきも
形容詞	善よくともよけれども	よくも よきも
形容詞	惡あしくともあしけれども	あしくも あしきも

理由　此もニツキテハ、廣日本文典ノとともどともノ條ニ、

ともハ本文ノ規定ノ如ク、必ズ動詞の第一活用ニ接シテ、「受くとも」「得とも」「歴とも」「寢とも」「來とも」「爲とも」「ありとも」「居りとも」ナドナルベキヲ、動モスレバ「受くるとも」「得るとも」「歴るとも」「來るとも」「あるとも」「居るとも」ナド第二活用ニ接シテ用ヰルコトアルハ非ナリ。或ハ「と」ヲ省キテ「恥を受くるも恥とせず」「年を歴るも成らじ」「志あるも遂げざらん」ナド用ヰ、剩ヘ「とも」ト「ども」トノ意ヲ混用スルハ、殊ニ非ナリ。必ズ未定既定ノ用法ヲ別ツベシ。殊ニ「も」ハ附屬物ナレバ「も」ノミニテ

ハ、「雖」ノ字ノ意を成サヌコトヲ牢記スベシ。又形容詞ニテハ、「善くとも」「悪しくとも」（未定）「悪しけれども」（既定）ヲ用ヰ分クベシ。「善くも探らず」「悪しくも捨てじ」ナドハ、極メテ非ナルコトハ、前項ニイヘルニ同ジ。

トアリテ、固ク禁ゼラレタル所ナリ。サレドモ、中古ヨリ絶エテ之レニ類似セルモノ無キニハアラズ。ソハ、動詞ノ連體形ニ附クモノニテハ

將來云毛不來將有乎不來云乎將來常者不侍不來云物乎。（コムトイフモコストキアルチコジトイフチコムトハマタジコジトイフモノヲ）（萬葉集四）

みやこへと思ふものゝ悲しきは、かへらぬ人のあはれなりけり。（土佐日記廿七日の條）

はかなき花もみぢといふも、おりふしの色あひつきなく、はか〳〵しからぬは、露はへなくきこえぬるわざなり。（源氏帚木）

おまへのむめのこゝろようひらけにけるもこれをいまゝでしらざりけるよ、我身世にふるなどながめさせ給ひける。（榮花物語木綿四手）

逢ふことは、とほちの里にほとへしもよし野の山とおもふなりけん。（大鏡五伊尹）

ナドアリ。形容詞ノ、連用形、及ビ連體形ニ附クモノニテハ

たえぬ宿世あさからで、尼にもなさで尋ねとりたらんも、やがてその思ひ出うらめしきふしあらさらんや、あしくもよくもあひそひてとゐらんをりも、かゝらんきざみをもみすぐしたらん中こそ、ちぎりふかくあはれならめ。（源氏物語帚木）

さまゝ〳〵の人のうへどもをかたりあはせつゝ、おほかたの世につけて見るには、とがなきもわがものとうちたのむべきをえらむに、おほかる中にも、えなん思ひさだむまじかりける。（源氏帚木）

ナドアルニテ之ヲ知ルベシ。而シテ全ク今日ト同一ナルモノハ、鎌倉ノ初メヨリアリテ、足利ノ末ニ到リテ最モ多クナレルモノヽ如シ。即チ、

我身ノ切ルヽモ不知引ケム。（今昔物語廿三ノ廿二語）

せめては、今一たびかくおもふ事をもいはんなど思ふもかなふまじきかなしさ。（後成家の集の内）

サテ京ノ人、サナガラ攝祿ノ近衛殿ハ、一定、具シテ落ヌラント人ハ思ヒタリケルモ違ヒテトヽマリテ、山へ參リニケリ。（愚管抄五）

人ハイミジクタケクモ力及バヌ事也ケリ。（愚管抄六）

此日本國ノ人ハ、是ヲヤハラゲテ和詞ニナシテ、心ウルモ猶ウルサクテ、和解ノイルナリ云々。（同）

百千歳之間百羅漢ヲ供養スルモ不レ及ニ一日出家功德一。（平家物語六宋（延慶本））

タトヒ、タドリワヅラフモ、明珠ニアラヌニアラズ。（道元禪師正法眼藏一隨明珠）

タトヒ、一刹那ニ發心修證スルモ、即心是佛ナリ。タトヒ、一念中ニ發信修證スルモ、是佛ナリ。（道元禪師正法眼藏一隨明珠）

ウキモ猶昔ノユヘトオモハズバ、イカニ此ノ世ヲ恨ハテマシ。（沙石集一）

同じ御子豫王を立てられしも、又捨てゝ自ら位に即き給ふ。（神皇正統記三ノ三十八代）

後漢の光武は、この事にこりて、功臣に封爵を與へけるも、その首たり〳〵鄧禹すら封ぜらるゝ所四縣に過ぎず。（神皇正統記六ノ九九十五代）

紅花の春の朝、紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘れ、紅葉の秋の夕、黄纈纈の林色を含むとはいへども、朝の霜にうつろふ。（謠曲江口）

都留の郡の朝立つも日たけて、越ゆる山道を過ぎて石和に着きにけり。（謠曲鵜飼）

子曰如有ニ周公之才美一（文明鈔本論語義疏）

縱或人有ニ唯知レ進ニ於飲食ニ不レ知レ行レ敬（同）

としく〳〵内裏にまいりしも、けふは御いとま給はりてさふらはざりければ。（藤原公條高野參詣記扶桑拾葉集）

宗祇を心にまち給ひしもそのかひなきといふこゝろにや（宗祇終焉記）

妙音院相國孝道朝臣いらいの本譜以下の秘抄とも取持し侍るもいたづらにくちはつべきくちおしき事なり（後崇光院椿葉記）

ふりはへくだる道なればとかくいなび侍るもかなはずして（宗碩佐野のわたり）

あまやどりをなど人々いひしもいづこにか家もあらんと。（同上）

いつれもとりあへぬかへしどもかきつけ侍りしも浪のまきれにわすれぬるなるべし。（同上）

ナドニテモ之を證スベシ。

抑も此もハともども等ノとどノ省カレタルモノニシテ、其もハ感動詞ノもナレバ、とどヲ省クトキハ、反接ノ意ナキニ至ルヨシノ廣日本文典ノ說ハ如何アラン、若シ其說ノ如クナラバ、何故ニ終止形ト已然形トニハ附カズシテ、連體形ニ附クニカ、又もノミニテハ、反接ノ意ナシト言ハレタレド、然も、少も、聊も、云々しても、シカレドモ、少シデモ、聊デモ、云々シタトテノ意ナルニ、若シ、此もヲ除カバ、忽チ反接ノ意明カナラズ。顧フニ、此もハ、亦ノ意ノもニシテ、

一箭所レ當百夫不レ敵

國滅不レ告レ敗勝不レ告レ克

一日不レ見如ニ三月一

時のまもなぐさめつらむ、君はさぞ、ゆめにだに見ぬわれぞかなしき。

とをつらの馬ならねども、君のれば、車もまとに見ゆるものかな。

ノ類ノもト同一ニシテ、只名詞ニ附クト連體形ニツクトノ差ノミナラン。ソハスベテ連體形ハ常ニ名詞ニツク天爾乎波ヲ取リテ名詞狀トナルベキナレバ、もガ名詞ニ附キタル時ト同一ノ意ニテ、連體形ニ附クハ當然ノ事ナルヨリ考フレバ、此もハ、とどノ省略ニハアラズシテ、名詞ニツク亦ノ意ノもノ、其受クルトコロノ詞ノ正反ノ意義ニ由テ、比較ノ意トモナリ、反對ノ意トモナレルモノナルコト疑ナシ。故ニ中古文法ニ於テモ、コ

ノ類ノもヲ以テ、全ク違格ナリトシテ斥クベキニアラザルベシ。但シ中古ニ在リテハ、此もハ亦ノ意ニ用キタルガ、知ラズ識ラズニ、反接ノトモドモノ意ノ輕キ場合ニ當ルトコロモ出來タルモノニシテ、今日ノ如ク、亦ノ原意ヲ忘レテ、其意ノ輕重ニモ拘ハラズ、反接ノ意トシテ之ヲ用キルニ至レルモノトハ、稍其趣ヲ異ニセリ。而シテ之ヲ全ク反接ノ意ニ使用スルニ至レルハ、何故ゾト云フニといへどもといふともト云フハ、其義重クシテ餘リニ耳立ツ場合アルヨリ、之ヲ避クルガ爲メニ、右ノ反接ノ塩分ノもヲ取ルモノアリテ、イツシカ今日ノ如ク總テノドモトモノ場合ニ、用キルコトヽナレルナラン。既ニ右ノ如ク當然ノ理由アリテ、漸次ニ其意ヲ轉化セルモノナルガ上ニ、其習用ノ久シキコトハ白石、益軒等ハ勿論、古學者中殊ニ義門ノ如キモ往々ニ之ヲ用キ、現今ノ法令文、著書、新聞雜誌ニ之ヲ用キルコトノ夥シキ、試ミニ、其新聞ノ何タルヲ問ハズ、取リテ之ヲ檢スレバ、一篇ノ論說中、二三個以上此もヲ見出サザルモノナシ。既ニ斯クノ如クナル以上ハ、ソノ語格ノ合不合ハ姑ク之ヲ措キ、斷ジテ本項ノ如ク、此もヲ以テ正確ト定ムベキハ當然ノコトヽ云フベシ、或ハもヲ反接ニ用キルトキハ、常ノもト紛ルヽ恐アルガ上ニ、將然と已然トノ區別ヲ滅却スル虞アリ、故ニ之ヲ禁ゼザル可カラズト云フ說モアラン。然レドモ形容詞ノ如キハ、既ニ連用連體二形ニヨリテ之ヲ區別スルコトヲ得レバ言フニ及バズ、動詞、助動詞ニ於テハ、既に、今、將に、若し、一旦等其他時ヲ示ス副詞ニ依テ、分明ニ之ヲ區別スルコトヲ得ベケレバ、毫モ難者ノ所謂將然已然ノ區別ヲ滅却シ、常ノもニ紛ルヽ等ノ憂モナカルベシ。

順說及逆說に應じて假定並びに確定の條件を示す助詞を配してみると次表の通りになる。

說法＼條件	假定條件	確定條件
順說	(未然形)—ば	(已然形)—ば
逆說	(動、終止形)(形、未然形)＼＼と とも	(已然形)＼＼ども
	(連體形)—も	(連體形)—も

(四)に　を　が

共に文語の助詞であつて、(但し「が」は口說にも使はれる)いづれも活用言の連體形について、確定の條件を表はすに用ひられる。而して上の條件に對して反對の結果を起すことを表はすのである。

雨降る(動、連體)に日照る。

顏美しき(形、連體)に心きたなし。

庭の面はまだ乾かぬ(助動ずノ連體)に夕立の空さりげなくすめる月がな

夏の夜はまだ宵ながら明けぬる(助動、ぬノ連體)を雲のいづこに月やどるらん。(古今集)

雪とのみ降るだにある(動、ありノ連體)を櫻花いかにちれとか風の吹くらむ。(同)

助動、きノ連體

危ぶみし(動、已然完了リノ連體)が辛じて落選を免れたり。

遠く訪ね行け(動、連體)るが不在なりき。

風はある(動、連體)が天氣はよい。(口語)

米國から歸つた（助動、連體）が遊んでゐる。（口語）

右の外に、「が」は

雨が降らうが風が吹かうが行くといつたら行く。（口語）

死なうが生きようが必ずやつてみせる。（口語）

長からうが短からうが構はない。（口語）

の例の如く、推量の助動詞について二つの事柄を列擧して、その孰れをもまだ成立しない條件として假定する場合に使はれる事がある。この場合もやはり逆説である。

「に」「を」「が」の三つの助詞は格助詞として體言にも添ふことが出來るのであるから、その體言の略された場合か或は接續助詞として使はれてゐるのであるかを明瞭に區別して見る必要がある。（三者ともに連體形をうける事から誤が來るのである）

いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（源氏物語）
（一）ナィケレモ（條件）
（二）ナィ人ノ（體言ヲ略ス）

すでに明けぬるを知らざりき。
（一）ノニ（條件）
（二）コトヲ（體言ヲ略ス）

堂々たる理由あるに贊成せざりき。
（一）ノニ（條件）
（二）説ニ對シテ（體言ヲ略ス）

若し連體形の下に體言が略せられてあるとするならば、その下にある「に」「を」「が」は接續助詞ではなくて當然格助詞でなければならない。

（五）のに（に）、ものを（ものゝ）、ところが

「に」は口語にも用ひられるが、多くは「のに」となつて、文語の「に」に對し、文語の「を」に對して口語では「ものを」或は「ものゝ」、文語の「が」（尤もこのまゝでも口語に使はれるのは前項の例の通りであるが）に對しては「ところが」を使ふ。確定の條件を示し逆説に使はれるのは文語と變りが無い。

あれ程頼んで置いたに忘れたのか。

何も知らないのに偉さうにしてゐる。

風が吹くのに戸も閉めない。

頼みもせぬものをいらぬ御世話だ。

默つてはゐるものゝ悲しさで一杯です。

捜しあてたところが留守だつたのです。

大丈夫だと思つてゐたところが失敗でした。

「が」「に」（兩者とも文語口語併せて）及び「ところが」は、條件逆説を表はさないで單に接續だけに使はれる事もある。

けふも天氣よかりしが、明日も同じくよかるべし。

兄も賢いが弟も賢い。

（六）も、ても、でも

1、共に口語の助詞である。「も」は形容詞の連用形について、假定の條件を表はす逆說の助詞として使はれることがある。

遲(形、連用)くも來春は歸ります。

次の「も」は、形容動詞及び指定の助動詞の連用形の「で」についたものであると見る說もあるが私はとらない。

一つの「でも」といふ接續助詞として考へ度い。

動作は活潑でも行儀が惡い。

見かけは田舍者でも內心は野暮でない。

「も」を「とも」「ども」の代りに用ひることは前にのべた通りである。

2、「て」は假定の條件を表はす逆說の接續助詞である。これは「て」と「も」との複合して出來たものである。動詞形容詞、助動詞の連用形につく。

幾ら努力(動、連用)しても成功出來ない。

理由はよくて(形、連用)も實行は不可能だ。

仕事をやらせて(助動せるノ連用)も駄目だ。

「て」は又假定の條件ばかりでなく、確定の條件を表はすのにも用ひる。

これ程待つても出て來ない。(待つたけれどもの意である)

3、「でも」は「で」と「も」との複合語で「て」と同じく、假定の逆說に用ひ、名詞、動詞(連用形)につく。

顏は佛でも心は鬼だ。

この水は透明でも變な香がする。

浪は穏かでも注意を要する。

呼んでも中々來ない。

(七)けれど　けれども

共に口語の接續助詞で、反對の結果を導く既定の條件を表はす。二者ともに用言の終止形につく。この「けれ」は、動詞、形容詞の已然形の語尾から類推して、これに「ど」「ども」を附けたものと思はれる。

日蓮は泣く(動、終止)けれども淚を流さない。

山は高い(形、終止)けれども木が無い。

日が暮れた(助動、終止)けれども歸らない。

前述の通り「て」「とも」をこの二者の代りに用ひる事はある。

そんなに泣いても駄目だ。

金はなくとも家はある。

(八)て

用言の連用形について、上の動作狀態に他の動作狀態を重ねるに用ひられる。つまり、ある動作が終つて他の動作に移ることを表はすのが本來の意義であるが、更に一般的に語句を接續するのに用ひられる。

（本　義）
春過ぎて夏來にけらし

（原　因）
雨降つて地固まる

（並　列）
冬は日が短くて夜が長い。

（修　飾）
思はずて誤りぬ。

この「て」はもとは完了の助動詞「つ」の連用形である。故に之を接續助詞に入れないで助動詞の條下で說く人もある位である。從つてこれは動詞に連續するのが本體であるが、形容詞にもつくし、元來ならば「つ」の連續しない助動詞にも連つて、今日では全く助詞となつてしまてゐるやうである。動詞に「て」がつく時には、完了の助動詞として說明してよい場合も勿論あるのであるが、又完了の意味が殆ど失せてゐる場合も多いのである。

ペンを持つて原稿を書く。

これ等には殆ど完了の助動詞の意味は無いのである。

「て」は文語も口語も兩樣に使用される。

この「て」を佐行變格活の動詞「す」の連用形「し」に添へて「して」として、形容詞、形容動詞或は助動詞のあるものにつけて、「て」と同じやうに接續助詞として用ひることがある。

（形動）月明かにして星稀なり。

（形容）色美しくして香高し。

（助動）終日空晴れずして曇りゐたり。

この「して」は又指定の助動詞「なり」の連用形「に」につゞいて同じ用法に立つことがある。

（なり／連用形）そは一場の夢にして事實にあらず。

又この「て」は格助詞の「に」及び「と」と合して「にて」及び「とて」となり、或は格助詞の用をたすけ、或は接續助詞として使はれることもある。

神戸にて知人に逢ふ。（この「にて」から口語の「で」は出來たのである）

ほととぎす／＼とて明けにけり。

（九）で

動詞、形容動詞、助動詞の未然形について、その動作や狀態を否定して、他の動作や狀態に移ることを表はす助詞である。この語は打消の助動詞「ず」の連用形に「て」の連つて出來た「ずて」の約されたものである。

（助動、未然）人に知られで來る由もがな。

（動、未然）人に求めで己に得よ。

（形容動、未然）道遠からで岐れ多し。

この語は前述の樣に「ずて」の約されたもので、「て」に對する否定形のやうに思はれるが、「で」と「て」ではその活用

言に對する接續の仕方がちがふのである。

「て」は連用形につく。
「で」は未然形につく。

「で」の中には「て」と「ず」との兩方の意味が含まれてゐる。

この文語の「で」に對して口語では複合語の「なくて」「ないで」「ずに」「いで」等を用ひる。これ等は複合語とも考へられるし、又「なく」「ない」「ず」を上の動詞に連つた助動詞と見て、それに「て」又は「で」が連つたと見てもよいのである。或は後の見方の方がいゝかも知れない。

(十)つゝ

動詞の連用形について、動作の續いて行はれること、又は反覆して行はれることを表はす。或人は佐行變格活用の動詞「す」を二度重ねたものの轉であると說くけれども、私は從はない。やはり、完了の助動詞「つ」が二つ重つて出來たものだと思ふ。

うたひつゝかみけれかも、舞ひつゝかみけれかも。(古事記)
天雲のよそのみ見つゝ言問はむ。(萬葉集四)
考へつゝ路を步む。

この助詞は一つの動作の繼續反覆して行はれることを表はすのであつたが、更に動作が共に行はれる事を示す樣になつた。又

思ひつゝ便もせず。

といふ例の樣に、逆說の意味にも用ひられる樣になつたのである。

なほ現代では、良行變格活用の動詞「あり」の上に置かれて、現在動作の進行中である事を表はすに用ひられる。文語のみならず今日では口語の中へも入つてゐる。

海は盛に荒れつゝあり。
目下考慮しつゝあるのです。

口語ではこの動作の共に行はれる事を表はす「つゝ」の代りに「ながら」「もて」「もつて」を使ふ

食べながら考へる。
仕事をしもて歌ふ。
泣きもつて歸つた。

次の例は口語で「つゝ」を逆說に使つたのである。

悪いとしりつゝやつてしまつた。

この場合に勿論「ながら」を使つてもよい。

悪いと知りながらやつてしまつた。

尤も右の例は逆說ではなくて動作の共に行はれてゐる場合だとも言はれないこともない。併しその中に逆說的の意

味が含有されてゐるのである。

(十一)し

口語の接續助詞で、用言の終止形について、事柄の重なることを表はす。

讀書もするし（動、終止）、算術もする（形、終止）。

分量も多いしむつかしくもある。

金は無いし（形、終止）、家の者は病氣だし（助動、終止）仕方がない。

これは中古語以前には例のない用法なので何から來たのかよく分らない。或は佐行變格の動詞「す」の連用形「し」から來たものであらうかといふ事である。

六、終助詞

これも山田氏が命名した名稱である。從來は種々の語につく助詞、或は感動助詞の一部へ入れられてゐたものである。この助詞は述語に關係するもので、必ず文の終止にのみ用ひられるのがその特質である。述語に關係するところは係助詞に似てゐるが、係助詞の樣に「係」には決してならないのである。

(一)が、がな

希望の意を表はす終助詞である。その表はれ方には種々の種類がある。希望の中に感動も含まつてゐる。

過去の助動詞「き」の連體形「し」をうけて「しが」「しがな」

完了の助動詞「つ」の連用形「て」、過去の助動詞「き」の連體形「し」をうけて「てしが」「てしがな」

完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」、過去の助動詞「き」の連體形「し」をうけて「にしが」「にしがな」

係助動「も」をうけて「もが」「もがな」「もがも」「もがもな」

間投助詞「や」をうけて「がなや」となつて用ひられる。

世の中にさらぬわかれのなくもがな。（古今集）

老いず死なずの藥もが。（同　）

河上のゆつ岩むらに草むさず常にもがもなと乙少女にて。（萬葉集）

世の中は常にもがもな渚こぐ。（新勅撰集）

心うし深き山にも入りにしが。（好忠集）

今はいかでみきかずにありにしがなと思ふに。（蜻蛉日記）

いま一つの事いかでせさせ奉りてしが。（宇津保物語）

耳なしの山のくちなし得てしがな。（古今集）

あな戀しいまも見てしが。（古今集）

甲斐が嶺をさやにも見しがけゝれなく横ぼりふせるさやの中山。（古今集）

秋ならで妻よぶ鹿をきゝしがな。（金葉集）

いまも見るごとたぐひてもがも。（萬葉四）
連用

とりかへす物にもがなやと、うちなげきたまひて。（源氏柏木）

中古以後は「がな」といふ形のみが使はれて、用法も間投助詞の様になつて了つた。

しのぶ山忍びてかよふ道もがな人の心の奥も見るべく。（伊勢物語）

さらむ人をがな使はむと思ふ。

何がなとらせんと思へども、とらすべきものなし。（宇治拾遺）

（二）か、かな　かも

いづれも感動を表はす終助詞である。感動を表はす點からいへば間投助詞に入れてもよいのであるが、常に文の終にのみ用ひられるので間投助詞とは區別するのである。用言、助動詞の連體形及び體言につく。

うれたくも鳴くなるとりか。（古事記上）
體言

くるしくもふり來る雨か。（萬葉集三）
體言

淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。（古今集春上）
助動たるノ連體形　體言

うつせみの世にも似たるか。（古今集春上）

きび人と共にし摘めばたぬしくもあるか。（古事記上）
ありノ連體形

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな。（伊勢物語）
助動ありノ連體　助動けりノ連體

をぢなき事する船人にもあるかな。（竹取物語）
形容詞、連體

あゝ悲しきかな。
體言

あやしき事かな。
體言

三笠の山に出でし月かも。
動、をりノ連體

向ひをるかも。い副ひをるかも。
形容詞、連體

ゆゝしきかも。
助動けりノ連體

人のためしになりにけるかも。

（三）かし

文の終止したところへ附いて、念を押し輕い詠歎の意味を加へる助詞である。

とめ來かし梅盛なる我が宿をうときも人は折にこそよれ。（新古今集）

戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに。（伊勢物語）

吹けかし風の吹かであれかし。

右の「かし」はいづれも命令の意味を強めたのである。詩歌に於ては「かし」が形の上で必ずしも文の終末に來るとは限らないが、意味は必ず一旦終止した所へ附くのである。

おほやけの世繼とぞ言ひ侍りしかし。（大鏡）

まことのうつはものとなるべきを取り出ださんには、かたかるべしかし。（源氏帚木）

「これ見よがし」などは一つの名詞句とするために濁つたものであらうか。

この「かし」は疑問文にはつかない。

（四）さ

口語の終助詞。輕く念を押して指し示す意味である。用言の終止形、體言、又は下に用言が略されてゐると思はれる所につく。

明日は行くさ。（動、終止）

それは中々面白いさ。（形容、終止）

そこが不思議さ。（體言）

今日は寒い。寒中だからさ。

子供にやるのさ。

（五）え

口語の終助詞。疑問の意を表はす。「だ」「た」「が」の下につく。

それは何だえ。

どうしたえ。

歸つて來たのかえ。

さうどすえ。（京都方言）

さうだすえ。（だつせ）（大阪方言）

（六）ぜ

口語の終助詞。用言の終止形について念を押して指定する意を表はす。

もうやがて來るぜ。（動、終止）

それは面白いぜ。（形、終止）

さあやつて來たぜ。（助動、終止）

何と言つても聞かぬぜ。（助動、終止）

（七）な

口語の終助詞。動詞の連用形について、命令又は勸誘の意味を表はす。「なさい」の略されたものであらうか。

遊びに御出でな。（動、連用）

一寸歩いて見な。（動、連用）
暫らく貸して頂戴な。

（八）とも

口語の終止詞。活用言の終止形について、上の事を強く肯定する意味を表はす。

三里位大丈夫歩けるとも。（助、動終止）
それは美しいとも。（形、終止）
さうで御座いますとも。（助動、終止）

七、間投助詞

感歎の意を表はす助詞であつて、或は語調を整へたり、或は意味を強めたり、或は指示を確實にしたりするものである。體言にも用言にも副詞にもつく。而してその位置も他の助詞に比しては稍々自由なる性質を持つてゐるものである。

（一）よ

ひとり悲しみ給ふなよ。
ひとりな月を見給ひそよ。

これは禁止の意味を持つ語の下について禁止の意味を強めたのである。

茗の袂よ、乾きだにせよ。（「せよ」の「よ」を命令形に入れない人は、やはり命令の意味をつよめるために命令形につけた「よ」であると說く。）

太郎よ、よく勉强すべし。

この「よ」は呼掛の意味を表はしてゐる。

我は今死ぬるよ。（動、連體形）
澤山人が來てゐるよ。（動、連體形）（口語）

これは連體形について上の意味を强めてゐる。

三國一の名山よ。
吾こそは源氏の嫡流よ。

これは體言をうけて、その體言を述格に立たしめてゐる。この場合は、體言と「よ」との間に「なる」といふ如き指定の助動詞の連體形が省略されてゐるとも考へられる。

夢かとよ。
養和の頃かとよ。

これは格助詞「と」の下についたのである。

さればよと思ひあはせて。

これは接續助詞「ば」の下についたのである。

「よ」は口語に於ても大體文語同樣に使はれるのであるが、口語に於ては用言、助助詞などの終止形につくことが多い點を文語と異にしてゐる。

やがて花も咲くよ。（動、終止）

一生懸命勉強するのですよ。（助動、終止）

全く今日は暑いよ。（形容、終止）

口語ではこの「よ」が時として長く延ばして使はれる事がある。強める意味が加はるのである。

これを買つて頂戴よう。

見せて下さいよう。

何を泣いてゐるのよう。

（二）や

大體の用ひられ方は「よ」と同樣である。多少感動の意味が弱い樣に思はれる。

打てや、こらせや、敵國を。

のみめ、うたへや。

見よや、あの美はしき姿を。

これは動詞の命令形についた例である。

うらめしや。

あはれいと寒しや。

かなしや、くやしや。

吉野の花も既に咲きたるぞや。

形容詞の終止形、又はすでに意味の終止したる後へついた例である。

げに面白の景色や。

古池や蛙とびこむ水の音。

松かげや月は三五夜中納言。（貞室）

體言についた例である。

大原や小鹽の山。

さゞなみや志賀。

更科や姨捨山。

しきしまや大和。

これも體言についた例であるが、上の體言が下の體言を修飾してゐる場合なので、「古池や」等の切れた場合とはちがふ樣である。

押照るや難波。

うつや皷に誘はれて。
蟋蟀鳴くや霜夜のさむしろに。
燒くや藻鹽の身。

これ等の「や」も上の用言が下の體言を修飾してゐる間に挿入された場合である。

すはや一大事。
いでや出發せん。
やよや待て。

これ等は感動詞に「や」を添へて更に感動の意味を強めたのである。

わが君や、おさなの物言ひや。
花子や、一寸御出で。

これは呼掛に用ひられたものである。

(三)し

係助詞の「ぞ」に似た所があつて、上の語を稍強く強める語である。文の中にのみあつて決して終止に來る事はない。又下の語に語法的の變化を及ぼすこともない。

そこしたぬし秋山われは。

君しふみてば珠とひろはん。

主語の下についてゐる「し」である。

島かくれゆく舟をしぞ思ふ。
生きとし生けるもの。
草枕旅にしあれば。
戀をし戀ひばあはざらめかも。

格助詞の下についた「し」である。

いつしか夜も更けぬ。
必ずしも否定はしない。

これ等は係助詞の上についたものである。上は副詞であることが多い。「かくし」「うべし」等も副詞についた「し」である。

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ。(動、連用)
そねめつなぎて討ちてしやまむ。(動、連用)(助動、連用)
人來〳〵と厭ひしもをる。(動、連用)

これ等は用言及助動詞の連用形についた例である。

「し」は時とすると過去の助動詞「き」の連體形「し」と混同される事があるから注意しなければならない。

（四）を

これは古い感動の動詞である。

八重垣つくるその八重垣を。（古事記）

あなにやしえをとこを。（古事記）

萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてをゆかんさ夜は更くとも。（古今集）

君があたり見つゝををらん伊駒山雲なかくしそ雨は降るとも。（伊勢物語）

人はいさわれはなき名のをしければ昔も今も知らずとをいはむ。（古今集）

戀しくばしたにを思へむらさきのねずりの衣色に出づなゆめ。（古今集）

つひにゆく道とはかねてきゝしかど昨日今日とは思はざりしを。（古今集）

（五）な

口語にも文語にも使はれる。文の終止したところにつくのが普通である。體言にもつく。

花の色はうつりにけりな。（古今集）

空は行かず、足よ行くな。（古事記）

同じくは着せよな蜜の濡れごろも、よそふるうちにくからずやと。（狭衣物語）

かぐや姫にすみ給ふとな。（竹取物語）

彼ぞ聟の少將よな。

それは大變なことでしたな。

中々むつかしいですな。

實に困つた事だな。

口語ではこの「な」を長く延ばして「なあ」といふ事がある。この「な」と前にのべた終助詞の「な」とでは意味のちがふことに注意しなければならない。

（六）ね

口語の間投助詞で親密の意が含まれてゐる。

今日はね、用事があつて行けないんだよ。（係助詞の下）

僕ね、今日旅行に行く所なんです。（主語の下）

本をね買ひに來たのです。（格助詞の下）

それだけね御願ひします。（副助詞の下）

それこそね一大事だよ。（係助詞の下）

あいつは馬鹿だね。（助動詞の下）

今日の天氣は實にいゝね。（形容詞の下）

益々ふえるね。（動詞の下）

この「ね」をのばして長く「ねえ」といふ事がある。多少感歎の意味をつよめる氣持である。

（七）ぞ

口語の間投助詞で、係助詞から轉じて來たものである。

何處ぞへ行かう。（格助詞の上）

誰ぞ來たか。（主格の下）

誰ぞのいたづらだらう。（連體語の上）

大變よく出來たぞ。（助動詞の下）

これは面白いぞ。（形容詞の下）

又犬が鳴くぞ。（動詞の下）

第八章　副詞

一、副詞とは如何なるものか

副詞は事物の動作、性質、狀態を修飾限定する詞である。即ち品詞でいへば動詞、形容詞を修飾限定する。しかし副詞自身も亦一種の狀態を現はす品詞であるから、副詞は他の副詞をも修飾限定するのである。

雲靜かに流る。（動詞を修飾）

空いと淸し。（形容詞を修飾）

大空いと淸く澄む。（副詞を修飾）

右の諸例はいづれも副詞が單語としての動詞、形容詞、副詞を修飾限定してゐる例であるが、この動詞、形容詞、副詞が根幹となつて連語を形成する場合がある。副詞はこの連語をも修飾するのである。

雨いまだ降らず。

櫻の眺が大變よろしいです。

われ豈これを知らざらんや。

副詞は以上の樣に用言又は副詞を修飾限定するのが普通であるが、時とすると體言を修飾すると思はれる場合もある。

僅かに一日の長あるを誇る。

唯半日の道ぞかし。

子は誠に齊人（せいひと）なり。管中晏子を知るのみ。

右の例で「僅かに」「唯」といふ副詞は、「一日の長ある」「半日の道」の全體を制限するのか、或は「半日」「一日」を限定するのか問題である。假りに「半日」「一日」を修飾するものと考へてみても、之を以て直ちに副詞が體言を修飾

するとは斷言出來ないのである。何故ならば「一日」「半日」といふ樣な數詞は、その本質が既に副詞的修飾語たり得る性質を持つてゐるからである。且つこゝでは「一日の」「半日の」と助詞「の」を伴つて、形容詞的修飾語として使はれてゐるからである。然らば第三の例の「誠に」といふ副詞は「齊人」といふ體言を修飾してゐるのであらうか。併しこの場合も實は「齊人」といふ體言のみを修飾してゐるのでなくて、「齊人なり」といふ連語を修飾してゐるのである。それは前にあげた例でも分るが、次の例ででも分るであらう。

面貌さながら猿の如し。

又ある人は副詞は文全體を修飾限定すると說く。

恐らくは此の說當らさらむ。

畢竟平生の心掛が惡いからだ。

しかし、右の例をよく考へてみると、第一の例は語句の順序を顚倒して

此の說恐らくは當らさらん。

ともいへるのであつて、「恐らくは」は「當らさらん」といふ連語を修飾してゐるのである。第二例は多少下の文全體を修飾してゐる樣に考へられるが、これとても

平生の心掛が畢竟わるいからだ。

と言へない事はないので、「子は誠に齊人なり」の例と同じではあるまいかと思ふ。從つて副詞が文全體を限定すといふ事は一すいひにくいと思ふ。

なほ副詞の意義を明かにするためには、之を形容詞と比較する事が便利である。

(一)副詞は用言を限定するが、形容詞は體言を修飾する。

花が非常に美しい。(副詞)

美しい花が咲いた。(形容詞)

(二)形容詞には活用があるが副詞には活用がない。

空清く澄む。

この「清く」は活用するのではないかといふ人があるかも知れないが、これは副詞として活用するのではなくて、形容詞として活用するのである。「清く」は形容詞の連用形ではあるが、これは副詞として使はれてゐるのであつてこの形が變化して他の形となれば、それは副詞としての職分を失ふのであるから、畢竟副詞には活用はないのである。

(三)副詞は他の副詞の意味を修飾する事があるが、形容詞は幾つ重なつても、下の體言のみを修飾するのである。

非常に烈しく鳴る。

大きい白い犬。

(四)形容詞は述語になれるが副詞は述語になれない。

副詞と數詞とは前にも述べた樣に密接の關係があるが、次の例にてもその事はよく分ると思ふ。

敵兵十萬を擒にす。（體言、數詞）
敵兵を十萬擒にす。（副詞）
書物十卷を買ふ。（體言、數詞）
書物を十卷買ふ。（副詞）

かうした副詞と體言との關係は、更に副詞をして體言の如く使用せしめるに至る樣に思はれる。

まづの位。
皆の衆。
唯の身。
なほの事。
わざとの聲たてぬ念佛。
かねての願。
必ずの後。
やがての別れ。

副詞は單語である以上、文章法でいふ副詞的修飾語と區別しなければならぬ。

（甲）人を感動せしむること誠に如くはなし。

（乙）そは誠に君の說の如し。

この二例に於ける「誠に」は、その構成は同一であるが、意義職掌は同一でない。甲の例は品詞上、「誠」といふ名詞と「に」といふ助詞とに分つべきもので、乙の例は一單語の副詞として取扱ふべきものである。若し文章法の上から見るならば、甲・乙とも勿論副詞的修飾語である。（「中等新國文典別記」參照）

山田孝雄氏の副詞論はやゝ通常の文法と異り、その性質と職能よりして、之を情態の副詞、程度の副詞、陳述の副詞、接續の副詞、感動の副詞の五つに分けてゐる。

- 副詞
  - 先行副詞
    - 語の副詞
      - 陳述の副詞……（一）
      - 屬性の副詞
        - 情態副詞……（二）
        - 程度の副詞……（三）
        - 從來の副詞
    - 感動の副詞……（四）感動詞
  - 接續副詞……（五）接續詞

二、副詞の位置

副詞はその修飾限定すべき語のすぐ上に置かれるのが普通であるが、時としては數語をへだてゝその上に置かれる事がある。

容貌甚だ母に似たり。
我が軍大いに敵兵を敗る。

從つて副詞は、その下に、その關係し得る語が二つ以上(一文中に)ある時は、往々そのかゝる所(修飾限定する語)が明瞭でなく、味意に誤解を生ずる場合がある。

全く然らず。

(一)「全く」といふ副詞が「然らず」全體にかゝると見るもの。「全不然」(漢文)に當るもの。
(二)「全く」といふ副詞は「然り」といふ動詞だけにかゝると見るもの。「不全然」(漢文に當るもの)。

千里の馬常にあれども伯樂常にあらず。

(一)伯樂は常には居るまい。たまには居ることもあらう。(全部にかゝる)
(二)伯樂常に居らぬ。決して居らぬ。(一部にかゝる)

彼はその兄の如く伯樂ならず。

(一)彼はその兄が伯樂でない樣に伯樂でない。(兄も弟も伯樂でない。)
(二)彼はその兄ほど伯樂ではない。(兄も弟も伯樂であるが技倆がちがふだけ。)

余は甚だ赤き花を愛せず。(一)(二)(三)

(一)「甚だ」は「赤き」にかゝる。余は眞紅の花がきらひである。「余不レ愛二甚赤花一」
(二)「甚だ」は「愛せず」へかゝる。余は赤い花はそんなにきらひではない。少しはすきだ。「余不二甚愛一赤花一」
(三)「甚だ」は「ず」のみにかゝる。余は赤い花は大きらひだ「余甚不レ愛二赤花一」

誠心誠意國家に盡されんことを祈る。(一)(二)(三)

(一)國家に誠心誠意で盡される樣に祈る。
(二)國家に盡されることを誠心誠意で祈る。

又副詞には次の樣な場合がある。

猥りに昇降を禁ず。
高聲に談話を禁ず。

この場合「猥りに」及び「高聲に」を「禁ず」にかけたとしたら、この文の原意とは意味のちがつたものになるであらう。故に「する」といふ語を入れて、「昇降する」「談話する」といふ動詞にして考へるのである。けれどもよく考へてみると、「昇降」「談話」は形は名詞であるけれども、元來動作を表はす名詞なのであるから、動詞的の使はれ方をしてゐるのである。國語では古くからかういふ使ひ方がある。

將門を追討の賞にて秀郷正四位に叙し。(神皇正統記)
北の妻戸を入御の時。(公事根源)
俊寛鬼界が島へ流されのこと。(平家物語)

一つの語が上に對しては用語、下に對しては體言となつてゐるのである。

是非御奮發を祈上候。
深く御心配は御無用に候。

折角御自愛祈上候。

大船を漕ぎのすゝみに。

家に急ぎの牛追ふ子。

三、副詞の種類

副詞の種類は職能の上からは區別することは出來ないのであるが、意味と成立の上からは多少の區分を施すことが出來るのである。

(一)意味による副詞の種類

三矢重松氏はその著「高等日本文法」に於て、副詞を意味の上から分類して次の七種にしてをられる。

1、程度の副詞

いと、もつとも、すこぶる、はなはだ、いたく、あまり、よほど、やゝ、大層、等。

2、狀態容貌の副詞

靜かに、速く、美しく、きつと、どつさり、せめて、いよ〳〵、すべて、特に、且つ、げに、ちやうど、ほとんど、けだし、若し、はるかに、嚴に、徐ろに、恰も、更に、つぶさに、つら〳〵、中々、まづ、むしろ、專ら、きつと、愈々、等。

3、情意の副詞

これは願望・推量・意識・言動など、主觀の心もちをあらはした副詞である。

願はくは、思ふに、聞くならく、恐らくは、豈に、まさか、よも、成程、けだし、生憎、まさに、たとひ、いづくんぞ、さぞ、さこそ、等。

4、數量の副詞

これは數詞をそのまゝ副詞として用ひるものであつて、その外に漠然と數量を表はすやうなものも皆これに入ることが出來る。

ひとつ、ふたつ……一里、百度、ふたゝび、いさゝか、みな、ことごとく、すべて、半ば、よろづ、等。

5、時の副詞

今、昔、嘗て、後に、昨日、本日、しばし、久しく、いつ、はじめ、折々、時々、明治四十五年、午後十時、年々、歳々、等。

6、場所の副詞

こゝに、いづこに、そこに、ところ〴〵、道々、等。

7、原因の副詞

單語ではあまり例が無いが、熟語、連語などには多い。

何故に、如何にして、……ために、……によりて、等。

「廣日本文典別記」(一〇九頁)には次の樣に書いてある。「世の文典に、副詞を地位・時刻・順序・分量・決定など數種に分類して說けるがあり。若し語義の分類を文典上に說かばあらゆる名詞・動詞・形容詞の意義分類も皆說

かざるを得ざらむ。何の究極する所ぞ。」文法に語義を說くは勿論その一部分にすぎない。

(二)成立による副詞の種類

語の成立は文法としては決して必要ではないのであるが、便宜これを說くことにする。

1 固有語と外來語

(1) 固有語

いと、たゞに、もつとも、ひたすら、等。本來のわが國語の副詞である。

(2) 外來語

一切、大抵、再三、畢竟、所詮、多分、毎々、年々、往々。

現に、實に、別に、特に、

ストリクトリーに、エクザクトリーに、等。

漢語そのまゝ、或は漢語及び英語に助詞の「に」をつけて用ひられる。

2、本來語と轉成語

(1) 本來語

なほ、まづ、たちまち、いと、たゞ、等。

の如く他の品詞から轉成して來たのではなくて、本來からの副詞をいふのである。

(2) 轉成語

これは副詞以外の品詞から轉じて來たもので、そのまゝ若くはこれに助詞の添うて出來たものが多い。たとへ活用語から轉じて來たものでも副詞としての活用のないことは既に述べた通りである。

I、名詞より

今、昔、露、夢、古、去歲、（そのまゝ）

誠に、實に、幸に、世に、（にを添ふ）

わざと、仕合と、（とを添ふ）

II、數詞より

一つ、二つ、第一、第二、十里、五人。

III、代名詞より

何、こゝら、そこら、いづち、あそこに、どこに。

IV、動詞より

すべて、あへて、極めて、決して。（連用形十て）

たとへ、あまり、つまり。（連用形）

たゞへば、言はゞ、思へば。（未然、已然十ば）

みだりに、しきりに（連用形十に）

思はず、絕えず、知らずに。（未然十助動詞）

しみ〴〵、とり〴〵、重ね〳〵。（疊語連用形）
ゆく〳〵、泣く〳〵、見す〳〵。（同　終止形）
願はくは、恐らく、疑ふらく。（疑はくの誤推、くはすべてア列に添へる。）

V、形容詞より

よく、美しく、新しく、靜に、判然と。（連用形）
はや、はるか。（語幹）
長々、うす〳〵、とく〳〵、よく〳〵。（疊語）

3、熟語の副詞

二個以上の、單語が結合して一つの副詞となるもの。

折惡しく、程なく、やゝもすれば、左樣に、彼此、尙更、降りみ降らずみ。

4、接尾語をつけて副詞とするもの。

(1) づつ
一人づゝ、三日づゝ、

(2) ながら
我ながら、思ひながら、

(3) すがら
夜すがら、路すがら、道中すがら、

(4) がてら
見がてら、遊びがてら、待ちがてら、

(5) づから
手づから、おのづから、口づから、

（四）形容詞と副詞との關係

形容詞と副詞とは、有樣を修飾するといふ意味に於て共通であるので、形容詞の全部はその連用形（副詞形）から副詞となるし本來の副詞の中にも形容詞となるものがある。

新しく、美しく、悲しく、よく、いたく、長く、高く、低く、

等は形容詞の副詞となつたものであるし、

いまだし、甚だし、いとゞし、うたてし、げに〳〵し、きら〳〵し、

等は副詞から形容詞になつたものである。

又情態言の大部分は次の形を以て、形容詞（形容動詞をも含めて考へて）副詞いづれにもなるもの多い。

誠に　愚かに　靜かに　遙かに
誠しき　愚かしき　靜けき　遙けき

いさゝか　あやにく　思はず
いさゝかなる　あやにくなる　思はずなる

徒に　巧に　切に　明かに
徒なる　巧なる　切なる　明かなる

蕭々と　堂々と　儼然と
蕭々たる　堂々たる　儼然たる　（春日政治著「新體中等國文法教授資料」參照）

（五）口語の副詞

文語と共通なもの、文語の中で用ひられないもの、或は文語の變化したものなどがある、しかし位置・職能等に就いては變りがない。たゞ擬聲的、擬貌的の語が文語に此して多いことは稍々注意を要する。

かさ〳〵　から〳〵　さら〳〵　ざわ〳〵　ざく〳〵　ごろ〳〵
はた〳〵　ばた〳〵　ばた〳〵　どし〳〵　ちい〳〵　ちく〳〵
てか〳〵　はら〳〵　ぺちや〳〵　しやな〳〵　そろ〳〵　ころ〳〵
とん〳〵　どん〳〵　つん〳〵　ぐん〳〵　こん〳〵　ぼん〳〵
むつと　からり　ほろり　すつかり　しつくり　どつさり
ぺつたり　ぽたり　ぽつちり　きよとん　あつけらかん

第九章　接續詞

一、接續詞の意義

接續詞は語（連語）・句（節）又は文をつなぎあはせるために用ひられる品詞をいふ。接續詞には語尾變化といふものはない。

春又秋をすゞす。（語）
雨及び風になやまさる。（語）
書物の原稿並びに演說の腹案。（連語）
山を仰ぎ或は川をのぞむ。（句）
汽車が遲れた爲に私は遲刻した。（節）
立秋となりぬ。されど風未だ涼しからず。（文）

接續詞の中には副詞から轉じたものが多いから、形態上同一の語が、二者いづれの品詞に屬するかといふことはその場合々々に應じて異つてゐるのである。文法家によつては副詞を次の如くに分類してゐる人さへある位である。

- 副詞
  - 本來の副詞
    - 情態副詞
    - 程度副詞
    - 陳述副詞
  - 接續副詞……接續詞
  - 感動副詞……感動詞

次の二例を考へ合せてみれば分るだらう。

一度止みし雨又降り出でぬ。（副詞）
山又山を登りゆく。（接續詞）

世の中は常かくのみと思へどもはた忘られずなほ戀ひにけり。（副詞）
雲か、山か、はた越か。（接續詞）

世の中し常かくとのみと且つ知れどいたき心はしぬびかねつも。（副詞）
武を修め且つ文を講ず。（接續詞）

人々、あるひは笛をふき、あるひは歌をうたふ。（接續詞）
それあるひは然らん。（副詞）

しかし、これに就いてはなほ議論の餘地もある。その例としては、「國語法概說」（安田喜代門著、中興館發行）中の副用語なる章下、「いはゆる接續詞」（二六〇頁——二六五頁）を擧げることが出來る。

要するに接續詞的用法と副詞的用法（修飾的用法）とを一語が持つてゐるといふ樣な場合を認めないわけにはゆかぬのである。而して單に下のものゝ修飾としてのみ用ひられたものを副詞とし、接續的の意味をも併せ有するものは接續詞と見てよいと思ふ。

二、接續詞の種類

接續詞は大體次の如くわけて考へることが出來る。

一、並列的接續詞

(一)同格（並列）

同格のものを二つ若くは二つ以上並べて言ふときその間に置かれる接續詞である。同格であるから接續詞を挾んで、その前後の語・句・節・文等は位置を交換しても意味に變化は生じないものである。

東京・京都及び大阪を日本の三大都といふ。
金閣並びに銀閣は足利氏の建立にかゝる。
東臯に登つて嘯き、或は清流に臨んで歌ふ。
書を讀み、又詩を賦す。

(二)添加（累加）

一定の空間的順序若くは時間的順序によつて物事をならべて言ふ場合である。前後の位置を轉ずれば意味には變化を來すのが普通である。

今春奈良に遊び、ついで吉野に行きたり。
私も參りますが、なほあなたも行つて下さい。
雨もひどかつた、その上風さへ烈しかつた。

「且つ」「加之」「而して」（そして、さうして）「それに」「それから」「かたゞ」等の語はみなこれに屬する。

(三)選擇

これは二つ若くは二つ以上ある事物の中から、その一つの事物を選び出す時に用ひるものである。前後の順序を換へるときは輕重に於いて多少の意味の變化を伴ふのが常である。

生か、はた死か。

イエスと言つたのか、それともノーと言つたのか。

汽車若くは電車で參ります。

「または」「或は」「あるは」「はた」「就中」等はみなこの用をなす接續詞である。

二、條件的接續詞（因果的接續詞）

上に一つの條件があり、下に之に對して起り來る或る事實がある時、その兩者の間の關係が當然至當なる時、順說といひ、その反對に條件と事實とが相應しない時に逆說といふのである。然してその條件と結果とを結びつけるのがこの條件的接續詞である。

（一）順　說

上の事情條件と、それから當然起る結果とを接續するもので「しかれば」「しからば」「されば」「さらば」「では」「それでは」「かくて」「これをもつて」「ですから」「それですから」「だから」「それだから」「それなら」「そんなら」「そこで」「すると」「さうすると」「すれば」「さうすれば」「したら」「さうしたら」「それで」「從つて」「因つて」「故に」等之に屬する接續詞は中々多い。

春來れり、されば溫かなり。

冬來るらし、故に寒し。

北に良灣を控ゆ、從つて船舶の出入多し。

（二）逆　說

上の條件と、之に相應しない結果とをむすびつける詞である。

春來れり、されど溫かならず。

秋來れり、然るに紅葉せず。

今學期は隨分よく勉强したつもりだ、だが矢張駄目だつた。

これに屬する語も中々多い。「しかれど」「しかれども」「されど」「されども」「さるに」「しかるに」「さりながら」「しかも」「しかしながら」「しかし」「但し」「けれども」「だけれども」「それだけれども」「ですけれども」「それですけれども」「だが」「それだが」「ですが」「それですが」「だのに」「それだのに」「ですのに」「それですのに」「でも」「それでも」「それに」「だつて」「だつても」「ところが」が等文語口語共に多い。

三、接續詞と助詞

助詞の中のあるものには接續詞の用をなすものがある。たとへば

山と川とを越ゆ。（並列）

雨止みて空晴る。（添加）

毛筆がペンを持參すべし。（選擇）

秋來れば涼し。（順說）

冬來れども暖かなり。（逆說）

こ等れは意味に於ても用法に於ても、接續詞と稱して差支のないものである。むしろ西洋語の接續詞はこれ等を言ふと言つた方が當つてゐるかもしれない。然らばこれ等の助詞は本章にていふ接續詞と如何なる點が異つてゐるかといふに、上の語句との緊密の度合に於て區別するより外に仕方が無いと思ふ。

山と川、――山又川

秋來れば――秋來れり、されば紅葉せり。

「と」及び「ば」は上の「山」及び「來れ」に對する結合の度合が、「又」及び「されば」の「山」及び「來れり」に對するよりも緊密である。これを區別としてかゝる類の助詞はこれを接續詞として扱はないのである。その他助詞の章下の接續助詞の條下をも參照して、接續詞との區別を考へて置く必要がある。

四、接續詞の成立

接續詞はその成立より考へてみるのに、純粹の本來語と思はれるものが少くて多くは他の品詞から轉來したものである。轉來以外の接續詞は又多く熟語である。

(一)副詞から轉來したもの

且つ、又、なほ、すなはち、たゞし、もつとも、また等

(二)名詞から轉來したもの

間、處、爲（これ等は所謂候文に使はれるもので之を接續詞に入れるか否かについては議論がある。）

故、條

(三)動詞から轉來したもの

及び

(四)熟語によつてなれるもの

動詞＋助詞　並びに　從つて　就いて（は）

名詞＋助詞　故に　爲に

副詞＋助詞　かくて　若しは　又は　しかしながら

副詞　助詞　助動詞　助動詞

その他　しか　のみ　ならず

五、口語の接續詞

上述の例の中には口語も交つてゐたのでその用法のある部分は分つたと思ふが、口語の接續詞としての特徴と思はれる點が二つある。その一つは、文語の接續詞としては獨立に使用されることのないものが口語では獨立に使用されることである。

量の少きのみならず質も甚だ悪し。（文語）

量が非常に少い。のみならず質も大變悪い。（口語）

四年目の終が來た。市九郎の掘り穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居たが、その三町を超る絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。（口語）（「が」は勿論接續助詞である）

文語に於てはかゝることは絶對にない。「だけれども」「すると」「だのに」等も同樣に文の頭に立つて獨立に使はれることがある。その二は、（勿論一と關聯するのであるが）略した形が多く用ひられるといふことである。

人が集つた。（そう）して演說が始まつた。

品が出來あがつた。（そこ）で、見せてもらつた。

風が吹く。（そう）すると、ほこりがたつ。

雨が降つた。（それ）だから、人が來なかつた。

括弧内を略して用ひるのである。（「口語法　第九章接續詞一四九――一五〇頁參照）

第十章　感動詞

一、感動詞とは如何なるものか

感動詞は感動した時に發する語であつて、感歎詞とも間投詞ともいふ。間投詞は西洋語の Interjection の譯語であつて、文章の中間に投げる語といふ意味である。感歎を表はす語は多く他の語の中間に挿入せられるといふ所から名付けられたものである。

由來感動詞は感情に激した時や意志の發動した時に思はず知らず發する聲であつて、意識的に一定の觀念を現はすものではない。之を言語學的にいふと、喜怒哀樂驚愕恐怖などの場合に思はず知らず發する聲音は之を Interjectional cries（間投的叫聲）と言つて眞の意味の言語とは區別して考へて居るのである。（國語の如何にかゝはらずこの間投的叫聲には共通のものが多い。これ言語としての本質の乏しい一證である）即ちこの間投的叫聲が眞の意味の言語と區別せらるゝ點は、單にそれが無意識に發せられるといふばかりでなく、さうした叫聲に依つて發表される思想感情は漠然たる一とかたまりのもので、いはゞ思想感情の全體的直寫であつて、その間に思想の分解綜合といふものが行はれてをらない。換言すれば思想上の調節といふものが無いのである。いはゞそれ等の音聲は一つの文章全體を現はしてゐるやうなもので、文章を組立てゝ居る個々の成分、單語が表はれては居ないのである。「しつ」といふ聲は靜かにさせる手段にはなるが、思想的内容は漠然たる一體であつて、「どうか皆さん靜かにして下さい」といふ時に行はれる思想の分解綜合がないのである。感動詞が Sentence word（文章語）と言はれ、Sentence equivalent（文章と同價値のもの）と言はれるのもその爲である。しかし、これは思想上文と同價値であるといふまでの事であつて、文法上の文章といふことは出來ないのである。この點は誤解のないやうにしなければならぬ。文法上の文章は主語・述語を具へてあるまとまつた思想を表はすものでなければならないが思想上の文としては單に一語でも同價値を持ち得るのである。「あゝ」といふ一語が場合によつては「私は大變うれしい」といふ意味も表はし得るのである。「非常に悲しい」といふ意味も表はし得るのである。

これはしかし、言語としての感動詞の起源論であつて、文法上感動詞といふものは意識的にある情意を表現するための詞であつて、偶然に發せられていまだ一單語をなしてをらないやうな詞にこれを入れないのである。はじめは無意識に反射的に發せられたものでも、その聲音が反覆して使用されるに從つて、一定の約束の下に一定の了解を言語として生ずるに至るのである。併しその一定の意味たるや極めて漠然たるものであることは、他の品詞と頗る趣を異にしてゐるのである。

又感動詞は常に獨立的に用ひられて他の主要な品詞と結合する事の無いといふ點が、他の品詞と趣を異にせしめる第二の點である。つまり感動詞は文の組織中には入らないもので、之を取り去つても文章の論理的構成を破壞するといふことは無いのである。この意味からも眞の文法上の一品詞とする事は不可能である。けれども今日の文法では、品詞の中から感動詞を除去するといふ事は困るので、他の品詞と並べて論ずるのである。從つて、一定の約束の下に了解されない樣な奇激な叫聲で情意を含まないやうなものは之を感動詞の中には加へないのである。

文法家に依つては、さきに助詞の中の間投助詞の條下で述べたやうな語、例へば「よ」「や」「な」の如きものをも感動詞の中に加へて論ずる人があるが、如上の二特點から考へて、これ等は感動の意味を持つてゐる助詞として、之を感動詞の中に加へないが至當である。

感動詞と副詞との交渉といふことを次に考へて見るに、感動詞も考へ方によつては下に來る文全體を修飾してゐるが如くも思はれないではない。即ち

あはれ、めでたき歌の調べよ。

いざ、諸共に花櫻見ん。

に於ける「あはれ」「いざ」等は、次に來るべき文の表はす情意を縮圖的に表はしてゐるとも考へられるからである。この點よりすれば感動詞も幾分副詞的の性質を持つてゐるやうでもあるが、併し、品詞中の一單語の性質としても、又文章構成上の成分といふ點から考へても、副詞と感動詞は區別せられるべき點を以つてゐるのであるから、副詞と同一には論ぜられないのである。

感動詞に語尾變化のない事や、その使用されるに當つては文の頭に置かれるといふことなどは今更說明する要もないであらう。

二、感動詞の種類

(一)驚愕・恐怖・嗟嘆・喜怒・哀樂等の感情をあらはすもの

あ　あ、一大事。

あゝ　あゝ、悲しい哉。

あな　あな、怨めしや。

あら　あら、あつやとて兜巾をぬぎて。(太平記)

あはれ　あはれ、今年の秋も往ぬめり。(千載集)

あはや　あはや、法皇の流されさせおはしますぞや。(平家物語)

あつぱれ　あつぱれ、功名手柄も立てんものを。
はれ　はれ、苦しや。

（二）呼掛・誘起・罵詈等意志の働きをあらはすもの

や　や、お局此のかさ見てたび候へ。（古今著聞集）
やあ　やあ、正綱、親將が十四歳に遇ふこと、再びやあるべき。（潘翰譜）
やよ　やよ時雨物思ふ袖のなかりせば木の葉の後に何を染めまし。（新古今集）
やよや　やよや又き鳴けみ空のほとゝぎす五月だにこそ落ちかへりつれ。（新勅撰集）
いで　いで、消息きこえんとて立つ音すれば。（源氏）
いでや　いでや、あな恥かし。（空穗物語）
いざ　鏡山、いざ立寄りて見て行かむ。
すは　すは、大軍の攻め寄せたるぞ。
すはや　すはや、敵は色めきたるは。（太平記）

その他疑訝・注意・警戒・制止・發語・感服・應答など場合場合に應じて特殊の語を使用することが多い。

三、口語の感動詞

「口語法」（國語調査委員會編纂）では口語の感動詞を次の四種にわけて説いてある。（二八〇頁——二八五頁參照）

（一）感情をあらはす聲

あ　あ、しまつた。
あゝ　あゝ、くたびれた。
あら　あら、お珍しい。
いや　いや、とんだことになりました。
え　え、なんですと。
えゝ　えゝ、口惜しい。
おう　おう、さむい。
おつと　おつと、あぶない。
おや　おや、また忘れて來た。
さあ　さあ、大變だぞ。
そら　そら出た。
それ　それ早くにげろ。
なあ　なあ、さうだらう。
ね　ね、さうでせう。
ねえ　ねえ、よろしいでせう。

はあ　はあ、さうですか。
ははあ　ははあ、ご尤もで。
はて　はて、どうしたらう。
はや　どうも、はや、困りました。
まあ　まあ、だれでせう。
もう　いや、もう感心しました。
やあ　やあ、お珍しいではありませんか。

（二）人を呼ぶときに發する聲

おい　おい、前田君。
おうい　おうい、車屋。
もし　もし、あなた。
もしもし　もしもし、ちよつと。

（三）人に答へるときに發する聲

あゝ　あゝ、いゝとも。
えゝ　えゝ、出來ます。
は　は、今すぐまゐります。

はあ　はあ、左樣ですか。
はい　はい、もうすみました。
へい　へい、有難うぞんじます。

（四）打消して答へるときに發する聲

いえ　いえ、まだ參りません。
いゝえ　いゝえ、何も存じません。
いや　いや、ほんたうです。
いゝや　いゝや、ちつともない。

その他「よう」「どれ」「これ」「こりや」「えつ」「やい」等數多い。

四、轉來の感動詞

本來の感動詞の外に、他の品詞から感動詞に轉用されるものがある。

（一）名詞より

南無三寶、しまつた。
畜生、氣をつけろ。
弓矢八幡、他言はせじ。

糞つ、まけるものか。

(二)代名詞より

それ、そんなことになつた。

どれ、出掛けよう。

なに、大丈夫だよ。

あれ、飛行機がとんで來た。

(三)副詞より

さて、何こせん。

なんと今日の暑さはというて石を吹く。

いかに、者共。

(四)形容詞より

形容詞に感歎の意を表はす助詞を附けたものは、文の頭に來る時に限つて感動詞として扱つてよい。時には形容詞の語幹のみで使はれることもある。

かなしや、君遂に逝きぬ。

うらめしや、我ははかられぬ。

くやしや、武運拙く敗れたり。

あなかしこ、忘れたまふな。

その他擬聲語及び掛聲はやし言葉の如きものも、引用されては名詞の代用となり、又助詞を伴つて副詞の用をなすこともあるが、本來は感動詞とすべきものであらう。

第十一章　單語の構成

一、單語構成の意義

單語を文法的品別中に占める位置より論ずる品詞の各論は、上述の諸章に於てその大體を盡したつもりであるから、單語全體に通じての構成に就いて概略の説明をして置きたいと思ふ。

單語は本來出生のまゝで單語として存在してをるのが、大部分であるが、更に他の造語要素と結合して、別に一つの單語を作る場合も多いのである。文法家の所謂「由生語」といふものを作る場合が少くはないのである。又單語は、既に完全なる單語として存在するものが二つ若くは二つ以上結合して作られる場合も多いのである。(この場合品詞の同一なるものが結合することもあれば、又異る品詞の結合することもある。)かくして出來たものが所謂「複合語」といふものである。この二者を説明することによつて單語の構成は明かになるであらう。

二、接頭語と接尾語

接頭語・接尾語は單語の上部若くはその下部に著いて、その單語にある種の意味を加へる成分(構成要素)である。

この「著く」といふのは單に接續するといふだけの意味ではなくて、その上下に有る單語と融合して一つの品詞となることが必要なのである。而してこの接頭語・接尾語はそれ自身獨立して完全なる意義用法を行使するといふことはなく、必ず他の單語と結合して用ひられるものである。即ち單獨なる構成要素ではなくて、既に存在せる單語に附著して更にその單語をある種の意味を加へ持つた單語たらしめるものなのである。從つて接頭語・接尾語は單語でもなければ品詞の中へも入らぬものである。文法家によつては英語のの Affix 譯語である「接辭」といふ名稱でこの兩者を總括的に呼ぶ人もある。接頭語・接尾語は上につくか下につくかに依つて名付けられた名稱で、前者は英語の Preffix の譯語、後者は同じく Suffix の譯語である。

(一)接頭語

接頭語はこれを大別して、

1、意義を添へるもの

2、意義を添へないもの

の二種とするのが常である。

1、意義を添へるもの

添へる意義にはいろいろの種類がある。今その大要を列擧してみる。

(1)尊敬の意（第一章名詞、四敬讓の名詞の條參照）

み位　み代　み民

お年　お珍らしい　お出でになる

おほ前　おほ内　おほ歌

おほみ代　おほみ言　おほみ神

おほん時　おほん寶　おほん身

おん身　おん時　おん名

おみ帶　おみ足　おみこし

おみおつけ　おみお膳

ご殿　ご先祖　ご用心

(2)眞實の意

ま心　ま黑　ま東　ま晝　まん中　まつか（眞赤）

み草（眞草）

(3)純粹の意

き藥　き紙　き絲　き蕎麥　き娘

(4)飾のない意

す肌　す足　す顏　す諸　すつ裸　す町人（これはつまらぬ意）

(5)小さい又は少しの意

を川　を舟　を暗し　を止む

こ雨　こ松　こ半里　こ面憎い　こさつぱり

(4)大きい又は多いの意

おほ雨　おほ川　おほ水　おほ地震

(7)初めての意

うひ陣　うひ孫　うひ産

はつ春　はつ盆　はつ雪　はつ旅　はつ午

(8)新なる意

にひ月　にひ妻　にひ骨　にひ參り

(9)似て非なる意

えせ法師　えせ紳士　えせ士

(10)異なる意

こと言　こと國　こと心　こと處

(11)打消又は無い意

ふ承知　ふ服　ふ信心　ふ便　ふ利益

ぶ沙汰　ぶしつけ　ぶ器用　ぶ遠慮

む欲　む分別　む能　む筆

(12)あやまれる意

ひが言　ひが目　ひが耳

(13)すぐれたる意

いち早し　いちもつ

(14)彌々の意

いや衆　いや高し　いや増しに

(15)事物の數の多い意

もろ人　もろ共　もろ聲　もろ手

しよ國　しよ大名　しよ方

た年　た數　たす　た年

しゆう僧　しゆう議　しゆう人

(17)順序の意（助數詞はすべて接辭である）

第一

2、意義を添へないもの

これは更に二つに分れて

(1)語調(音調)を整へるもの
(2)意義の強弱を加減するもの

となる。

(1)語調を整へるもの

み空　み霧　み吉野　み雪
さ牡鹿　さ夜　さ迷ふ　さ渡る
を野　を田　を山田　を筑波
た走る　た易し　たなびく　た謀る　た比ぶ
け近し　け壓さる　けざやか　け長し　け疎し
い行く　い通ふ　い向ふ　い坐す
か弱し　か細し　か寄りあふ　か易し
そたゝく　そ馴る
ひ弱し

(2)意義の強弱を加減するもの

うち見る　うちやる　うち取る　うち解く
ぶち殺す　ぶちまける　ぶつ倒す

かき破る　かき曇る　かき拂ふ　かつ拂ふ
あひ成る　あひ見る　あひわたす　あひ濟む　あひ構ふ
とり卷く　とりあつかふ　とりなし　とりしまる　とつ締める
さし出す　さし控へる　さしつかへ　さしおさへ
ひき越す　ひきうける　ひきとる　ひきつぐ　ひつ剝がす
たち歸る　たち寄る　たち別る　たち越ゆ
もて扱ふ　もてなやむ　もてはやす
おしかくす　おし廣める　おし立つ

右の例でも分る樣にこの種のものは手の働を示す動詞から來てゐるのが全部で、その動詞の連用形が他の動詞に加はつてゐる形である。而していづれも之を加へることによつて語勢を強めてゐるのである。

(二)接尾語

接尾語は之を大別して

1 意義を添へるもの
2 或品詞に他の資格を與へるもの

の二つとする。

1、意義を添へるもの

(1)尊敬の意（第一章名詞、四敬讓の名詞の條參照）

神さま　佛さま　御醫者さま

叔父さん　姉さん　大工さん

中尉どの　捨吉どの

小僧どん　お竹どん　西鄕どん

一郎くん　高山くん

兄ぎみ　父ぎみ

姉ご　母ご

兄上　母上

山本先生　市川先生

(2)卑下の意

丁稚め　悴め　馬鹿め

(3)多數の意

子供ら　兵士ら　是れら　少女ら

女ども　私ども　家ども　馬ども

君たち　軍人たち　親たち　お前たち

奴ばら　法師ばら　殿ばら　女ばら

皇族がた　殿がた　皆樣がた　宮がた

(4)互に伴侶なる意

友どち　女どち　我れどち

(5)事物を數へる意

ひとつ　みつ　なゝつ

はたち　みそぢ　いくそぢ

ひとり　ふたり　いくたり

ふつか　みか　よか

(6)事物の順序を示す意

三日め　三度め　五枚め　六人め

二番　八番　何番　十番め

六號　七號　三號め

五等　六等　何等

一級　二級　何級

2、資格を與へるもの

(1)名詞の資格を與へるもの

高み　深み　旨み　重み

遠さ　青さ　善さ　行くさ　大膽さ

眠け　寒け　怖け

雪げ　大人げ　子供げ　さびしげ　若げ

讀みて　書きて　やりて

細め　控へめ

ありか　すみか

ゆくへ　しりへ

山べ　川べ

(2)動詞の資格を與へるもの

時めく　今めく　春めく　唐めく

今めかす　才子めかす　時めかす

大人ぶる　學者ぶる　勿體ぶる　上品ぶる

鄙ぶ　大人ぶ　ことさらぶ　田舍びる

氣色だつ　まめだつ　頭だつ　親だつ

黄ばむ　枯ばむ　由ばむ　塵ばむ

うべなふ　音なふ　うべなふ　あざなふ

面白がる　うれしがる　いやがる　寒がる

垢じみる　狂人じみる　年寄じみる

若やぐ　花やぐ　爽やぐ　婀娜やぐ

神さぶ　少女さぶ

幸はふ　味はふ　にぎはふ

(3)形容詞の資格を與へるもの

女らし　男らし　子供らし　學者らし

學者らしい　わざとらしい　本當らしい

露けし　はるけし　暑けし

人がまし　隔てがまし　議論がまし

をこがましい　無禮がましい

みだりがはし　らうがはし

甚だし　いまだし

(4)副詞の資格を與ふるもの

美しげに　うれしげに　心地よげに
甘さうに　うれしさうに　面白さうに
つぶらに　清らに　わびしらに
たひらかに　きよらかに　つぼらかに
はなやかに　しのびやかに　まめやかに
路すがら　夜すがら
人ごと　三年ごと　月ごとに
三つづつ　七人づつ　五枚づつ
歸りがてら　花見がてら　散歩がてら
歩きながら　讀みながら　春ながら　内ながら
かへりがてに　過ぎがてに
濃きからに　吹くからに　取りしからに

三、複合語

複合語は合成語ともいふ。二つ若くは二つ以上の單語（品詞の種類は同種でも異種でも構はない。）が集つて、一つの單語となつてゐるものを言ふ。ある單語に接頭語又は接尾語のついて出來た單語も實は嚴密なる意味からいへば複合語であるが（これを熟語の中に入れて說く文法家もある）、こゝではこれと、複合語である單語とは異るものとして說く。而してその兩者の間には次の相異點を認めるのである。

(一)接頭語接尾語のついて出來た單語

この單語中から一個の單語を遊離させる事が出來るが、そのあとに殘つた語は獨立した單語ではない。即ちこの單語中には成分として一個の單語しか存在しない。而してその一個の單語の屬する品詞が出來上つた單語の品詞を決定するのであつて、その表はす意味はどこまでも一個の單語が中心として表はされるのである。

(二)複合語

この單語中からも一個の單語を遊離させることが、出來るがあとに殘つた單語は同じく一つの（或は一つ以上の）單語である。即ち複合語の成分は二個若しくは二個以上の單語であつて、その表はす意味は成分の單語の原義とは多少でもちがつた新しい意味を表はしてゐなければならぬ。（ことに熟語に於てはこれが著しい。）

複合語は右にいへるごとく、二個若くは二個以上の單語を成分として出來上つてゐるが、出來上つた複合語はどこまでも一個の單語として扱はれるべきものであることを牢記しなければならぬ。

複合語は普通次の二種類に分けて考へてをる。

(一)疊語――品詞の如何に拘らず同じ單語を合成したもの。
(二)熟語――異つた單語を合成したもの。

實例によつて說明してみよう。

(一)疊　語

1、體言の疊語

人々　山々　品々　（名詞の疊語）
われ〳〵　誰々　どれ〳〵（代名詞の疊語）　數の多いことを示す
年々　日々　時々　（名詞の疊語）
それぞれ　（代名詞の疊語）
一々　三々五々　（數詞の疊語）　副詞となつたもの

2、動詞の疊語

いづれも情態を表はす副詞の資格を得る。

(1)連用形を重ねるもの

泣き泣き　思ひ思ひ　しみじみ

(2)終止形を重ねるもの

ますます　泣く泣く　行く行く

3、形容詞の疊語

副詞の資格を持つことは動詞の疊語と同じである。

(1)語幹を重ねるもの

ひさびさ　ひろびろ　うすうす

(2)副詞形(連用形)を重ねるもの

よくよく　とくとく

4、副詞の疊語

(1)副詞の疊語は勿論副詞で、その意味を強く表はすのである。

いといと　ゆめゆめ　げにげに

(2)たまに繰返す意を表はすことがある。(これとて「また」「なほ」の原意に繰返しの意味があると考へれば(1)と同じになる。)

またまた　なほなほ

5、感動詞の疊語

感動詞の疊語も勿論感動詞でその意を強める。

おやおや　さあさあ　あらあら

(二)熟　語

熟語の本質はさきに說明したものであるが、この熟語が構成される場合に、その成分と成分との間に成立する關係樣式が二種ある。

1、主從關係のあるもの

熟語の構成成分の單語の一つが他の構成成分たる單語を修飾してゐる場合をいふ。我國の言語では上の單語が下の單語を修飾するのが常である。即ち上從下主の關係である。

山川（山間を流れる川といふので川が主）

春霞（春立つ霞といふので霞が主）

白雪（白い雪といふので雪が主）

2、主從關係の無いもの

山田孝雄氏の「日本文法講義」では

草木（植物）　忠孝（主たる道德）　父母（親）　山水（風景）　黑白（差別）

の例をあげてこの關係を一致關係と呼んである。（三一五頁）これ等は上下いづれを主ともいづれを從とも考へる事は出來ないのであるから一致關係には相異ないが、主從關係以外の熟語が全部一致關係とは考へられない。即ち

雨降り　草刈　旅立　誠に　もとより

等の熟語は決して一致や對等關係では解けないのである。（この點吉岡郷甫著「文語口語對照語法」三一四頁——三一六頁參照）

次に熟語の種類を實例によつて說明しておかう。

1、熟語の名詞

(1)名詞——名詞　山櫻　花園　水車

(2)代名詞——名詞　我子　わ主　なに者

(3)動詞連用形——名詞　呼聲　落葉　賣物

(4)形容詞語幹——名詞　高山　青草　遠山

(5)名詞——動詞連用形　雪見　花摘　朝寢

(6)名詞——形容詞語幹　日長　夜寒　腹黑

(7)動詞連用形——動詞連用形　受取　賣買　踏はづし

(8)動詞連用形——形容詞語幹　稼ぎ高　待遠

(9)形容詞語幹——形容詞語幹　遠淺　善惡　高低

(10)形容詞語幹——動詞連用形　長鳴　嬉し泣

(11)副詞——名詞　すゞろ言　おぼろ夜

(12)副詞——動詞連用形　すゞろ歩き　うたゝ寢

以上の例はすべて二單語が一單語を構成したのであるが、三語で構成された熟語名詞もある。

山櫻花　青人草　夕月夜

鼠入らず　猫いらず　くはずぎらひ

2、熟語の代名詞

こやつ　そやつ　そのもと　わぎみ

3、熟語の動詞

(1)名詞——動詞　名付く　夢見る

(2)動詞連用形——動詞　ほころびそむ　病みほうける　組み敷く

(3)形容詞語幹——動詞　近寄る　荒立つ　長引く

4、熟語の形容詞

(1)名詞——形容詞　名高し　心細し　罪深し

(2)動詞連用形——形容詞　ありがたし　買ひ難し　蒸し暑し

(3)形容詞語幹——形容詞　薄明し　熱苦し

5、熟語の副詞

(1)名詞——助詞　誠に　もとより

(2)動詞連用形——助詞　極めて　試みに

(3)名詞——形容詞連用形　折悪しく　程なく

(4)形容詞連用形——助詞　善くも　近くに　早くも

(5)副詞——助詞　かくて　たゞに

(6)副詞——副詞　尙更

その他熟語の接續詞・熟語の助詞等を說く人もあるがそれ等に就いての論はこゝには省略する。（語の複合に就いては山田孝雄著「日本文法論」（七一一頁——七六二頁）に詳論がある。）

最後に複合語の構成される際に起る音の變化について一言して置かう。

(一)連濁

これは音聲學上からいへば、有聲音の間にはさまれた無聲子音の有聲化することである。複合語を構成する下の單語の頭の音の濁ることである。

ひとびと　すみずみ　はやばや　ちかぢか　たえだえ（疊語）

やまがは　さくらばな　心ぼそし　みぐるし　うらじろ（熟語）

(二)轉音

熟語を構成する場合に上の單語の尾音を變化せしめるのをいふ。

ふなうた　さかぶね　ひやみづ　かなづち　なはしろ　こわいろ　しら魚

(三)連濁と轉音との同時に行はれるもの

かざぐるま　あまごひ　さかぶね　むなぐるし

これ等には慣習によりて行はれるもの多く、全部に亘る共通法則といふものを抽出することはむつかしいと思ふ。

（狂言記の「舟ふな」は笑ひ話としても）

第十二章　品詞の轉成

一、品詞轉成の意義

品詞の轉成は品詞の轉換、或は品詞の轉化ともいふ。同一語であつてその屬する品詞が用法によつて一つより他に轉化することをいふのである。吉澤義則博士の「中等國文典別記」（一三四頁――一三六頁）には次の説明がある。

「議論をす」と云ふ時、「す」は佐行變格活用の動詞なり。「議論す」の「す」は意義も職掌もやゝ輕くなりたれど、なほ佐行變格活用の動詞なり。「行かす」の「す」は更に其の意義・職掌を輕め、形態も下二段活用にかはりて、こゝに助動詞となれり。「つかはす」（遣）の「す」に至りては意義も職掌も甚だしく輕められ、形態また四段活用に變じて、獨立の資格なき接尾語となり終はれり。

「はやし」（早）と云ふ形容詞は「はやく」となりて副詞に轉じ、動詞の「あれ」に連りて「はやかれ」と熟し（これは普通に形容動詞と云はれて居る）、「はやけれ」と轉じて再び形容詞（已然形）となり、更に助詞「ども」につづき、「はや」を略し、こゝに「けれども」と云ふ助詞・接續詞を生ぜり。

「しろ（白）」と云ふ名詞は「し」の接尾語をとりて「白し」と云ふ形容詞となり、「む」「く」「ぐ」「かす」「ます」などの接尾語をとりては「しろむ」「しらむ」「しらく」「しらぐ」「しらかす」「しらます」などの動詞ともなり、「しるし」（標）と云ふ名詞「しるし」（著）と云ふ形容詞も同じく此の「しろ」より出でたるものなるべし。

「はら」（原）・「はら」（腹）・「ほら」（洞）などの名詞、「はるか」（遙）・ひららか（平）・「ひろらか」（廣）・「ひろやか」（廣）などの副詞、「はる」（晴）・「ひろぐ」（廣）・「ひろがる」（廣）・「ひろむ」（弘）・「ひろまる」（弘）・「ひらく」（開）・「ひらがる」（平）・「ひらむ」（平）などの動詞、「ひろし」（廣）・「ひらたし」（扁）・「はるけし」（遙）などの形容詞はいづれも互に語原を同じうするものなるべく、「そば」（傍）・「そば」（岨）などの名詞、「そなた」（其方）・「そち」（其方）などの代名詞、「そふ」（添）・「そはる」（添）などの動詞、「さへ」と云ふ助詞、なども互に同原のものらしく、「よ」（四）・「や」（八）などの數詞と「いよ〳〵」（愈）・「いやまし」（彌增）などの副詞とは互に通ふ所あるが如し

稍々語源論に近い點もあるが、品詞轉換の微妙な有樣が適確に指摘されてゐる。以下轉成される語を品詞別に從つて擧げてみよう。

二、品詞轉成の種類

（一）轉成の名詞（第一章名詞參照）

1、動詞の連用形より轉成するもの

光　霞　蜉　帶　賴

2、動詞の終止形より轉成するもの

茂　實　勝　融　進（以上人名）　かげろふ　すまふ

3、形容詞の語幹より轉成するもの

青　黑　酢

4、形容詞の語幹に「み」「さ」「げ」の接尾語を添へるもの

高み　重さ　寒げ

5、形容詞の終止形より轉成するもの

あかし(燈)　からし(芥子)

6、形容詞の連用形より轉成するもの

遠く　近く　多く

(二)轉成の代名詞

名詞より轉成するものがある

君　僕　拙者

(三)轉成の動詞

文法家によつては

繋ぐ(綱)　擔ぐ(肩)　れうる(料理)　さうぞく(裝束)　彌次る　ひとりごつ(獨言)

等の例をあげて名詞より轉成せる動詞とする人がある。吉澤博士の引用文でも分る通り勿論これはさうにちがひないが、名詞の原形がそのまゝで動詞となつてはゐないのであるから、他の形容詞の語幹より動詞に轉成せるもの副詞より動詞に轉成せるものゝ例と共にこゝには擧げないことにする。從つてこの一項は省いてもよい。

(四)轉成の形容詞

轉成の動詞と同理由によりこれをたてないことにする。

(五)轉成の副詞

1、名詞より轉成せるもの

昔男ありけり。

明日出發致すつもりです。

2、動詞の連用形より轉成せるもの

たとひ面白くとも爲にはなるまい。

そんなことはあまり無い。

右の如き例以外に

みだりに　絶えて　覺えず　殘らず　思へば　例へば

の如く動詞の連用形に助詞若くは助動詞の連つたものをもこの例にする人があるが、これも動詞の連用形そのままだけではないのであるからこゝにはとらない。

3、形容詞の連用形より轉成せるもの

空清く澄む。

砲聲遠くひゞく。

雷はげしく鳴る。

（六）轉成の接續詞

1、名詞より轉成せるもの

無事暮し居り候間……

御尋ね致し候處……

2、動詞より轉成せるもの

書籍及び雜誌を販賣す。

3、副詞より轉成せるもの

春又秋を經たり。

第三編　文章論

第一章　文とその成分

一、文とは如何なるものか

文の定義については文法家によつてそのいひあらはし方に多少のちがひがある。今、主なるものを左に列擧して見よう。

（一）大槻文彥「廣日本文典」

言語を書に筆して、其思想の完結したるを「文」又は、「文章」といひ、未だ完結せざるを「句」といふ。

（二）草野清民「草野氏日本文法」

文又は文章と稱するものは、必二個以上の詞の集合したる者にて、意義完全なる說話の體を具へ、且其示す所の意に從つて語調の圓滿に完結せる者をいふ。

（三）三矢重松「高等日本文法」

一個の完結せる思想を表せる二個以上の語の結付を文といふ。

（四）吉岡郷甫「文語口語對照語法」

單語が結合致しまして、一つの完全な思想を表すものを文又は文章と云ひます。

（五）山田孝雄「日本文法講義」

思想が言語によりてあらはされたるものを文といふ。

文は語の集合より成れるものなるが、これをたゞ外貌より見れば、單語の集合たるに止まれり。その之を文と稱するを得る所以のものはその內面に存する思想の力たるなり。惟ふに思想とは人間の意識の活動狀態にして各種の觀念が或一點に於いて關係を有し、その一點に於いて結合せられたるものならざるべからず。而してこの統合點は唯一なるべし。意識の主點は一なればなり。この故に一の思想には一の統合作用を存す。之を統覺作用といふ。この統覺作用これ實に思想の生命なり。この統覺作用によりて統合せられたる思想の言語といふ形にてあらはされたるもの即ち文なりとす。

以上あげた定義を通覽してみるに、文といふものが成立するに就いて必要缺くべからざる二つの條件のある事を認めざるを得ないのである。卽ち

(一)單語の結合といふこと。

(二)まとまつた思想を表はしてゐるといふこと。

これである。いまこの二條件に就いて多少の吟味を加へてみようと思ふのであるが、かうした二條件必要說の由來する所は西洋の文法にあるらしい。ヘンリー・スキート Henry Sweet の New English Grammar には次の樣に述べてある。

"A sentence is a word or group of words capable of expressing a complete thought or meaning."

かく所說の由來は英文典などに基いてゐるとしても、とにかくこの二條件は文として動かし難いものたることに疑を挿む餘地は無い。

さて第一の要件たる單語の結合といふことは形式上の要件である。この形式上の要件をみたしてゐさへすれば文といつて差支ないかといふに、必ずしもさうはゆかない。一體單語の結合と言つても次の如き場合があり得る。

(一)觀念語と觀念語との結合せる場合。

花　咲く

鳥　鳴く。

(二)觀念語と形式語との結合せる場合。

咲き　ぬ。

鳴き　たり。

(三)形式語と形式語との結合せる場合。

たりけり。

のであります。

假りに右の三つの場合について考へてみるのに、(一)の場合は勿論完全な文である。尤もこの場合、觀念語に形式語がついてをつても差支はない。

花が　咲く。　花　咲きぬ。　花が　咲いた。

鳥も　鳴く。　鳥　鳴きたり。　鳥も　鳴かう。

ところが(二)の場合、(三)の場合は共に文といふことは出來ないのである。しかし單語の結合といふ條件に就いては聊かも欠ける所はないのである。だから單語の結合といつても無條件に承認するわけには行かない。(二)と(三)との中で(三)は形式語のみの集合であるから暫らく別問題として(二)について考へてみるに、これが何故に文でないか。或は言ふ人があるかも知れない。これは觀念語が一つしかないからであると。それならば試みに次の樣に言つてみよう。

咲く花。　赤い花。

鳴く鳥。　白い鳥。

これならば觀念語が立派に二つ結合してゐる。しかしこれも決して文とはいはれない。それは何故であるか。つまり

この間に第二の要件が答へてくれるのである。即ちそれ等の單語の結合はまとまつた思想を表はしてゐないからである。咲く花がどうしたのか、鳴く鳥がどうしたのか、何が咲いたのか、何が鳴いたのかちつとも分らない。だから思想としてはまとまつてゐないのである。だから第一條件の單語の結合形式といふものは、常に第二の條件たるまとまつた思想といふものと相應じて定められてゆくのである。

又逆にかういふことも考へられる。まとまつた思想といふものは常に一定の單語の結合形式によつてのみ發表せられるものであらうか。たとへば

そら、進め。

あゝ、びつくりした。」

とか、もつと極端になると、

こらつ、

あら、

などでも、これを發した時の事情によつては、一種のまとまつた思想が表はされてゐるのかも知れない。sentence word とか sentence equivalent とか言はれる所以のものは、そこに何かのまとまつた思想に近いものが含まれて表はされてゐるからであらう。しかし今日の文法上、これ等は決して文ではない。故に文といふものは上述の二條件が一致して叶へられてゐなければならないのである。文法は形式上の學問であるからといつて、形式さへ整つてゐればよいといふ譯ではない。その形式は內容を表現する意味に於ての形式である。本講義の最初にも述べたやうに、文法はその形式と內容との相關々係を研究する學問である。更に言ふならば、形式と內容との相關々係を形式的に研究するものなのである。

こゝに文章論といふのは、さきに品詞論のところで研究して來た各品詞に屬する個々の單語が、文章の成分となつて文章を構成するのであるが、その成分が文章中に於て如何なる形式的法則によつて支配されるかといふことを研究するのである。單なる品詞としての單語が文章中如何なる務を果してをるか、或は文章中に於ける品詞としての單語が單語として如何なる相互關係にあるかといふ如きことを論ずるのが文章論の本旨ではない。その品詞としての單語が文章の成分として如何なる務を持つてをるか、文章の成分としてその成分相互に如何なる關係があるかといふ事を研究するのである。つまり言語によつてあるまとまつた思想を表はす場合に、單語が如何なる狀態をとるかといふ事なのであつて、その背後に文章といふ立場を絕えず持して研究する必要があるのである。一例をとつていへば、こゝに陸軍少佐某といふ人があるとする、この人は家庭に於ては一個の家長であり、又子供に對しては父であり、妻に對しては夫である。又その位階勳等をいへば何位何等である。又謠曲を好み圍碁に長じた趣味の人であるかも知れぬ。さうした個人的の特性といふものを考へる事に對して、更にこの人のもつ公人的方面の職務からこの人を考へる事も出來る。即ち聯隊に於ては、某大隊長であるとする、軍人としての公職の立場から大隊長は特殊の務を有する筈である。この特殊の務は軍人としての公職といふものを立場にしてはじめて理解される筈である。如何に個人的の特性を深く研究してもこの公職中のある位置といふものは完全には分らない。この關係が品詞論と文章論との關係である。文章としての成分といふ立場を忘れる時、品詞論と文章論とは混亂を來すのである。この混亂は十分避けなければならない。

文法家によつてはこの文章論を句論といふ名稱で呼ぶ人がある。山田孝雄氏はそれである。注意のために「日本文法講義」によつて簡單に説明しておかう。（文章論全體のシステムを亂すかも知れないが）

氏の言ふ句といふのは普通の文章論で説かれる句とはその趣を異にし、「文法學上文の基礎たる單體を句と稱す。」といふのである。而して句を定義して

一の句とは主語と述語との結び付けの一回なるものをいふ。（一の句とは一の統覺作用によりて組織せられたる言語の發表をいふ。）

としてある。（まだ主語・述語の如何なるものであるかは説明してゐないのであるが便宜この語が使つてあるから引用する。）

花紅なり。
月清し。
小兒犬と戯る。

が實例としてあげてある。これは普通の文法の所謂單文と稱するものであるが、氏の所謂句の中には、普通の單文以外のものも含めてあるから注意しなければならない。即ち主語・述語の關係を以て組織されぬ句もあるといふのである。而してその句は性質と構造とによりて二つに大別して次の樣にしてある。

（一）喚體の句

これは主語述語の區別がなくて完全に思想を發表したもので、呼格を中心として構成せられ、形式上は一の體言を對象として之に連體格又は特別の助詞を加へたものである。これに二種ある。

1、希望をあらはす喚體の句

これはその對象たる體言と希望の終助詞「が」「かな」との存在を必要條件としたもの

花もがな。（體言＋終助詞）
老いず死なずの藥もが。（連體語＋體言＋終助詞）

2、感動をあらはす喚體の句

その對象たる體言とそれに對する連體格の語との存在を成立の必要條件としたもの

あつぱれの武者ぶりかな。（連體語＋體言＋體言）
もれいづる月の影のさやけさ。（連體語＋體言）

（二）述體の句

これは主語と述語との對立してゐるもので普通の文法でいふ文である。これを更に説明體の句、命令體の句、疑問體の句と分けてある。

松竹よく榮ゆ。（説明體の句）
春は遂に來らざるか。（疑問體の句）
人々これを誤ることなかれ。（命令體の句）

この論と本論に於ける見方との相違は、以下本論の進むに從つて漸次分明になると思ふから、こゝでは文章論に代

る句論といふ名稱のあることを指摘して、注意を促すまでに止めておく。

二、文の成分

文の構成に用ひられてをる單語を文の要素としての職分から考へてそれぞれに名稱を與へてをるのである。それがこゝにいふ文の成分の名稱である。その成分の一々が如何なる文法的性質を持つてゐるかは後に詳しく論ずるとして、こゝでは唯その名稱だけを先づ列擧することにする。

(一)主語
(二)述語
(三)客語
(四)補語
(五)修飾語
(六)獨立語
(七)接續語

以上の名稱は普通の文法に於て說かれてゐるものであつて、本論に於てはこれ等の中いづれを如何に採用するかに就いては章を追つて論ずるつもりである。

なほ普通の文法に於ては右の成分の大部分を次の樣に分類してゐるのが多い。

- 文の成分
  - 主要成分
    - 主語
    - 述語
  - 補充成分
    - 補語
    - 客語
  - 修飾成分
    - 形容詞的修飾語
    - 副詞的修飾語

この分類をよく考へてみると「主要成分」「補充成分」「修飾成分」の間に分類の標準が一定してゐないことが認められるやうに思ふ。成分を主要なるものと、主要でない補充的なものとに分けたのは同一標準に基いたものであるが、これに並べて修飾成分を置いたのは標準の混淆である。すなはち修飾成分といふのは文章論上の立場から言つたものであつて、他の主要補充といふ考とは異つた文法的の名稱である。之に反して主要とか補充とかいふのは文章論上の區別には全く無關係な名稱である。換言すれば、主要とか補充とかいふのは價値觀念の入つた考へから名付けられたもので、修飾といふ職能上の事實に基礎をおいた名稱とは並べて論ずることの出來ないものである。文法は決して價値を論ずる學問ではない。言語が行はれてゐる上に於ての事實を法則的に研究するのである。

更にこの主要成分・補充成分といふのはどういふ意味であるか。これも極めて誤解を起しやすい名稱である。これを外觀的に考へれば、文としては主要成分さへあれば十分で、補充成分はなくてすむといふ風に考へられる。しかも論者は文の構成に欠くべからざる成分が主要成分であるが、文によつては更に必要な成分が補充成分であると說く

のである。それならば、論者の所謂主要成分と補充成分とで出來た文章を觀察してみる時、其處にどの成分が主要でどの成分が補充的であるかといふ樣な區別をたてることが出來ようか。必要の程度に甲乙はない筈である、輕重はない筈である。然し假りに一歩を讓つて、主要とか補充とかいふ意味を次の樣に考へてみるとする。

文を最も簡單なる形に縮めても、それを文として存立せしめるためにはどうしても省略することの出來ないもの、いひかへれば、それを取り去つてしまふと完結せる思想を成立せしめることの出來ないといふ成分が主要成分であり、之に反して思想を破壞しない程度に於てならば取り去つても差支ないものが補充成分である。換言すれば主要成分は如何なる文にも必要で欠くべからざるものであるが、補充成分はなくても差支のない文があり得る。かう論ずるのならばそれは勿論正しい。しかしその場合注意を要するのは無くても差支のないといふ意味である。

雨降る。

兒童犬を打つ。

右の二例を見るに、これはその場合に應じていづれも必要なる成分をとつてゐるので、前例が必要成分から出來てゐるといふならば、後例も同じく必要成分から出來てゐる筈である。必要の程度に上下はない。文法は決して論理學ではない。論理學の命題としては、すべて

A is B. (S—P)

の形で表はされるかも知れないが、文章はその個々の場合に應じて具足すべきものは具足すべき事實を持つてをるのである。「雨降る」といふのはたま〳〵主語と述語でのみ出來てをるのであつて、それで十分だつたまでのことである。而してそれが文章一般として考へてみて、これ以上成分を除けば文として成立し難いといふ成分のみで出來てゐたといふまでの事である。

なほ補助成分の中に修飾語を加へる人もあるが、これも誤解をしないやうにする必要がある。修飾語の必要な文としては修飾語は他の成分の補助をしてゐるのではない。

雨降る。

で十分の場合もあれば

秋の小雨小止みなく降る。

といはなければ十分でない場合もある。後の例に於ては修飾語と主語や述語との間に何等輕重の差はない筈で、さういはなければならぬ場合にはさういふことが必要なのである。文法は形式を扱ふといつても、生きてゐる言語としての、形態的法則を論ずるので、生きてゐるものから死んだものを抽象することではない。

又文の成分を要素(主語・述語・客語・補語)と非要素(修飾語)とに分ける人もあるが、その分類名稱の誤解を招き易いことは上述の點から類推が出來よう。かういふ名稱はなるべく用ひないがいゝと思ふ。

第二章　文の成分としての主語

一、主語とは如何なるものか

主語の定義に就いても文法家によつて多少異なるものがある。それは大體次の四つに要約出來るであらう。

(一)思想成立の順序より見たるもの

人の思想の上に先づ主として浮ぶ事物を表はす語をいふ。大槻文彦「廣日本文典」はこの說である。その先づ主として浮ぶ事物の次に、之に伴ふものは其の事物の動作・作用・形狀・性質等である。而してその動作・作用・形狀・性質などの主になる語であるから主語といふのであるとの說である。

(二)述語より見たるもの

述語の主となるものを主語といふのである。又叙述の題目(主題ともいふ)となるものを言ふとか、說述の主體となるものをいふとかいふのも皆これである。述語とか叙述とか說述とかは嚴密にいつて、主語とは別に存在するものではなく、主語を對象としていへることであるから、それを以て主語の定義を下すのはいかゞと思はれる。

(三)文全體より見たるもの

文の題目となるものを主語といふ。この說は簡單であるが妥當であるやうに思はれる。文の定義は既に說明したやうに主語や述語といふものを借りなくても立派に下せるのであるからこれに從へばよいと思ふ。

(四)論理的見地より見たるもの

一つの連語は觀念を表はすことは出來るが思想を表はすことは出來ない。思想は二つの觀念を結びつけた或る斷定でなければならない。論理學的にいふと

甲は乙なり。

甲は乙にあらず。

のいづれかである。この形を國語では單に二つの觀念語のみでいひ表はすことが出來るのである。

花の性質は美なり。

といふべきを

花は美し。

といふことが出來るのである。この時思想の題目となるものを主語といふのである。佐々政一博士はかういふ風に論じてをられたと思ふ。この論に誤はないがあまりに論理的に傾きすぎた說と思ふ。こゝでは前說に贊成して置き度い。主語は英文法の Subject に當る。

二、主語の構成

如何なるものが主語として使はれるかといふことを調べてみると次の通りである。

(一)體　言

花　咲く。(名詞)

彼死す。(代名詞)

(二)體言に助詞をつけたるもの

鳥は　歌ふ。(名詞＋助詞は)　　雨も降る。風さへも吹く。

君は　行くか。(代名詞＋助詞は)

花が　散る。（名詞＋助詞が）

鶯の　鳴く。（名詞＋助詞の）

山田孝雄氏は「日本文法講義」（二〇六頁）で「鶯の鳴く」の「鶯の」を單文の主語として肯定して居られるが、句論の條では次の如き「の」は連體語を示すものであるとしてをられる。（「が」も同樣）

もれいづる月の影のさやけさ。

毛を吹き疵をいふがわりなさ。

即ち「の」及び「が」の上の語が下の「さやけさ」及び「わりなさ」を修飾してゐるので全體は先に述べた喚體の句だといふのである。さうなれば主語は「さやけさ」「わりなさ」といふ事になる。これは我々普通の考では「の」及び「が」の上にあるものを主語と見たいのであつて、嘗つては「の」が係詞で、結は連體形ですると考へられたこともあるのに徵して、「さやけさ」「わりなさ」といふ體言の形をとつたので、これが主語とは思はれないのである。とにかく一考の餘地はあると思ふ。

（三）準體言

起くるも　懶し。

遠きも　來り會す。

泣いたのは　彼だ。

戰鬪に勝ちたるは　我軍なり。

風の吹く夜は　淋し。

「とも」は　接續助詞なり。

これ等はいづれも體言に準じて主語に用ひられたものである。これに類するもので注意すべきは次の如き場合である。

花の咲くこと　速し。

余の求むるところは　物質にあらず。

親の恩に比すべきものは　師の恩なり。

この例にて「こと」「ところ」「もの」は體言であるから形式上はこれが主語でなければならない。けれどもこの「こと」「ところ」「もの」といふ樣なその語自身としては一定の觀念を持つてをらない體言をこゝに使つたのは、上の語に體言の資格を與へんがためであつて、內容上の主語は勿論上の語にあるのであるから、上下を一緒に合せて主語とみてよからうと思ふ。この點は吉岡氏の「文語口語對照語法」（三三〇頁——三三一頁）の說に贊成したい。吉岡氏も言つてをられるやうに、若しこの「こと」「ところ」「もの」が一定の概念を持つたならば、勿論上の部分は形容詞的修飾語になるのであるが、形式的に用ひられて、上部に體言の資格を與へるにすぎないものであるから、併せて主語と見た方がよいと思ふ。なほ次の三例と前の三例とを比べ合せてみればこの事は明瞭にならう。

物は粗末にすべからず。

所變れば品變る。

事念なり。

三、主語の併置

主語に限らず文の成分はよく併置されることがある。主語の併置がどういふ理由から起るかといふに、文が二つ若しくは二つ以上あつて、その各々が同一の述語を持つてゐるといふときに、これを一つの文にしたいと思へば勢ひ同一の述語をならべなければならない。尤もその中の最後に來ないものは中止法を使つて多少述語の形に變化は表はれるけれどもやはり重複は重複である。この場合その述語を一つにしてその重複を避けるために、もとの各文の主語を併置するのである。

父歸る。
兄歸る。→父歸り、兄歸る。→父・兄歸る。

月清し。
空清し。→月清く。空清し。→月・空清し。

以下二三の例をあげてみよう。

春風・春水一時に來る。
英國も米國も參加した。
行くも、歸るも皆知らず。
白いのも、赤いのも咲いた。
「き」と　「けり」とは過去の助動詞である。

以上の例はみな主語の併置された場合であるが、次の例の如きはさうでない。

朝日新聞と毎日新聞とは日本の二大新聞なり。
英・米・佛・伊・日は世界の五大強國なり。

何故といふに、右の例を分けてもとの文にしたと假定するに、

朝日新聞は日本の二大新聞なり。
英は世界の五大強國なり。

とは言はれない。「朝日新聞」は日本の二大新聞の一ではあるが、「日本の二大新聞」ではない。

英國も參加した。
米國も參加した。→英國も、米國も參加した。

とは趣の異なる所があることに氣がつくであらう。從つてかういふ場合は「朝日新聞と毎日新聞とは」「英・米・佛・伊・日は」を一つの主語と見るのである。

第三章　文の成分としての述語

一、述語とは如何なるものか

述語は或は說明語ともいはれる。その定義に就いては、「廣日本文典」には、主語の動作・作用・形狀・性質等を說明する語であるから說明語と稱すと說いてある。しかし、動作・作用・形狀・性質等と限定して說かないでもつと漠然と說明した方が却つて妥當だらうと思はれる。何故ならば必ずもしさうしたものに關する說明ばかりが述語ではないからである。場合によつては疑問も命令も感歎もあらはすのである。文章論に於ては單語の示す一々の意味を本にして定義を下すやうなことは避けて、文章といふものに共通する職能をもとにして考へた方がよいと思ふ。そこで普通は文の題目(主題)に就いて叙述(說述)を表す語を述語といふ。

といつてゐる。これでよいと思ふ。中等學校用の文法教科書などに

(一)何が　どうする。　犬　走る。　鳥　飛ぶ。　(動詞の述語となる場合)

(二)何が　どんなだ。　山　高し。　水　清し。　(形容詞又は助動詞「如し」を持つ語の述語となる場合)

(三)何が　何だ。　正成は　忠臣なり。　犬は　動物だ。　(助動詞「なり」「たり」を持つ語の述語となる場合)

の形式を示し、この「何が」に當るものが主語で、「どうする」「どんなだ」「何だ」に當るものを述語といふ、と說明してあるのがある。これは分り易い語で型を示したものにすぎない。述語は英文法の predicate に當る。

二、述語の構成

(一)用言

鳥　鳴く。(動詞)

風　凉し。(形容詞)

花　美麗なり。(形容動詞)

(二)用言に助動詞若くは助詞のついたもの

私は　行かない。(動詞＋助動詞)

この花は　美しいね。(形容詞＋助詞)

京洛の山水　秀麗ならずや。(形容動詞＋助動詞＋助詞)

(三)體言(又は準體言)及び用言に助動詞(なり、たり、如し)若くは助詞のついたもの(口語では「なり」「たり」「如し」の代りに「だ」「である」「やうだ」を用ふ)

正成は　忠臣なり。(體言＋助動詞なり)　　正成は　忠臣だ。

父　父たり。(體言＋助動詞たり)　　父は　父である。

落花　雪の如し。(體言＋助詞の＋助動詞如し)　　落花が　雪のやうだ。

汝は　誰ぞ。(體言＋助詞ぞ)　　お前は　誰だ。

濱名湖は　湖か。(體言＋助詞か)　　濱名湖は　湖か。

鐘の　鳴るなり。(用言＋助動詞なり)　　鐘が　鳴るのだ。

山の　高きなり。(用言＋助動詞なり)　　山が　高いんです。

歳月は　流るゝ(が)如し。(用言＋助動詞如し)　　歳月は　流れるやうだ。

君は　歸るか。(用言＋助詞か)　　君は　歸るか。

この(三)の場合には問題がある。文法家によつては、體言と體言の下についてゐる指定の助動詞及び比況の助動詞とを離してしまつて下の助動詞だけを述語とする人があるのである。助詞のついてゐる場合は同じく助詞だけを述語とするのである。(松尾捨次郎氏、山田孝雄氏、芳賀矢一氏、春日政治氏等はこの說だと思ふ。)

正成は　忠臣　なり。

父　父　たり。

落花　雪の　如し。

汝は　誰　ぞ。

山田孝雄氏の「日本文法講義」によれば、「なり」「たり」「如し」はいづれも用言(形式用言)であつて、動詞の「す」と共に實位觀念が缺乏してゐる用言であると論じてある。從つてかゝる用言はその實位觀念を補充すべき語をその上に置かなければならない。即ち右の例の「忠臣」「父」「雪」はいづれもこの實位觀念を補充する實語だといふのである。「汝は誰ぞ」は文勢の急迫したために形式用言を省略したもので、あたりまへならば「汝は誰なるぞ」といふべきであると論ずるのである。(「す」の實語は例へば「音す。」「くみす」「罪す」等の「音」「くみ」「罪」である。)而して、山田氏は

すべて形式用言とその實格の語とは相合して一の用言と見做して取扱ふべきなり。(同書三四五頁)

と論じてをられる。してみると形式用言だけで以て述語とするの非であることが暗に認められてゐる譯だと考へられる。本講では、どこまでも「なり」「たり」「如し」は助動詞(形式語)であつて觀念語ではないと思ふので、これだけで述語とするやうな說はとらない。(「忠臣」「父」「雪」について實語說をとらぬ人は補語說をとつてゐる)

なほ、口語の完了の助動詞「てある」「てゐる」「てをる」、口語の「である」に就いてもこれから「て」及び「で」を切り離して二分して考へるこういふ樣な說もないではないが、これ等は品詞論ですべて一語の動助詞として說いたのであるから、文章論に於ても、その上の語と合せて述語とするのである。

机の上に　本が　置いてある。

花が　咲いてゐる。

月が　出てをる。

これは　本である。

「て」及び「で」と下の語との間に助詞(「は」、「も」、「さへ」の樣な語)が入つた場合でも一つとして述語とする。

三、述語の併置

これは前に述べた主語の併置に準じて考へれば分ることである。即ち、二つ若くは二つ以上の文に於て主語を同じくする場合、これを一つの文にする時起る現象で、主語の重複を避けて一つにして、述語だけ二つ若くは二つ以上併置しておくのである。

正行は忠臣なり。
正行は孝子なり。
↓正行は忠臣にして、正行は孝子なり。↓正行は忠臣にして、孝子なり。

敵兵　雲の如し。
敵兵　霞の如し。
↓敵兵雲の如く、敵兵霞の如し。↓敵兵雲の如く、霞の如し。

主語の併置の場合に注意した事は述語の併置の場合にもあてはまる。即ち

日本の二大新聞は朝日新聞と毎日新聞となり。

世界の三大強國は英國と米國と日本となり。

は、述語として體言を二つ若くは三つ持つてゐるけれども、これは決して述語が並置されてゐるのではなく、全體として一つの述語を構成してゐることは、主語の場合を逆にして考へてみればすぐ分ることである。即ち文の題目に就いての叙述は、全體が一つになつて始めて完全に果されるのであつて、その叙述を分割したのでは完全な述語の職分を果すことが出來ないのである。

第四章　文の成分としての客語及び補語

一、動詞の自他と客語・補語

「自動詞と他動詞とは明瞭に區別される部分と、相近づいて劃然區別されない部分とあることは、恰も動物と植物との區別のやうなものがある。それ故、或人は文法で動詞の自他を說かない方がよいと唱へる。それも一應尤もな次第ではあるが、苟も文章論に於て客語（目的を表す）を說く以上は、是非一度は是の問題に觸れなくてはならない。文章論で客語を說くならば、品詞論に動詞の自他を說くといふことは强ち不合理ではない。動詞に自他を說くことが不可能のものならば、文章論に客語を說くことが同じく不可能になる。若し動詞に自他を說くことが不可能だといつて置いて、文章論で客語のことを說いたとすると、それこそ大きな自己矛盾をしたものといはなければならない。」（新體中等國文法教授資料七九頁）

とは春日政治氏の言であるが、これはまづ文章論に於て客語・補語の問題に入るに先だつて注意しておかなければならないことである。そればかりでなく、動詞に於ける自他の區分を基本にしてそれが文章論に於て如何に扱はれてゐるかを考察することは、最も便宜な方法であると思ふ。（この考察方法に就いては先輩山口義應氏の示唆に負ふ所が多い。）

二、動詞の自他區分說と客語・補語

こゝでは品詞論に於て動詞を性質上自動詞・他動詞に區分するものが、文章論に於て如何なるものを客語といひ、又如何なるものを補語といふかを調べてみることにする。

(一) 自動詞の標準になる語
　　他動詞の目的及び標準となる語　これを合せて客語とする說。

大槻文彥氏「廣日本文典」には次の如く書いてある。

說明語の「有對自動詞」又は「單對他動詞」「複對他動詞」なるときは、各々其標準の語、又は、目的の語を要す。其標準又は目的の語を客語といふ。(「有對自動詞」といふのは自動詞であつてその動作の係るべき標準がなければ意を全うしないもの、例へば「鏡は壁に懸る」「顏は前へ向ふ」の「懸る」「向ふ」等で標準には「に」「と」「へ」「より」「から」「まで」等の助詞が必要である。「單對他動詞」といふのは、他動詞であつて目的語以外に其動作の係るべき標準を要しないもの、例へば「蠶は糸を吐く」「蜂は蜜を釀す」の「吐く」「釀す」の如きがそれである。「複對他動詞」といふのは、他動詞であつて目的語以外に其動作の係るべき標準を要するもの、例へば「朱を藍に雜ふ」「水を湯となす」の「雜ふ」「なす」の如きがこれである。目的には「を」の助詞が必要である。)(六五頁—六八頁、二五三頁—二五四頁)

主語　客語　說明語
水は　低きに　就く。(有對自動詞の標準)
主語　客語　說明語
火は　物を　乾かす。(單對他動詞の目的)
主語　客語　說明語
風は　波を　岸に　寄す。(複對他動詞の目的及び標準)

なほ「廣日本文典」には同じ客語の條下に次の如く述べてある。前章の主語と考へ合せて注意を要すべき點である。

左の如きは二つの名詞共に主語なれど、下なるを姑く客語とも見、或は「なり」「たり」と合はせて說明語とも見る。

主語　客語　說明語
水は　流動物　なり。
主語　客語　說明語
正成は　忠臣　なり。
主語　說明語
鈴屋の翁は　宣長なり。
主語　說明語　主語　說明語
君、君たり。臣、臣たり。

本講にては「流動物なり」「忠臣なり」「宣長なり」「君たり」「臣たり」を述語(說明語)と見ることは既に述べた通りである。右の例に於ける「なり」「たり」と合せて說明語とみる「廣日本文典」の說には、「廣日本文典」自らが說く述語の說と一致する點があるが、「流動物」「忠臣」を姑く客語と見るとか、更にそれ等が上の「水は」「正成は」と共に主語であるとかいふ說は、「廣日本文典」自らの說く客語及び主語の定義と一致しない短見であると思ふ。

春日政治氏の「新體中等國文法」もこれと同說であつて、「文は叙述の性質によつて、其の目的・標準をあらはす語を要する。この目的・標準をあらはす語を客語といふ。」といふのである。但し、氏の

目的は　動作の直接めざせるそのその。
標準は　動作の間接めやすとするもの。

といふことになつてゐて、「めあて」とは言つてない。而して、氏は客語の中で標準を表はすもの(所謂補語)を次の

（傍線を施せる語）如くに定めてをられる。（「新體中等國文法教授資料」一四六頁―一四八頁）

（一）、不完全自動詞及び不完全他動詞を述語とする時。

人　馬に　乘る。

秀吉が　關白と　なる。

家　貧しく　なる。

艱難　汝を　玉に　す。

彼は　家を　廣く　す。

母が　乳を　兒に　與へる。

（二）、指定・比說の助動詞若しくは助詞を述語とする時。

犬は　動物　なり。

櫻は　日本の國花　だ。

落花　雪の　如し。

日月は　流るゝが　如し。

月日は　矢の　やうだ。

心は　水の澄んでゐる　やうだ。

汝は　誰　ぞ。（なるぞ）

私は　女子　よ。（だよ）

（三）、動詞の受身形を述語とする時。

子守　兒に　泣かる。

太郎が　父に　叱られる。

田舍者　掏摸に　巾著を　すらる。

下女が　主人に　水を　汲ませられる。

（四）、動詞の使役形を述語とする時。

母　子に　眠らす。

大將が　兵卒に　戰はせた。

賴朝　義經をして　平家を　伐たしむ。

教師が　生徒に　素讀をさせた。

（五）、異同・比較等の形容詞を述語とする時。

甲は　乙に　同じ。

三角形の內角の私は　二直角に　等しい。

彼は　世事に　疎し。

猿は　人間に　近い。

櫻は　梅よりも　紅い。

(二)、客語に第一客語第二客語を設け、更に補語を設ける說。

芳賀矢一氏「中等教科明治文典」の說を擧げて之を同書に基いて說明してみよう。

1、客　語

(1)、他動詞の目的を表はす語を客語といふ。

これは前述の(一)及び(二)の說と變りはない。

(2)、他動詞には二つの客語を要するものがある。

主語　客語　述語
旅人　路を　問ふ。

主語　客語　述語
父　褒美を　與ふ。

右の二例に於て「問ふ」「與ふ」の動作は、問はれる人、與へられる人がなければ成立しない。即ちかくの如き動作は動作者(主語)と動作の目的物(客語)との外に動作を仕向けられる人があつて、始めて成立するのである。すなはち

主語　客語　述語
旅人　里人に　路を　問ふ。

主語　客語　述語
父　子に　褒美を　與ふ。

の如く「里人」「子」を加へて動作の關係が始めて明瞭となるのである。この場合、「路を」「褒美を」を第一客語といひ、「里人に」「子に」を第二客語といふ。

(3)、主語と客語の轉換といふことがある。

(イ)、自動詞から受身の作られる場合には、動作を蒙るものが新に加はり來つて、主語となりこれまでの主語が客語となる。

主語　述語
母　死ぬ。

右の例にて「母」は「死ぬ」といふ述語(自動詞)の主語で、動作者である。これが

主語　客語　述語
子、母に　死なる。

の如く自動詞からの受身の形に作られると、「子」即ち動作を蒙るものが「死なる」に對して主語となり、これまでの主語即ち動作者「母」は「に」の助詞をとつて第二客語の如き形をなす。

(ロ)、他動詞から受身の作られる場合には客語主語が相轉換する。

主語　客語　述語
太郎　蟬を　捕ふ。

右の例で「太郎」は「捕ふ」といふ述語(他動詞)の主語で、動作者である。これが、

主語　客語　述語
蟬　太郎に　捕へらる。

といふ如く、他動詞からの受身と作りかへられると、これまでの客語である「蟬」は「捕へらる」の主語となり、これまでの主語即ち動作者「太郎」は「に」の助詞をとつて第二客語の如き形をなす。

(ハ)、一つの客語が主語に變じた時には、他の客語は本のまゝである。

主語　第二客語　第一客語　述語
父　子に　財産を　讓る。

右の例は第一・第二の二つの客語を要する他動詞「譲る」を述語としてゐる文であるが、これから受身を作る時には、次の如き二樣の受身が出來る。

主語　述語
子　父より　財産を　譲らる。
主語　述語
財産　父より　子に　譲らる。

一はこれまでの第一客語「財産」が主語となり、一はこれまでの第二客語「子」が主語となる。

(ニ)、自動詞又は他動詞から使役の動詞を作るときには、動作の命令者が新に入つて來て主語となり、これ迄の主語は客語となる。

主語　述語
敵軍　退く。
主語　客語　述語
下女　餅を　燒く。

の例で、「退く」は自動詞で、「燒く」は他動詞でともに述語である。「敵軍」「下女」は動作者でともに主語である。今之を使役の形に改めて次の樣にする。

客語　述語
敵軍に　退かしむ。
第二客語　客語　述語
下女に　餅を　燒かしむ。

かくするときは、「敵軍」を退く樣に仕向けたもの、「餅」を燒かしめたものが主語とならなければならない。

卽ち

主語　客語　述語
我が軍の攻撃は　敵軍に　退かしむ。

主語　第二客語　客語　述語
主婦は　下女に　餅を　燒かしむ。

の如くならなければならない。かうなれば、これまでの動作者「敵軍」及び「下女」はともに客語となるのである。而して、この使役の形に改める時

客語　述語
敵軍をして　退かしむ。
第二客語　客語　述語
下女をして　餅を　燒かしむ。

ともいへるから、これまでの主語は「に」又は「をして」をとつて第一客語若くは第二客語の形をするといふことが出來るのである。

(ホ)、前項(ニ)の場合に於て生じた使役を更に受身にかへると、動動作者が再び主語となり、命令者は客語となり、「に」の助詞をとつて第二客語の形をなす。

主語　客語　述語
我軍　敵に　退かしむ。
主語　第二述語　客語　述語
主婦　下女に　餅を　燒かしむ。

を受身とすると次の如くなる。

主語　客語　述語
敵軍　我軍に　退かしめらる。
主語　第二客語　客語　述語
下女　主婦に　餅を　燒かしめらる。

2、補語

(1)、自動詞の補語

主語　述語
造營　成る。

右の「成る」は自動詞であつて、「造營」の主語に對して述語となり、主語と述語だけで動作が成立して居る。

ところが次の例

雀　なる。

湯　なる。

だけでは何になるのか明瞭でない。

雀　蛤と　なる。

湯　水と　なる。

と言つて始めて明瞭である。この場合の「蛤と」「水と」の如く用ゐられた語を補語といふのである。

(2)、他動詞の補語

主語　客語　述語
偉人は　大業を　成す。

主語　客語　述語
天皇　憲法を　定む。

の例に於ける「成す」「定む」は他動詞で述語になつてゐるもので、これ等の文は主語、述語、客語だけで意味が完全してゐるが、

客語　述語
氷を　なす。

客語　述語
華盛頓を　定む。

だけでは、何になしたのか、何と定めたのか明白でない。

氷を　水と　なす。

華盛頓を　大統領と　定む。

といつて始めて意味が明瞭になる。この場合の「水に」「大統領と」を補語といふのである。故に自動詞にも他動詞にも補語を取るものがあるのである。

(3)、補語は「と」或は「に」の助詞を伴ふ。

しかし次の例

余は　六時に　起きたり。

今日　東京に　着す。

は、「に」の助詞を伴つてゐるけれども、時間或は場所をあらはすもので、副詞の功用をなしてゐるのである。これは補語ではない、又もとより客語でもない。又、

秋草　爛漫と　咲く。

櫻花は　奇麗に　咲きたり。

は「と」「に」の助詞を伴つてゐるが、これは形容動詞であつて補語ではない、又もとより客語でもない。又

趣味　自然に　生ず。

光秀　驀然として　立つ。

の例に於ける「自然に」「厳然と」は副詞であつて、補語ではない。又もとより客語でもない。（この項に於ける芳賀博士の説には十分の考慮を拂ふ必要があると思ふ。即ち、補語と副詞的修飾語との區別に就いての考察が必要となるのである。これは後に觸れるからこゝには言はない。）

「明治文典」卷之三、叙述の種類の條下では、形容詞・形容動詞も補語として用ゐられる場合があると論じて次の例があげてある。

主語 補語 述語
天　くらく　なる。

主語 補語 述語
風俗　野鄙に　なる。

主語 補語 述語
其徳を　二三に　す。

（これと前述の補語でないものとの區別は何處にあるか、これ又議論があらう）。

(4)、客語と補語との區別

客語も補語と同じく「に」の助詞を伴ふことがあるから紛れない樣にする必要がある。その區別點は、「客語は前述の如く主語の轉換によつて主語となることが出來るけれども、補語は決して主語となることが出來ない」といふ點にあるのである。

主語 客語 述語
太郎　蟬を　捕ふ。↓ 蟬 主語 客語 太郎に 捕へらる。 述語

といふことは出來るが、

主語 補語 述語
雀　蛤と　なる。↓ 蛤 主語 雀と　なさる。

ではいひ難いから、客語と補語とは區別が出來るといふ芳賀博士の説である。

3、叙述の種類

客語と補語に關する芳賀博士の「明治文典」に於ける説をみた次には、之に關連して同書に説かれてゐる叙述の種類といふ條を參考のために一瞥する必要がある。

(1)、動詞の述語となつてゐる場合

（イ）、主語・述語だけで叙述の意味の完全なるもの。

主語 述語
月　出づ。

主語 述語
馬　躍る。

（ロ）、主語・補語・述語にて叙述の意味の完全なるもの。

主語 補語 述語
勉勵　衆に　超ゆ。

主語 補語 述語
氷　水と　なる。

（ハ）、主語・一客語・述語にて叙述の意味の完全なるもの。

主語 客語 述語
老母　子に　先たる。（自動詞の受身の相）

主語 客語 述語
實朝　公曉に　殺さる。（他動詞の受身の相）

主語 客語 述語
義經　平氏を　討つ。（他動詞の通常の相）

主語　客語　述語
我軍　敵をして　退却せしむ。（自動詞の使役の相）
主語　客語　述語
敵　我軍に　退却せしめらる。（自動詞の使役の受身の相）

（ニ）、主語・二客語・述語にて叙述の意味の完全なるもの。

主語　第二客語　第一客語　述語
教師　生徒に　文法を　授く。（他動詞の通常の相）
主語　第二客語　第一客語　述語
頼朝　義經をして　平氏を　討たしむ。（他動詞の使役の相）
主語　第二客語　第一客語　述語
義經　頼朝より　平氏を　討たしめらる。（他動詞の使役の受身の相）

（ホ）、主語・客語・補語・述語にて叙述の意味の完全なるもの。

主語　客語　補語　述語
米人　華盛頓を　大統領と　定む。（他動詞の通常の相）

(2)、形容詞・形容動詞の述語となつてゐる場合。

（イ）、主語・述語にて叙述の意味の完全なるもの。

主語　述語
花　美し。
主語　述語
月　明かなり。

（ロ）、主語・補語・述語にて叙述の意味の完全なるもの。

主語　補語　述語
六は　三より　多し。
主語　補語　述語
苛政は　虎よりも　猛なり。

(3)、助動詞「如し」の述語となるときは必ず、主語・述語の外に補語がなければならない。

主語　補語　述語
月色　銀の　如し。
主語　補語　述語
容貌　愚なるが　如し。

(4)、助動詞「なり」「たり」及び助詞の述語となる場合。

主語　補語　述語
正成は　忠臣　なり。
主語　補語　述語
東京は　大都會　たり。
主語　補語　述語
これは　何　ぞ。
主語　補語　述語
鯨は　魚　か。

右の例に於ける「たり」「たり」「ぞ」「か」は文法上述語であるけれども、叙述の要部はむしろその體言に在りといふべきであらう。その體言は亦之を補語と見做すのである。

(三)、岡田正美氏「新式日本文典」の說

文の意義の完備しないものを補ひ足して意義を完全にするものを補足部といふ。

- 對部　生物なるもの
- 補部　無生物なるもの
- 客部　その他「と」の辭を伴ふもの

右の各部から添加語（形容詞的修飾語のこと）を取去つたものが、對語・補語・客語である。

猫が　鼠を　捕へた。
（対部）

校長　優等生に　賞品を　與へたり。
（対部）（補部）

少年　書を　机に　載せたり。
（補部）（補部）

熟柿　枝より　落ちたり。
（補部）

人々　散る花を　降る雪と　見誤りたり。
（補部）（客部）

（四）吉岡郷甫氏の「文語対照語法」の說を調べてみると次の通りである。

1、他動詞は叙述の役目を完うせんが爲に、其の作用を受けるもの即ち客語を要する。

主語　客語　述語
兒童　犬を　打つ。

小娘が　主語　花を　客語　賣る。　述語

2、能動の補語

不完全自他動詞は叙述の役目を完うせんが爲に、其作用の係るもの即ち補語を要する。

牧童　主語　牛に　補語　跨る。　述語（不完全自動詞の補語を持つもの）

獅子が　主語　狼に　補語　似る。　述語（同）

農夫　主語　麥を　客語　車に　補語　載す。　述語（不完全他詞の補語を持つもの）

姉が　主語　繪本を　客語　妹に　補語　見せる。　述語（同）

3、所動の補語

所動（受身のこと）の動詞は不完全自他動詞は勿論完全自他動詞でもその主語に對する叙述を完うするために必ず補語が要る。

われ　主語　雨に　補語　降られる。　述語（所動の完全自動詞の補語）

母が　主語　子供に　補語　泣かれる。　述語（同）

甲　主語　乙に　補語　超えられる。　述語（所動の不完全自動詞の補語）

馬が　主語　人に　補語　乘られる。　述語（同）

賊　主語　警吏に　補語　捕へられる。　述語（所動の完全他動詞の補語）

蛙が　主語　蛇に　補語　呑まれる。　述語（同）

生徒　主語　教師に　補語　教學を　客語　教へられる。　述語（所動の不完全他動詞の補語）

娘が　主語　母に　補語　着物を　客語　着せられる。　述語（同）

3、令動の補語

令動（使役のこと）の動詞も主語に對する叙述を完うせんが爲に必ず補語が要る。

有志者　主語　總代として　補語　上京せしむ。　述語（令動の完全自動詞の補語）

騎兵が　主語　馬を　補語　走らせる。　述語（同）

主語　補語　補語　述語
父　子をして　賀業に　就かしむ。　（令動の不完全自動詞の補語）

主語　補語　補語　述語
下女が　鶏を　烏合に　はいらせる。　（同）

主語　補語　客語　述語
頼朝　義經をして　義仲を　攻めしむ。（令動の完全他動詞の補語）

主語　補語　客語　述語
教師が　生徒に　樹を　植ゑさせる。　（同）

主語　補語　客語　補語　述語
甲　乙をして　事情を　丙に　告げしむ。（令動の不完全他動詞の補語）

主語　補語　客語　補語　述語
祖父が　父に　家を　子に　譲らせる。　（同）

令動の不完全自他動詞は能動の補語の外に更にその補語を要するのである。

(4)、形容詞及び形容動詞の補語

主語　述語
山は　高し。

主語　述語
收獲が　多い。

主語　述語
月影　明かなり。

主語　述語
こゝは　暖かだ。

右の例は主語と述語（形容詞及び形容動詞）だけで叙述が完全である。しかし次の諸例は主語・述語以外に補語が必要である。

主語　補語　述語
甲は　乙に　等し。

主語　補語　述語
それは　これと　同じ。

主語　補語　述語
父母の恩は　山より　高し。（比較の對象たる補語）

主語　補語　述語
收獲が　去年より　多い。　（同）

主語　補語　述語
太白　月よりも　明かなり。（同）

主語　補語　述語
あすこは　こゝより　暖かだ。（同）

補語　述語
道に　疎し。

補語　述語
地理に　暗し。

補語　述語
資力に　乏しい。

補語　述語
猿に　近い。

三、動詞の自他非區分別と客語・補語

品詞論にて動詞の自動他動を分たないものが、文章論に於て客語・補語を如何に扱ふかを調べてみるのである。

(一)、山田孝雄氏「日本文法論」及び「日本文法講義」の說

山田孝雄氏の「日本文法論」を讀むものは、その第一部、語論、第三章、語の性質、第二、用言、三、動詞、四、動詞の性質上の分類（二七一頁―二二一頁）の條下に於て精細なる動詞の性質上の分類に對する氏の意見を聞

くことが出來るのである。要するに氏は動詞を性質上分類して自動詞・他動詞とすることは不可能であり不必要であるとの論者である。その氏が如何なるものを補語と考へてゐるか。（第一部、語論、第四章、語の運用、第三、語の位格、四、補語　八三二頁―八六〇頁參照）

すべて用言にありては、そがあらはす觀念はある屬性をあらはせるものなるが、其の屬性が單獨にては十分に意義を完了し得ず、他の對象をまちてはじめて完成せらるゝが如き性質のものなる時は、この對象となれる語を用言の補充成分といふ。かゝる補充的成分は必ある標的なるが故に、かゝる語を標的補語又は略して補語といふ。これと賓語との差は、賓語は實質の十分ならぬ詞の賓位觀念を、補填するもの、補語は賓位觀念に依存してその不十分なる點を補填するものなり。其の緊要の度に差あるなり。（八三三頁）

1、動詞の補語

動詞には補語の要るものと要らぬものとがある。補語を要するものにても、一の補語にて足るもの、二以上の補語を要するものがある。補語は體言で、それに「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」を用ゐるのが常である。例へば次の（傍線を施した語）例がそれである。

人　草を　刈る。
川を　渡る。
母　子を　眠らす。
頼朝　義經をして　義仲を　攻めしむ。
師に　道を　問ふ。
賊　官軍に　破られき。
花に　舞ひ、　月に　謠ふ。
人に　劣る。
雨に　衣を　ぬらす。
花見に　出立つ。
東京に　出づ。
朝八時に　行く。
前へ　進む。
西へ　行く。
これと　定む。
父と　語る。
股肱と　たのむ。
曉より　雨　降る。
人より　受く。
彼より　後る。

向ふから　來る。

明日から　若菜　摘まむ。

次の三例は方便をあらはすから、補語に準じて方便格の補語といふ。（口語では「で」となる。）

刀にて　削る。

舟にて　河を　渡る。

眼もて　知らす。

2、形容詞の補語

(1)、比較を表はすもの、比較の標準を示す語を補語とする。

往事　夢より　淡く、前途　雲よりも　遠し。

(2)、場所を表はすもの、場所に關する名詞を補語とする。

所は　海に　近くて　谷　迫れり。

(3)、動作の難易をあらはすもの、この場合には動作をあらはす動詞の準體言を補語とする。

言ふに　易く、　行ふに　難し。

(4)、同等又は類似を表はすもの、その標目を以て補語とする。

甲は　乙に　等しく、　丙は　丁に　等し。

3、**副詞と「なり」との合成せる用言の補語**

太白　月よりも　明なり。

甲は　乙と　同一なり。

4、述語に立つてゐる用言が補語を伴ふときは、その補語と用言とをあはせて一の述語として取扱ふ。（「日本文法講義」三五二頁―三五三頁）

五重塔　天に聳ゆ。

老媼　茶をすゝむ。

春風　如意嶽より吹く。

人々　神山へ向ふ。

（山田氏のこの說は隨分苦しいと思ふが、これを以て修飾語との混亂を避けようとせられたものであらう。）

5、山田氏のいはゆる客語は補語と對立するものではなくて補語の中の一種である。即ち

動詞の補語中特に人又は生物と認められたるものを客語といふことあり。客語には助詞「を」を伴ふもの

「に」を伴ふもの等あり。（「日本文法講義」三五二頁）

犬　人を　吠ゆ。

父　子に　財產を讓る。

（二）、保科孝一氏「大正日本文法」の說

動詞の目的及び標準を補足語といふのである。次の傍線を施した語がそれである。

私は　本を　買つた。
猿が　木から　落ちた。

「廣日本文典」では動詞を自他に分けて、さて、動詞の目的及び標準を客語といつたのであつたが、こゝでは自他に分けないで、同じものを補語といふので、全く逆といつてよい。

(三)、藤村作氏島津久基氏合著「日本新文典」の說

大體山田孝雄氏の說に同じいのであるが少し違ふ點がある。述語の意義を補うてその叙述を完全ならしめる語を總稱して補語と呼ぶ。即ち次の例の通りである。

生徒が　本を　讀む。
その顏　猿に　似たり。
山の芋　鰻と　なる。
母親が　子供に　葉子を　與へる。
伊勢物語は　一名を　在五中將日記と　呼ばる。
朝廷　正成をして　賊を　防がしむ。
妹　姉に　死なる。
丁稚が　番頭から　頭を　なぐられた。
我等は　日本男兒　なり。
佐久間大尉　艇長　たり。
その聲　雷の　如し。
汝は　幾歲　か。
彼　何者　ぞ。
氣候が　溫く　なつた。
辯舌　流るゝが　如し。
及ばざるは　過ぎたるに　まされり。

右の例中には、山田氏が賓語と呼び、又修飾語と呼べるものをも含めてある。これ山田氏の說と異る點である。又、山田氏が補語と稱する「午後一時より」「此處へ」「鉛筆で」「東京から」は、この書に於ては副詞的修飾語の中に入れてある。

(四)、松尾捨次郎氏「國文法編纂」の說

スキントン氏の New English Grammar では補足語を極めて廣義にして左の九種類が含ませてある。

1、他動詞の直接目的　　汝敵を愛せよ。
2、他動詞の間接目的　　われらに使をおこせ。
3、受身動詞の直接目的　　彼は申込を拒絕せらる。
4、他動詞の附加目的(補足目的)　　人々ワシントンを大統領とす。

5、他動詞の補足形容詞　善は人を樂しくす。
6、自動詞の補足主語　予は其の人なり。
7、受身動詞の補足主語　奈翁皇帝に選ばる。
8、自動詞の補足形容詞　此の色は青きなり。
9、受身動詞の補足形容詞　或る人々は幸なりといはる。

この中から他動詞の直接目的、他動詞の間接目的、受身動詞の目的を除き去つたものがこゝにいふ補足語である。而してこの補足語を副詞と如何にして區別するかといふに、次の通りである。

主語や目的と同一物を表す者を補足語とし、補足語に形は似て居つても、主語や目的と同一物を表さぬものをば間接目的又は副詞的の語とする。是を根本の原則とすれば、其の結果「補足語は主要分である。なくてかなはぬものである。副詞は主要分ではない。しかし場合によつては必要なものである」といふことになる。

敵の守　堅固に　なる。
湯　水に　なる。
敵　守を　嚴に　す。
かれ　商人と　なる。
父　子を　商人と　す。

各國　日本を　正義なりと　認む。
かゝる景色をこそ　舟襲海中天と　はいふべけれ。

右の例の傍線を施した語はいづれも主語若しくは目的語と同一事物を表してゐるから、皆補足語であるところが

兄　弟に　書を　敎ふ。
露國　日本に　和を　請ふ。
雨　草木に　水分を　給す。
我が軍　遼陽に　せまる。

の例に於て傍線を施した語は、主語とも目的語とも同一ではないから補足語ではない。是等はいづれも副詞的の語である。（「國文法編纂」第三章　補足語私見　五七頁―一〇六頁參照）

（五）、吉澤義則博士「中等新國文典」の說

猫　鼠を　捕ふ。
太郎は　級長と　なつた。
面は　猿に　似たり。
二の三倍は　六に　等し。
父　家を　子に　讓る。
われ　下女に　庭を　掃かしむ。

犬　人に　打たる。

上文傍線を施せる語は、すべて客語なり。但、便宜上これを副詞的修飾語とす（一一五頁―一一六頁）

右の便宜上副詞的修飾語とするといふ所は大いに意味のある所で、後章修飾語の條で更に博士の說に聞くことにしたいと思ふが、山口義應氏も言つてをられる通り、便宜上とはかいてあるが、副詞的修飾語とする所に博士の本旨があるのであらう。

四、客語補語の區別是非

以上考察した樣に、文章法に於ける文の成分としての客語補語に就いては、文法家の間にそれ〴〵異說があつて歸する所を知らない狀態である。客語をたてゝ補語をたてない人もあれば、補語を立てゝ客語をその中に含ませて考へてゐる人もある。又客語と補語とを對立させてゐる人もある。且つ、その客語といひ補語といふものと、後章に述べる副詞的修飾語との區別の明瞭でないものも隨分多い。そこで文法學習者は如何に之を所置して考へたらよいか、自分の文法系統の中に如何に整理して收めて置いたらよいかといふことが問題となる。

由來、文法學者の論議はその人の文法系統の立て方に基くもので、その系統の立て方――つまり文法的事實に對する解釋の仕方によつて異るのである。しかしその解釋は如何やうに異ならうとも、その解釋の對象たる文法的事實といふものは事實として嚴然として存するのである。從つていづれがその文法的事實を動かぬ解釋で整理したか――妥當な理法で整理したか、尤も普遍性の多い文法的原理でその事實を組織だてたかといふことになるのである。いまこの文章論上に於ける客語・補語の問題を、これにあてはめて考へてみるに、これは單に客語補語だけを切り離して考へるべきでなく、文章の問題たる修飾語と相俟つて解決すべき問題だと思はれる。さうして始めて妥當な整理原理が發見されるのではないかと思はれる。故に本章では、如何に同じ文法的事實に對する解釋の區々であるかといふ事を示したに止めて置いて、之に對する正邪是非の論を避けることにする。

五、客語・補語の併置

所謂客語・補語にも併置といふことが行はれる。

彼は　歌をも　詩をも　作る。

彼は　歌にも　詩にも　長ず。

第五章　文の成分としての修飾語

一、修飾語の意義と種類

文の成分としての修飾語は、文の他の成分たる主語・述語・客語・補語について、その意味を限定し、自らも文の成分となる語をいふのである。修飾といふ現象の本義に就いては後に吉澤博士の說を借りてのべる。修飾語といふ名稱は英文法の Modifier に當る語である。

修飾語は普通、形容詞的修飾語と副詞的修飾語とに分けてゐる。

形容詞的修飾語といふのは文中の體言を修飾限定する語をいひ、副詞的修飾語といふのは文中の用言（及び活用連

語）若しくは副詞を修飾する語である。

形修 美しい ←主語 花が 述語 咲いた。

形修 この ←主語 花は 副修 ほんたうに ←述語 美しい。

主語 余は 形修 來る ←客語 者を 述語 こばまず。

主語 水 形修 つめたき ←補語 氷と 述語 なる。

主語 彼は 副修 大變 ←副修 丁寧に 客語 挨拶を ←述語 した。

二、修飾語に對する諸家の說

（一）、大槻文彥氏「廣日本文典」の說

この說は形容詞的修飾語と副詞的修飾語とを區別しない說であつて、單に修飾語と言つて兩者を含めてをるのである。

（二）、芳賀矢一氏「明治文典」の說

この說は形容詞修飾語と副詞的修飾語とに區分する說である。今その說に基き、吉岡郷甫氏の「文語口語對照語法」を以て足らざる點を補つて、修飾語の構成資格を說明しておかう。

1、形容詞的修飾語

(1)、形容詞及び形容動詞の連體形

若き齡は　重ねて　來らず。　（明治文典の例）

善き友と　交る。　（對照語法の例）

富士山は　皚々たる白雪を　戴く。　（明）

優勢なる敵を　斥く。　（對）

(2)、動詞の連體形

吹く風　寒からず。　（明）

歸る人が　多い。　（對）

(3)、用言を本にした連語又は節

眠れる兒は　神の　如し。　（明）

花咲く春は　一年の好時節なり。　（對）

人も住まざる野原　となりぬ。　（對）

伯母は　色の眞白な小猫を　飼つてゐる。（對）

(4)、體言に文語の助動詞の「なり」「たり」の連用形のついたもの。（對）

祖父なる人は　みまかりぬ。（對）

日本臣民たる我等は　片時も　忠君の心を　失ふべからず。（對）

(5)、體言や體言に準じて用ゐられた用言又は用言を本としたものゝ下に、文語では「如し」、口語では「やうだ」の連體形のついたもの。(對)

山の如き高浪　舟を　覆さんとす。(對)

連山の重疊せるが如き雲　入相の空に　見ゆ。(對)

鏡のやうな月が　森の上に　出た。(對)

富士山は　擂鉢を伏せたやうな形を　して居る。(對)

(6)、助詞「が」「の」「つ」が、體言の下、並びに助詞「の」が準體言の下についたもの。

我が國は　神國なり。(明)

少年の時　重ねて　來らず。(明)

天つ日影を　仰ぐ。　(對)

面白の春雨や。　(對)

多くの人々に　分たむ。　(對)

わづかの迂路なり。　(對)

國を富ますの術。　(對)

「今來むと」の歌を　詠む。　(對)

(7)、「於ける」に終る連語。(明)

「於ける」はもと動詞(實は動詞に助動詞の連れる語)であるが、今は全く助詞の「の」如く用ひられてゐる。

我國に於ける男女の數は　男約二千萬、女凡二千萬なり。(明)

2、副詞的修飾語

(1)、副詞

友人　遂に　來らず。

我が心　始めて　平なり。

(2)、助詞「に」「へ」「にて」「より」「まで」「にして」「と」「として」等を伴ふ連語は、その性質副詞にひとしく、用言又は活用連語を修飾する。

六時に　出發し、八時に　到着す。

一艦は　北へ　向ひ、一艦は　南へ　向ふ。

答案は　毛筆にて　認むべし。

鐵道を　釜山より　京城まで　布設す。

六歲にして　小學に　入り、二十二歲にして　大學を卒業す。

この時注意すべきは左の條項である。

(イ)、「よりの」「への」「までの」の如く最後に「の」あるものは形容詞的修飾語に屬す。

東京までの旅行。

學者としての松平樂翁。

(ロ)、客語補語も亦「を」「に」「と」「より」等の助詞を伴ふものである。之を副修と區別するには、副修を左の如きものと見なせばよからう。

a、動作の起る場所・方角・時間又はその度數に關するもの

東京に　行く。

南方に　去る。

六月に　開く。

二回に　拂ふ。

b、動作をなす道具材料に關するもの

筆にて　書く。

机は　木にて　作る。

c、動作の方法に關するもの

突然として　來る。

何心なしに　行く。

(ハ)、修飾語に伴ふ「にして」「として」を形容動詞が文の中間で、「にして」「として」となるものと混同しないこと。

(3)、副詞的修飾語の下には助詞を全く用ゐないことも多い。

六歳　小學に　入り、二十二歳　大學を卒業す。

風雨の夜　兄弟　牀をならべて　千古の懷を　叙す。

翌朝　戰場が原を横ぎりて　湯元に　向ふ。

(4)、「於て」の如きはもと動詞(實は動詞に助詞「て」のついたもの)であるが、今文では全く助詞の如く用ゐられ、副修につくことが多い。

今日の事情に於ては　甚だ　困難なり。

何の理由を以て　之を　拒絶するか。

(5)、形修は修飾語中の體言を修飾し、副修は修飾語中の用言又は副詞を修飾して、修飾語を加へて文は次第に複雜となつてゆくものである。

朝の　六時に　出發し　夜の　八時に　到着す。

答案は　細き　毛筆にて　認むべし。

靜に　眠れる　兒は　神の如し。

以上「明治文典」の副修說をあげたのであるが、前例に倣ひ、「文語口語對照語法」によつて、右以外の副修の資格を補つて置かう。

(1)、用言の副詞形、又活用言の連用形を本にしたもの。

病　全く　癒えたり。

雨　絶えず　降る。

民　子の如く　集る。

(2)、用言又はそれを本にした連語又は節に「は」「とも」「ど」「に」「を」「が」等の助詞(接續助詞)の附いたもの

物盛なれば　衰ふ。

死すとも　退かじ。

夜は更けたれど　車馬の往來　しげし。

日照るに　雨　降る。

價高きを　質も　善からず。

値は高いが　品は　惡い。

(3)、文の形をしてをりながら前項に準ずべきもの。

時は八月の末なり、　殘暑　尙　暑し。

人こそ知らね、　秋は來にけり。

雨が降つたのか、　土地が　濡れて居る。

(三)、山田孝雄氏「日本文法論」及び「日本文法講義」の說

I、連體語

體言の上に在りて之を修飾するもので、所謂形容詞的修飾語のことである。而してこの連體語を構成するものは次の三である。

(1)、體言

父の帽子。　大工の徒弟。　(名詞＋助詞「の」)

君が代。　梅が枝。　(名詞＋助詞「が」)

わが父。　たが本。　(代名詞＋助詞「が」)

この本。　あの人。　(代名詞＋助詞「の」)

一人の老翁。　第一の人。　(數詞＋助詞「の」)

今日のみの樂み。　これば かりのこと。　軍隊などの話。　其所までの決心。　(體言＋副助詞＋助詞「の」)

(2)、用言

(イ)、用言が連體語となるときにはその連體形よりするのが常である。

咲く花。　吹く風。　捨つる命。　(動詞の連體形)

暖き風。　ゆゝしき大事。　(形容詞の連體形)

約束したる日。　言ふべき事。　(動詞＋助動詞)

(ロ)、用言の連體形を準體言としこれに助詞「の」「が」を加へたもの。

寢るが中。　聞くが中。　重きが上。　（動詞・形容詞の連體形＋助詞「が」）

忘れじの行末。　百折撓まざるの決心。（動詞＋助動詞の連體形＋助詞「の」）

(ハ)、用言の連用形に助詞「の」をつけたるもの。

多くの人々。　ありのすさび。

(ニ)、形容詞の根幹に助詞「の」をつけたもの。

面白の春雨や。　うたての人の詞かな。　おそろしの物語や。

(ホ)、漠然たる意義を有する體言に連體語となるもの。

これはさきに主語の構成の條でのべた所であるが、その意義からいふときは上の連體語が主で體言「ところ」「こと」「もの」は從である。即ちその上の連體語に體言の資格を與へるためについた形式的のものである。

多能は　君子の恥づる所なり。

こゝに　面白き事こそあれ。

親の恩に比すべきものは　師の恩なり。

(3)、副詞

屬性の副詞が主で、その他は慣例のあるもの、いづれも助詞「の」を伴ふのが常である。

わづかの迂路。　たゞの人。　つひの別れ。　まれの細道。　わざとの事。

2、修飾語

連體語が體言に對すると同じ態度を用言に對して持つてゐるもので、用言を修飾限定する語である。所謂副詞的修飾語のことである。これを構成するものは次の通りである。

(1)、副詞

ひたすら考ふ。　かく言へり。　いと早し。　いかでよからむ。

山田氏のいふ品詞論上の副詞は、接續詞及び感動詞も含めてあるので、文章論に於ても、やはり接續副詞・感動副詞が副詞的修飾語となるのである。

これ又都會の人の樂む樂みなり。

あはれ此の身の齢十年若かりせば。

すは敵陣亂れ立ちたるぞ。

やよしばし待て。

(2)、連體語が體言であらはれた時に、副詞でこれの修飾語となるものがある。次例の「唯」「稍」がそれである。

唯　半日の路ぞかし。

その所より稍　西の方によりて見ゆるは茱山なり。

又、副詞を以て連體語とした時にも、更に上に副修があらはれる。次例の「たゞ」がそれである。

たゞ　かりそめの旅の空。

この「唯」「稍」は體言を修飾するのであるから當然連體語(形修)に入れるべきであるのに、山田氏の文法では修飾語(副修)の方に入れてある。これ、「唯」「稍」は品詞論としては副詞に入れてあるのであるから、而して副詞は全部修飾語(副修)となるのであるからであらう。けれども、修飾語(副修)は用言を修飾限定するものだといふ定義とは矛盾する譯である。さうなると、副詞的修飾語と形容詞的修飾語との區別は何を以てするかといふ問題に逢着するのである。

(3)、形式副詞

これは「日本文法論」の修飾語の條には論じてないのであるが、同書の副詞の條下「將に退化せんとする副詞につきて論ず」(五三九頁―五四七頁)の所に論じてある。これも副詞である以上當然文章論では修飾語となるべきである。「ごと」「まゝ」「まに〳〵」「すがら」「から」の如きがその例である。

花のごと世の常ならば。(古今集)

我心のまゝにとりなほして見むに。(源氏物語夕顔)

君がゆくこしのしら山しらねども雪のまに〳〵あとはたづねむ　(古今集)

あしのやのなだのしほやき我なれや夜はすがらにくゆりわたらむ　(金槐集)

いとゞしくきくにもぬるゝ袂かなうきみのからや雨のもるらむ　(能宣集)

「さてもこれらの詞の處置につきて舊來の說を見るに、確たる定見を立てしものは富士谷氏と大槻氏となり。富士谷氏は脚結のうちに入れられ、大槻氏は接尾語のうちにいれられたり。この二說のうちに於いて吾人は寧富士谷氏のに傾くなり。何ゝなれば大槻氏は單語たる資格を與へられざりしに吾人はこれを一の單語と認むるが故になり。何故に之を單語と認めたるか……(右の例の)如く、これらと上にある體言との間に助詞の入りてあらずや。そも〳〵接尾語といふものにつきて大槻氏の完全なる說明なきが故に明かなることを知るに苦むといへども、之を單語の外に置かれたるを見れば單語としての價値なきものと認められたるはいはでもしるきことなり。こゝに於いて疑問あり。單語と單語ならぬ接尾語との中間に立てる豆爾乎波はこれ何者なるか。「まゝ」「すがら」が接尾語ならば、之を體言に連絡する「の」「は」は又接尾語にあらずや。吾人は一旦獨立した る單語とたてたるものが、それより下級なる接尾語の補助に立つといふことは冠履處を異にしたるものと思ふが故にこれを以て一の單語と認め、これと上の體言との連絡をはかりたるものは助詞「の」「は」なりとす。……其の觀念缺乏せるが如く見ゆるが故に之を補充する必要ありて體言又は用言を之に補塡することなほ形式用言に於けるが如きなり。この故に余はこの類のものを以て形式副詞と名づけむと欲す。……(五四〇頁―五四二頁)

なほ山田氏は用言の修飾語をその對象の差によりて三種に分けてをられる。

(1)、情態の修飾

柿の實も　おひおひ　赤くなる。

この間の芝居は　大層　面白かつた。

(2)、程度の修飾

その花の形は　頗る　長し。

いと　遙に　見ゆ。

(3)、陳述の修飾

げに　品性は何者よりも必要なりといふべし。

蓋し　これ實に最難事ならむ。

これは品詞論の所で本講にも引用した山田氏の副詞の分類と相應するものなのである。

三、修飾の本義と客語・補語・修飾語の關係

以上諸家の說を煩はしいまであげて、如何なるものが修飾語と考へられてゐるかを明かにした。次に進んで、それでは文章論に於ける修飾といふ現象(文法的事實)は、之を如何に解釋するのが最も妥當であるかといふ問題に入らなければならない。この問題はさきにも述べた通り、單に修飾語だけの問題ではなく、客語、補語にも關係のある重要問題である。この問題を解くに當つて、今日の文法學者の中で尤も妥當な說を持してをられる吉澤義則博士の主張に從ひたいと思ふ。博士のこの點に關する說は、「中等新國文典別記」の文章編、第一章文の成分(一四七頁―一五九頁)に出てゐる。今これに基いてその說の大要を左に述べてみよう。

まづ始めに形容詞と形容詞的修飾語の區別に就いて考へてある。(博士は修飾語を形修と副修とに分けて考へて居られることは言ふまでもない。)

形容詞といふのは單語につけた品詞上の名目であつて、形容詞的修飾語は單語の外に連語句をも含む所の文章法上の名目であるから、その立脚地を異にして居るのである。又形容詞は文章法上形容詞的修飾語となる外に連語の役をもする。形容詞的修飾語は又形容詞ばかりから出來てゐるものではない。動詞でも副詞でも、連語でも句でも之になり得るのである。

次に副詞と副詞的修飾語との區別は如何。

(一)、副詞は品詞上の名目であつて、副詞的修飾語は文章法上の名目である。此の點は形容詞と形容詞的修飾語との區別と同一である。

(二)、副詞は文章法上大抵は副詞的修飾語となるのであるが、稀に形容詞的修飾語となることもある。

たつた三里の道。

それよりやゝ東に見ゆる山。

の「たつた」「やゝ」がその例である。副詞的修飾語は副詞の外にも連語や句で其の役目をするものが非常に多い。此の點も形容詞と形容詞的修飾語との區別とほゞ同樣で、其の程度が違ふだけである。つまり、形容詞と形容詞的修飾語とは一致點が少く、不一致は多いが、副詞と副詞的修飾語とは一致點は多く、不一致點は少いのである。圖で示すと次の樣な關係である。

更に第三に修飾語に對立する客語や補語といふものを特別に設けないで、すべて之を副詞的修飾語の中に含めて考へてある。尤も、「中等新國文典」の方では、所謂世の客語や補語を合せて客語といひ便宜之を副詞的修飾語とすると してあるが、これ勿論便宜的の手段であらう。博士の本旨は「客語でも補語でも結局は述語を修飾限定するから當然之を全部副詞的修飾語の中に含めてよい」といふにあるのである。以下はその本旨に對する博士の說の大要である。

世に云ふ補語の說明といふものを見るのに、副詞的修飾語との區別が明かでない。而して說者自身もその不完全なのを認めて「補語は體言でなければならない」と附言して副詞的修飾語との區別を明かにしようとしてゐる。然し一語一語の性質を論ずるのは品詞論のことで、文章論では語と語との關係――それが文章の成分として用ひられたるものとして、その成分間に如何なる關係があるかといふことを說かなければならない。かの所謂補語も修飾語も被修飾語の意義を限定する點に於ては何の差違があらう。換言すれば、補語も修飾語も被修飾語に對する關係は毫も變らないのである。補語の例として最もひろく擧げられてゐる例

氷　水と　なる。

に於て、「水と」は「なる」の述語に對して補語であると說かれてゐる。その理由は、「氷　なる」だけでは意味が明瞭でない。「なる」は意味が不完全である。「水と」といふ標準を加へて始めて意味が完全して明瞭となる。だから「水と」は「なる」の補語であるといふのである。若しさうであるならば

墨は　黑き物なり。
人は　萬物の靈なり。
女は　弱きものなり。

の例に於ける「黑き」「萬物の」「弱き」はどうであらう。又

龜の歩みは　蝸牛より　早し。
飛行機の飛ぶこと　鳥の飛ぶより　早し。

右の二文に於て、前文はそれから「蝸牛より」を除いては意味をなさないが、後文はそれから「鳥の飛ぶより」を除いても意味は完全してゐる。それならば、「蝸牛より」は補語で、「鳥の飛ぶより」は補語でないといふのか。又

湯　ぬるく　なる。
室を　綺麗に　する。

に於て「ぬるく」「綺麗に」は體言でないから補語でないといふのか。しかも、「ぬるく」「綺麗に」といふ語の「なる」

「する」に對する關係は、前の「氷　水と　なる」に於ける「水と」の「なる」に對する關係とどういふ相違があるのであらうか。「水」は名詞である。「ぬるく」は形容詞である。「綺麗に」は副詞である。これ等を名詞・形容詞・副詞に別けるのは品詞論のことである。その區別は文章法上に何の必要もないことである。語義の不完全を補ふ語を補語といふことに就いては異存はない。しかし從來說かれ來つてゐるやうな意味に於て語義の不完全を補ふ語を補語として用ゐるのは全然誤謬である。（かゝ論じて、博士は別の意味に於て補語を設け、之を語義の不完全を補ふ語と言はれるのである。）

以上は誤謬として、なほ客語・補語・修飾語を區別する必要がありとしたら、それをきめる一つの手がかりがある。それは限定語と被限定語との位置の關係である。英語に於ても直接客語（direct object）最も述語に近く、間接客語（indirect object）之に次ぎ、修飾語が最も遠い。國語でも若し之に類することがあつたならば、此等の成分の順序を定むる上に之を分別しなければならない。從つて之を理由にして三者を區別することが出來る譯である。しかし國語に於ては、「限定する語は限定せられる語の前に來る」といふ事實以上に何等三者の順序を規定することは出來ないのである。さうなると、語の順序の上からも、客語・補語・修飾語を分別する必要もなければ、區別する可能性も無いのである。

問題は次に進んで、さらば客語・補語（補語中には間接客語をも入れる人があるが、こゝにいふ補語はそれを含めない。）修飾語の三語に分ける必要が無いとしても、少くとも客語と他の二語（補語と修飾語）とを區別する必要はないであらうか。卽ち文の述語が受身の形をとる場合に於て、もとの文の客語は受身の述語をもつ文の主語となり得ることがあるが、補語や修飾語にはかゝる能力がないことはないか、といふ問題である。例によつていへば、

人　犬を　打つ。

犬　人に　打たる。（「打たる」は前文の「打つ」を受身の形にしたもの。「犬」は前文の客語で本文の主語）

賴朝　義經をして　平家を討たしむ。

義經　賴朝に　平家を　討たしめらる。（「討たしめらる」は前文「討たしむ」を受身の形にしたもの。「義經」は前文の客語）

この問題は芳賀博士の「明治文典」にも觸れてあつた問題である。而してこの問題は自ら動詞の自他の問題と密接な關係があるのである。

英語や獨逸語等で動詞の自他を區別しなければならないのは、受身の形をとると取らざるとの相違があるからである。然るに國語に於てはこの點に就きて自他を區別する必要はないのである。（本講、動詞の自他の條一一六頁―一一七頁參照）國語では自動詞も他動詞も受身の形をとることが出來るのである。而して述語である他動詞が受身の形に轉ずるときにはその客語は多く主語となり得るものである。しかし、

時計　八時を　報ず。

人　虹を　見る。

小兒　傷を　蒙る。

の如き文の述語を受身に變じて、

八時　時計に　報ぜらる。
虹　人に　見らる。
傷　小兒に　蒙らる。

として用ゐられる事はない。さうしてみればこれも畢竟は慣例の有無に因るので、他動詞とても必ずこの能力があるとはいへないのである。しかし又、

(一)、受身の形をとるに他動詞に其の例外少く、自動詞に例外多きこと。
(二)、補語・修飾語が轉換の際の主語となることの不可能であること。

この二つは確に事實である。故に、動詞の自他を區分すべき理由はこゝに存するのであり、客語と補語・修飾語とを別つべき理由もこゝに存するのである。この事はやがて述語と客語及び補語修飾語との關係の相違あることを示せるものでなければならない。けれども右の二事實中の(一)例外の多少の如きは畢竟程度の問題である。又(二)の主客轉換に就いても、たとへ客語を識別したとしても、客語にも主語となり得ないものゝあることは前例の樣であつて、わざ〳〵分けた客語の中にも例外をとかなければならない。いづれよりするも困難な問題である。むしろ、客語・補語・修飾語を一括した廣義の修飾語を設け、その中に例外のあることを說いた方が便利で合理的である。かの客語を設けながら間接客語を離して之を補語とするが如き說は最も理由のないことである。

補語を設けることは必要である。しかれども、こゝにいふ補語は從來諸文法書に說かれた所謂補語とは全く別物である。こゝにいふ補語の如何なるものなるかを說かんとするためには、先づ述語の意味の不完全といふことを說かなければならない。この述語の意味の不完全を補ふといふことは從來もうるさいまで說かれた所であるが、こゝにいふ述語の意味の不完全といふことは從來の諸說とは全く異つてゐて、この點に從來の補語とこゝにいふ補語との相違點があるのである。

試みに從來の述語の意味の不完全とそれを補ふといふことは如何なることかと見るに、

氷　水と　なる。

に於て「氷〇〇なる」とのみでは「なる」の義が不完全で意味をなさぬ。故にこの「なる」の不完全なる意義を補ふために、「水と」といふ語が必要である。即ちこの「水と」が補語である、と說くのである。若し右の如くすれば、

氣候　暖く　なる。
人　學問を　なす。

の例の「暖く」も「學問を」も共に補語でなければならぬ。更に、

象は　大なり。
雀は　四十雀より　大なり。

の例の「大なり」は元來所謂不完全なる語ではない。右の二例の如き場合に於ては所謂不完全である。又、

人　あり。
人　車上に　あり。

右の二例に於て「車上に」は補語であるか。「人あり」だけでも意味は完全してゐるから「車上に」は補語ではないと

いふか。更に進んで

二と　三とは　五なり。

といふ例を見るに、この文に文法上の誤謬はない。之を若し誤謬といふならば、それは意味の上のことである。數學上の問題である。これを推して考へてみるに、前例の「四十雀より」と「大なり」との關係と、「車上に」と「あり」との關係と其の相違は何處にあるか。「雀は大なり」といふを不完全とし、「人あり」を完全といふのは意味の問題である。理義上の問題である。文法上は何等不完全なる點も何等不合理なる點もないのである。從來文法家の說いた完全不完全といふのはこゝにいふ意味や理義上の完全不完全で、これ實に文法以外の問題を以て文法に援せんとするものである。

こゝにいふ不完全の意味は右の如きものとは異るので、

そは　おもひもかけ　ぬ事なり。

外山の櫻　散りや　せむ。

大變に　氣に　入つた。

右の例に於ける「おもひも」「散りや」「氣に」はこゝにいふ補語であつて、この場合「かけぬ」「せむ」「入つた」の意味を不完全といふのである。「おもひもかけぬ」「散りやせむ」「氣に入つた」はそれ〴〵「意外」「散る」「好む」の義を表はしてゐる語で、語の數は多いけれども表はしてゐるのは一觀念である。即ちそれ〴〵助詞の「も」「や」「に」が二語の間に入つて來てをるので形に於ては此等を熟語といふことは出來ないけれども、意味に於てはたしかに熟したものである。「かけぬ」「せぬ」「入つた」だけでは「意外」「散る」「好む」の義をなすことが出來ない。即ち「かけぬ」「せぬ」「入つた」は此場合に於て意味が不完全である。一觀念の一部分しか表はしてはゐないのである。勿論辭書に出てゐる語義を表はしてはをらぬ。「氷　水となる。」に於ける「なる」は一語としては意味が不完全なのではない。「なる」の表はすべき觀念は完全に表はされてゐるのである。唯「氷水となる」といふ一文章として理義上「水と」がなければ意味が不完全といふにすぎない。しかしこゝにいふ意味の不完全とは一語として一觀念として不完全なりといふのである。この如き補語は必ず被補語の直上に來てその兩語間に文の他の成分は入つて來ない。だから語の位置の上からこの種の補語を說く必要はあるのである。又この補語は客語・修飾語とも紛るゝ虞はないのである。

以上の意味に於て、客語・補語・修飾語は分けるべきものである。こゝにいふ客語・補語・修飾語の分類を他の從來の分類と對照表示してみると次の樣になる。

- 修飾語
  - (一)修飾語（從來の客語の一部・補語・修飾語を含む。）
  - 客語（主客轉換の際主語となり得る修飾語で、從來の客語の一部である。）
- (二)補語……（從來說かれなかつた意味の補語）

以上で吉澤博士の「中等新國文典別記」に見えてゐる說は終りであるが、これでもつて、客語・補語・修飾語の關係の本質が如何なるものであるかゞ明瞭になつたことゝ思ふ。即ち

(一)、文の成分中から主語・述語を除いたものは修飾語と補語との二つに分れる。（尤も文の成分としての接續語と獨立語とはまだ述べてゐないから暫らく除外する。）

(二)、補語は從來の說とは全く違つた意味で立てられたものである。
(三)、修飾語は從來の所謂客語・補語・修飾語を全部含めての名稱である。而してこれが二つに別れて修飾語と客語とが對立する。
(四)、修飾語中の客語は從來の所謂客語の一部分で、主客轉換の際に主語となり得るものだけを言ふのである。
(五)、修飾語中の修飾語は從來の所謂客語中から(四)の客語を除いた殘りの客語と、從來の補語と、從來の修飾語との三を含むのである。

今日の所、この博士の說が最もすぐれた、文法として合理的な說であると信ずる。

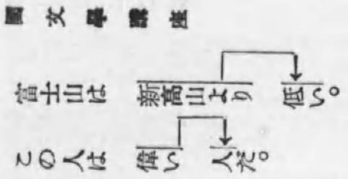
右の新しい意味での補語に對立する修飾語が、從來の所謂客語・補語・修飾語の全部を含んでゐるといふことは上來引用した說明で分明とは思ふが念のため、蛇足を加へておく。

文章はその述語の種類によつて
(一)、何が　どうする。
(二)、何が　どんなだ。
(三)、何が　何だ。(何が　何のやうだ)

の形になることは前に述べたが、要するに文章はこの主語と述語との關係が完全明瞭になればよい譯である。從來○語・補語・修飾語が述語の上に必要だといふ場合は、「どうする」「どんなだ」「何だ」の意味が主語に對して如何なる意味だか明瞭でない場合であつた。即ち

氷が　○○　なる。
氣候　○○　なる。
部屋が　○○○　なる。
私が　○○　買ふ。
富士山は　○○○○○　低い。
この人は　○○人だ。

の例で「氷」「氣候」「部屋」が何になるか分らぬ。「私」は何を買ふか分らぬ。(富士山)は何より低いのか分らぬ。「この人はどんな人か分らぬ。即ち「なる」はどんなものになる時でも使へる語であり、「買ふ」のは何をでも買ふ事であり「低い」は何より低くても(富士山は高い山だとしての例だから當然こゝは○○○○○が比較を示すのである)よいし、「人だ」はどんな人でもよいのだ。それを圖點の中に入るべき語が限定して一つにきめるのである。それが修飾作用である。



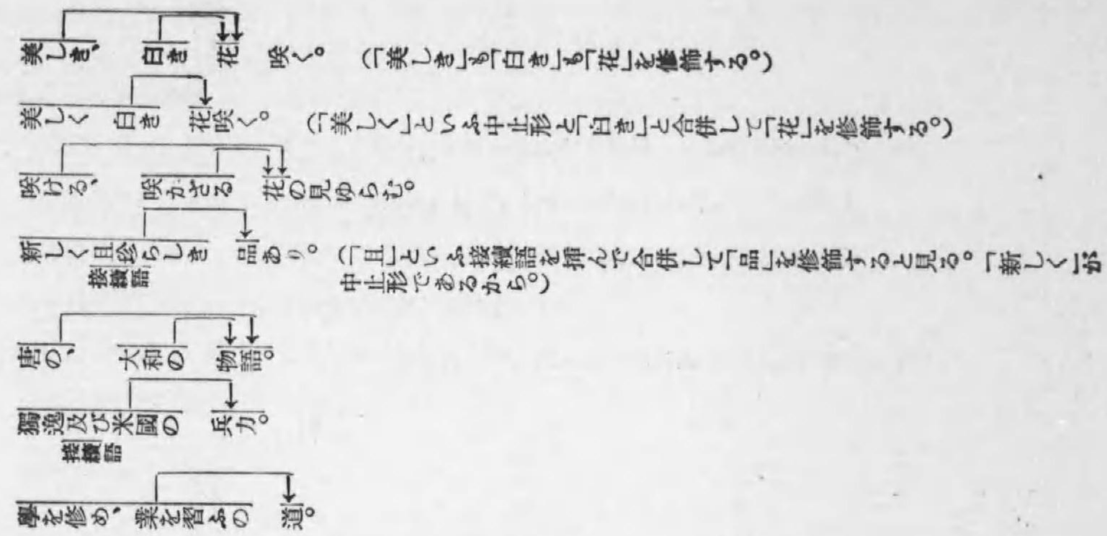
右の例の修飾關係に差別はない筈だ。これが修飾の本義なのである。

「なる」の限定が「氷と」でも「暖く」でも「綺麗に」でもその限定關係に差別はない。限定の本義に變りはない。これを根本問題として銘々考へる必要がある。

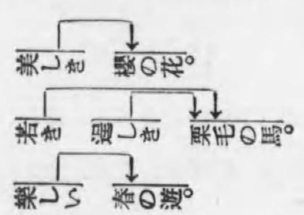
四、修飾語の併置

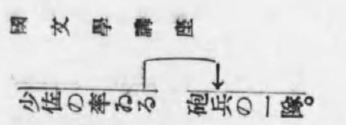
(一)、所謂形容詞的修飾語の併置

修飾限定される語が同じい時には、形修が二個以上併置されることがある。

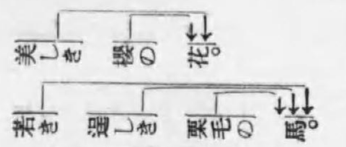


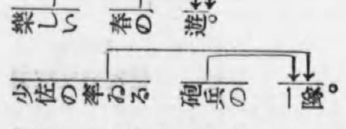
文法家によつては次の如き例を以て、形修が連語を形容してゐるのだと說く人がある。

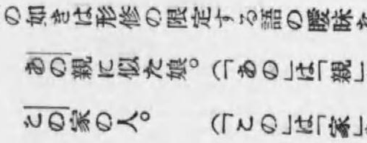


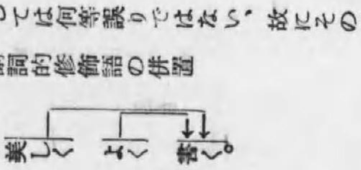


併しそれは誤つた見方だと思ふ。即ち修飾の仕方は次の樣でなければならぬと思ふ。









助詞「の」の使用法を誤つて考へない樣にする必要がある。個々に下なる體言を限定するのである。

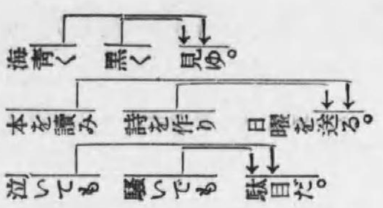
又、次の如きは形修の限定する語の曖昧なる例である。

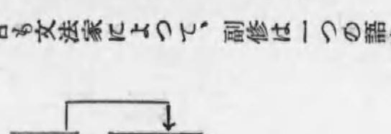
あの親に似た娘。（「あの」は「親」を修飾するか、「娘」を修飾するか不明である。）

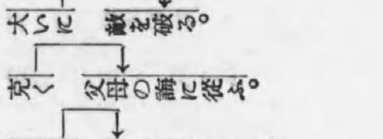
この家の人。　（「この」は「家」を修飾するか、「人」を修飾するか不明である。）

文法としては何等誤りではない、故にその限定する所を前後から判斷しなければならない。

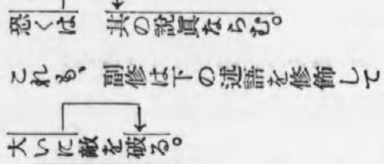
（二）、所謂副詞的修飾語の併置

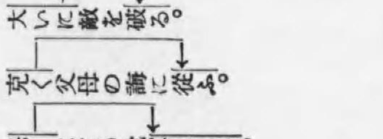


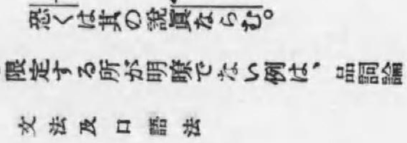




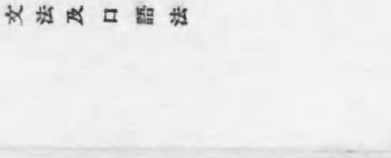
この場合も文法家によつて、副修は一つの語を限定するばかりでなく、連語や節を限定することがあると說く人がある。







しかし、これも、副修は下の述語を修飾してゐると說くべきであらうと思ふ。



副修の限定する所が明瞭でない例は、品詞論の副詞の條下に擧げておいた。

第六章　文の成分としての接續語及び獨立語

一、接續語

品詞論で述べた接續詞が文章の中へ入つて來た時、文章論では之を接續語として他の成分と區別するのである。特に之を成文中より區別して考へて居らぬ文法家もある樣であるが、接續詞を品詞論で副詞の中に入れて論ずるなら別であるが、品詞論上一つの獨立の品詞とするならば、矢張り文章論でも接續語と立てゝ考へるが合理的であらうと思ふ。

金剛石　接續語　及び　紅玉は　寶石なり。

花　接續語　及び　紅葉の色を見よ。

文を學び　接續語　且つ　武を習ふ。

冬となりぬ。　接續語　されど　雪は未だ降らず。

二、獨立語

文章論上獨立語と立てて接續語と共に文の他の成分と區別するものが二つある。

(一)、呼掛の語

これは山田氏の所謂呼格に立てる語のことであつて、同氏は「呼格とは文句の中にありて、他の語とは何等の形式上の關係なしに立てるものにして、その對象又は對者を呼びかけて指定するによりてこの名あり。呼格に立つを得る語は體言に限れり。而してそがあらはるゝには單獨にてあらはるゝことあり、助詞を伴ふことあり」(「日本文法講義」三三〇頁)と言つてをられる。

山口君、はやく來たまへ。

三郎、お前もう復習をすましたの。

太郎や、一寸御出で。

香をだにぬすめ、春の山風。

きりぎりす、いたくなきそ。

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。

瓢や、瓢や、我汝を愛す。

苔の缺よ、かわきだにせよ。

體言が單獨に呼掛の語となつてゐる時には體言だけ、接尾語が加はつてゐるときには接尾語も加へて、修飾語が上にあるときは修飾語も共に、助詞が下にあるときはその助詞も併せていづれも獨立語とするのである。

古池や、蛙飛び込む水の音。

菊の香や、奈良には古き佛たち。

の「古池や、」「菊の香や」はこれを獨立語と見るべきであるが、

さゞなみや、志賀……

更科や、姨捨山……

等は同じ形でもこれは修飾語と見るべきが可であるが、獨立語と見るべきが可であるかに就いては議論もあるであらう。こゝでは修飾語と見て置きたいと思ふ。

なほ上述の獨立語を持つ文には、主語の表れないことが多い。呼掛の語と主語とはその内容を同じくする場合が多いので、從つて主語が略されるのである。しかし呼掛ける對象と主語とがちがふ場合には、右の例の中でも主語が出てゐることに注意を要する。呼掛の語を主語と誤らない樣にしなければならない。吉岡郷甫氏は「文語口語對照語法」の中で、この呼掛の語が主語らしく見えるのは、呼掛の語を用ゐるのは多く命令又は禁止の文であつて、命令・禁止の文ではその性質が對者に向つて言ふものであるところから動作の主たる主語を省いて用ゐるのが常であるところから來てゐるのであらうと言つてをられる。さういふ點も慥にあるが、上に呼掛の語を置くのは必ずしも命令や禁止の文と限つた譯ではないからこれも注意を要する。

(二)、感動詞

あゝ、悲しい哉。

あはれ、一生の思ひ出にせむ。

いざや、歌はんもろともに。

南無三寶、しまつた。

あら、大變ですよ。

こら、お前は誰だ。

右の例にあげたやうに感動詞はすべて之を獨立語として、文の他の成分とは切り離されたものとして考へるのである。尤も、品詞論の條下で述べた樣に、之を副詞として扱ふ學者もあるので、その人にとつてはこれは獨立語ではなくて修飾語となることは、接續詞の場合と同樣である。本講では、感動詞を獨立の一品詞と立てゝ置いたのであるから、文章論でもこれを獨立語として扱ふのである。

獨立語は文の成分から獨立してゐるといふ意味で名づけられたものであるから、文の成分でないと說く人があるかも知れない。一應尤もである。けれどもそれは文の主要部に關係がないといふ意味に考へて、本章ではやはり文の成分といふ名稱の下に含めて置くのである。

三、枕詞

「更科」や「さゞなみや」といふやうな語を出したから、ついでに枕詞及び序の詞について一言して置かう。枕詞を文章論上如何に扱ふかと言ふに、これは大槪氏の「廣日本文典」(二五九頁―二六二頁)にも說いてある通り修飾語と見るべきものと思ふ。同書にはその修飾の對象から枕詞が次の樣に分けてある。

(一)、名詞を修飾するもの

ひさかたの天。

あらがねの土。
あしびきの山。
あらたまの年。
ちはやぶる神。

(二)、動詞を修飾するもの

刈菰の亂るゝ。
梓弓引く。
玉櫛笥明く。

(三)、形容詞を修飾するもの

ぬばたまの黑き。
眞木柱太き。
菅の根の長き。

(四)、副詞を修飾するもの

しのゝめのほがら〳〵と。
つがの木のいやつぎ〳〵に。

これはその一例にすぎない。併しその修飾型はこれで分るであらう。

なほ枕詞の成立や本義ならびにその使用方法等は文法に直接の關係の無いことである。文法に於ては唯その品詞的關係と文章的關係とを明かにして置かねばならない。枕詞を品詞論から眺めていづれの品詞に入れるかといふに、枕詞そのものとしては何れの品詞にも入れることは出來ない。これは品詞としては特別の範疇に屬するものである。除外すべきものである。しかし、枕詞を成立させてゐる單語の一々はこれを品詞に分解することが出來る。つまり枕詞は單語の集つて出來た一種の連語であつて、限られた用法に於てのみ使用される特殊的のものである。次に枕詞を文章論から眺むれば、上に述べた樣に修飾語と見るのである。しかも、その修飾關係もある限られたる範圍を出ないので一般的の文章に使用されるといふ譯ではない。即ち一般的の修飾語ではなくて、ある定つた語をのみ修飾する語である。要するに品詞論から見ても文章論から見ても枕詞は一種特別の語である。

なほこの枕詞に類するものに序の詞といふのがある。これも文章論上からみて修飾語である。

思ふどち(序詞)園居せる夜は唐錦(序詞)たゝまく惜しきものにぞありける。(古今集)

此の歌若し(序詞)青柳の絲絶えず、松の葉(序詞)の散り失せずして、まさきの葛長く傳はり、鳥の跡(序詞)久しくとどまれらば、(古今集序)

浪間より見ゆる小島の濱(はまひさぎ)楸久しくなりぬ君に逢はずて。(拾遺集)

第七章　總主(文主)

一、總主とは如何なるものか

總主の說をはじめて世に出したのは故草野淸民氏である。氏は「帝國文學」第五卷第五號(明治三十二年五月號)に「國語の特有せる語法——總主」と題してこの說を主張したのである。(尤も明治三十年五六月頃の同紙上に「所見」と題して文中假文主といふ名稱で同氏が一言してをられるさうである)その說によると總主とは次の如きものである。

動詞形容詞に對して其の主語あると同じく、主語と說明語とよりなれる一つの文に對して更にその主語がある事がある。例へば

象は　體　大なり。
熊は　力　强し。
仁者は　命　長し。

等の「象」「熊」「仁者」は皆「體大なり」「力强し」「命長し」等の一つの文に對して更に主語たる資格を持つてゐるものである。何故かといふに「象は體大なり」「熊は力强し」「仁者は命長し」等から「象」「熊」「仁者」等の再度の主語を取去る時は、殘りは「體大なり」「力强し」「命長し」となつて、文法上の文の形は完全に之を具へて居るにも拘らず、意義に不足を生じ、其事の主たるべき「象」「熊」「仁者」等の名詞を俟つて始めて意義の完全なる文をなすからである。これは「うら(心)やまし(疚)」「て(質)がたし(堅)」などの一つの文が轉じて一つの形容詞となり、實際に用ひられる時には此の上に更に主語をとるのと一般である。故に

富貴は　羨し。

の「羨し」に對して「富貴」を主語とするのが至當であれば、「體大なり」「力强し」「命長し」に對して「象」「熊」「仁者」を主語といふも不當ではあるまい。この類の再度の主語を總主といふのである。

而してこの總主は決して之を客語と混同してはならないのである。

熊は　力　强し。　↓　熊には　力　强し。
支那は　人口　多し。↓支那には　人口　多し。

の如く總主の下に助詞「に」を加へると、「力」「人口」が本當の主語になつて、「熊」「支那」は客語の地位に立つので、これが總主となつてゐる時は、その下に「に」の如き助詞が省かれた語法と思ふかも知れないが、これは誤謬で、適當に「に」の語を補ひ得ざる實例があるばかりでなく、「に」を補ふことによつて全文の意味が異つて來るといふが如きは、補ふべからざるものを補ふ故である。「支那は　人口　多し」は「支那」が主である。「支那には　人口　多し」は「人口」が主である。これを同一視することは出來ない。故にこれは助詞の省略された語法とは見られない。從つて、總主は決して客語と混同してはならないのである。

更にこの總主は又主語と混同してもならないのである。

支那は　人口　多し。
酒は　害　あり。

の「支那」「酒」は全文中で主語に酷似した價値を有することは直覺的に分る筈である。而して「多し」「あり」といふ說明語に對しては他に「人口」「害」といふ語格上の正當の主語ある點と、「支那は多し」「酒は有り」といつただけでは、